【完結】（白面）ノ　剣【神様転生】

器物転生

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはダークサイドの転生者が、ヒーローサイドに潜り込んで、希望を圧し折るおはなしです。　能力：人を殺すための剣

目次

蒼月潮は獣の槍を引きぬいた　1
石食いは大ムカデの本性をあらわす　12
姉ちゃんは鬼を斬り、人を斬った　25
光覇明宗は殺人の罪を裁く　41
斗和子さんによる獣の槍破壊実験　54
ここから日本縦断の長い旅が始まる！　65
伝承候補者は婢妖に取り憑かれている　76
蒼月潮は魂を食われて獣と化した　88
剣造りの娘は灼熱の炉に身を投じた　98
蒼月潮はジエメイの死を受け入れる　111
白面の使いは正体をあらわす　123
造剣の名工は剣を打った　134
希望より絶望へ至る　146
おわり　156
あとがき　169
設定　白面の剣まとめ　174
番外
【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その１　177
【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その２　182
【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その３　187
【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その４　194

蒼月潮は獣の槍を引きぬいた

オレは蒼月潮、寺の住職の息子だ。
その住職であるボケオヤジに片付けを押しつけられて、オレは土蔵の古本を運び出していた。土蔵に溜まっているホコリは凄まじく、本を軽く叩いただけでモワッとホコリが舞う。窓のない土蔵は暗く、入口から差し込む光が頼りだ。ホコリの層が重なっている事もあって、足下は分かりにくかった。
そのせいで、古本を運んでいたオレは足を引っかける。古本がバラバラと床に落ちてホコリを巻き上げ、オレは床で顔と膝を打ちつけた……床に面して扉がある。どうやら下に何かあるらしい。土蔵の中に、こんな扉があるなんて知らなかった。ちょっとした物置きになっているのか、それとも地下に通じているのか。そんな事を考えながらオレは扉に手をかけ、全身の力を使って引っ張る。すると扉の留め具が外れ、オレは壊れた扉ごと地下へ落下した。
「うえ～、地下室たあ。オドロイたなあ」
そこにある……なんとも言えない圧迫感を感じた。振り返ってオレが見たのは、虎のようなものだ。全身から金色の体毛を生やし、頭部から金色の長い髪を伸ばしている。顔の鼻から下が、猿のように突き出ていた。ただし、その獣は猿なんてものじゃなく、人が中に入れるほどの大きな体躯だ。動物園でも見た事のない、金色の獣だった。
「人間か……」
ゴロゴロと唸るように獣が喋った。それに驚いたオレは後退る。後退って、床に尻を着いた。人のように喋るからと言っても人ではなく、虎のように見えるからと言っても獣ではない。それは今まで、オレが出会った事のない生物だった。未知との遭遇にオレは体が震える。そのまま謎のバケモノに襲われるかと思ったオレだったけれど、バケモノは動かない……槍だ。肩をつらぬく槍に体を縫い留められているため、そこからバケモノは動けなかった。
「どうした。今じゃ、そんなに妖怪が珍しいのか？　ならばついでに、自由になった妖怪も見せてやる」

見た感じ凶悪そうなバケモノを縫い留めているのは、槍だった。ついさっきオヤジと殴り合いになる前に、オヤジに聞かされた槍だ。うちの寺が祀っている、「妖怪退治の名人のありがたーい槍」なのだろう。御神体が本殿にも無いと思ったら、こんな所にあったのか……ただし、妖怪付きで。

「――この槍を抜きな、小僧」

床に尻を着いていたオレは、立ち上がる。腰を引いた及び腰で、一歩ずつバケモノに近寄った。バケモノの肩に突き刺さった槍は、ちょっと力を入れて引けば抜けそうだ。しかし、どんなにバケモノが足掻いても、不思議なことに槍は抜けない。まるで槍が意思を持っているかのように、地下室の岩壁にバケモノを縫い止めていた。

「そ……それをオレが抜いたら……お前は如何するつもりだ!?」

「フフン！　知れたことよ！　まずオノレを食らって昔のように、この辺の人間どもを地獄へ引きずり込んでくれるわ！」

その言葉を聞いて、見知った人々の顔が頭に浮かんだ。ついついカッとなったオレは、バケモノに突き刺さっている槍を蹴る。ガンッガンッと蹴って押し込んだ。当然、バケモノは「うぎゃあああああ」と悲鳴を上げる。その時、バケモノの太い腕がシュッと動いた。

危険を感じたオレが頭を引っ込めると、バケモノの爪が額に掠った。額に弱い痛みを感じる……危うく大怪我を負うところだった。その仕返しとしてオレは、ギュウウウと槍を押し込む。するとバケモノは「うひゃあああああ」と声を上げて痛がった。ふんっ、いい気味だ。そう思ったオレはバケモノから離れ、傾斜が急な階段に足をかけた。さて、上に戻るか。

「あ～！　まてまて!!　あ～、なんだ！　わしもちょっと言いすぎたよ。なんせ５００年ぶりの好機だったんでね……どうだ、こうしよう！　この槍を抜いてくれたら、なんでも言うことを聞いてやる。わしも人間に恐れられた妖怪よ。約束は守る！」

「それで自由になったらどうすんのよ？」

「そりゃー、まずお前を食らって……」

「人の命が食いモンにしか見えない妖怪を、誰が野放しにするってん

だよ！」
　話しにならない。力説するバケモノを無視して、オレは階段を登った。そうして床に面した地下室の四角い入口から、暗い地下室を見下ろす。そこからバケモノは必死の形相でオレを呼んでいた。だが、オレはバケモノの声に耳を貸さず、四角い入口の上に物をドサドサと積み重ねる。
「おっ、おい！　イノチってなんだよ！　動けるってコトだろ？」
「お前は動けるように、食わないって！」
「他の人間はお前にカンケーないだろっ!!」
「なんでもしてやるぞ！　気にいらんヤツでも、なんでも殺してやるから!!」
「てめーが自殺しろっ！」
　あのバケモノにとって、動かない死体は「物」なのだろう。あの口振りから察するに、生きている人間も「食料」としか思っていないに違いない。バケモノだからバケモノらしく、人間の尊厳を少しも分かっていなかった。仏さんに手を合わせるという行為の意味なんて理解できないのだろう。
　それにしてもオヤジから槍の話を聞いた事はあっても、バケモノを封印したままだなんて話は聞いた事がなかった。まさか今まで、あんなものの上に住んでいたとは……とりあえずオヤジに文句を言おうと思っていたオレは、土蔵の入口に立つ人影に気付く。闇に慣れていた目が光を浴びて収縮すると、その姿を鮮明に映し出した。
「こっ、こんにちは……」
　オドオドした声が聞こえる。黒い着物を着た女の子が、土蔵の入口でオレを待っていた。髪を横に切り揃えた、おかっぱ頭の女の子だ。着物と髪型が合わさって、市松人形のように見える。その身長よりも大きな縦長い布袋を、女の子は背負っていた。その様子から、寺に仏具か何かを預けに来たのかとオレは思う。
「どうした？　うちに何か用か？」
「あっ、あのね。お母様が潮（うしお）を助けてあげなさいって言って

ね。それでね……」
　女の子の声は、どんどん小さくなる。なんだか、よく分からない内容だった。女の子のオドオドした態度もあって、話が分かりづらい。とりあえず心を落ち着けて話を聞こうと思ったオレは、女の子を住家へ案内しようとする。だけど、その女の子の周りに虫のような物が見えた。
「うわっ、うしろっ！」
「きゃ！　なっ、なに!?」
　変な虫に気付いたのか、それともオレの声に驚いたのか、その女の子は短い悲鳴を上げた。女の子に絡み付こうとしている虫がいる。その虫を追い払おうと、オレは手を伸ばした。するとオレの手から逃れるように女の子は後退り、その直後「るんっ」という怪音が鳴り響く。それは……身を屈めるほど異質な音だった。女の子に伸ばしかけていた手を止める。その音と共に、オレと女の子の間に浮かんでいた虫が弾け飛んだ。
「え？」
　オレは疑問の声を上げる。いつの間にか女の子は剣を握っていた。白い柄に、白い剣身の、真っ白な剣だ。剣身が白すぎて、濁っているように見える……女の子の印象も変わって、少し大人っぽくなっていた。なんでかと思って見ると、髪が伸びている。剣を持った女の子の黒い髪は、ザワザワと現在進行形で伸びていた……なんだ、これ。ホラー？
「ごっ、ごめんなさい……だっ、大丈夫？　怪我してない？」
「ああ、大丈夫大丈夫！　お兄ちゃんは元気だぞ！」
　とつぜん弾け飛んだ虫の死骸は、宙に溶けるように跡形も残らず消えた。だけど、まだまだ虫は沢山いる。オレは体に纏わり付こうとしている虫を払おうとした。ところが、その手は虫を擦り抜ける。まるで実際は存在していないかのように……でもオレの目には、たしかに虫が映っていた。女の子の視線も虫を追って……と思ったら、なぜか女の子はチラッとオレを見て、すぐに目を逸らす。体をビクビクと震わせていた。

そうか、女の子は怖いんだ。ついつい預かり物だった剣を抜いてしまうくらい怖かったのだろう。こんなに辺りが虫だらけで、気分のいい訳がない。そう思ったオレは女の子を安心させるために近寄る。しかし、オレが一歩近寄ると、女の子は一歩後退った。そうか……虫だけじゃなくてオレも怖いのか。ちょっとオレは、胸にダメージを受けた。

「これ、見えるか？」

「うっ、うん。見た感じ、虫怪とか魚妖かな？」

「ちゅうかい？　ぎょよう？」

「むっ、虫とか魚みたいな低級の妖怪だよ。たっ、たぶん長飛丸様の妖気に引かれたのかな？」

あれ？　オレ、なんで妖怪の話を女の子としてるんだ？　オレは触ろうと思っても触れない幻覚の話を……この女の子も見えてるみたいだし、もしかして幻覚じゃない？　これが妖怪なのか？　土蔵の地下で見た奴と同じ、これは妖怪なのか？　でも、なんで急に見えるように……「ながとびまる」の妖気に引かれてきた？　とにかく女の子に聞いてみよう。寺の住職の息子であるオレよりも、この女の子の方が詳しそうだ。こんなに小さいけれどオカルトマニアなのかも知れない。女の子は、おまじないに詳しいからなぁ……。

「ながとびまる、って妖怪か……？」

「うっ、うん。そこに居たよね？」

剣を持ったまま女の子は控えめに、指先でオレの背後を示す。その先を辿って見ると、積み重なった箱や板きれが見えた。その下にあるのは、さっきオレが塞いだ地下室への入口だ。その奥には石壁に縫い止められたバケモノがいる……どうして、あのバケモノの名前を、この女の子が知っているんだ？　そんな話はオレですら、寺の住職であるオヤジから聞いた事がない。

「あっ、あのね、早く獣の槍を抜かないと、この小さな妖怪が集まって、大きな妖怪になっちゃうって……」

「獣の槍って言うと、あのバケモンに刺さってた……」

女の子に確認する途中で、ゾクッと寒気が走った。どうやら女の子

と話している間に、時間切れになったらしい。土蔵の壁を這い回っていた虫や、空中を漂っていた虫が、なにかに引かれるように集まって行く。それは大きな流れとなり、周囲の虫を次々に引き込んで行った。たしか、さっき女の子は、小さな妖怪が集まって、大きな妖怪になるって……。

ザワザワ
キチキチ
カリカリ
ミシミシ

四方八方から虫の鳴き声が聞こえる。その不快な音は少しずつ大きくなり、現実味を帯びていった。幻だと思っていた存在が、形のなかった存在が、オレの現実に干渉しようとしている。妖怪なんて存在しないと思っていたオレの日常が、壊れようとしていた……いいや、とっくに壊れてたんだ。地下に潜むバケモノを見つけた時から……。

前に向かって、女の子は一歩踏み出す。土蔵の中にいるオレの方へ近寄った。すると、その背後を蛇のような胴体が横切る。あと少し遅かったら、女の子はアレに潰されていた。垣間見えた妖怪の姿は、人を軽く飲み込めるほど大きな蛇……のようなものだ。ただし、よく見ると表面に無数の虫が見える。無数の虫が集まって巨大な蛇のような、よく分からない形に成っていた。それによって土蔵の入口が塞がれ、外から差し込んでいた光が遮られる。土蔵の中は真っ暗になった。これは、まずい。

「あっ、あのね？　早く槍を抜かないと死んじゃうよ？」

ミシミシと土蔵が軋む。暗くて何も見えない、奇妙な圧迫感がオレの体を締め付ける。オレと女の子は、妖怪の腹の中にいた。そんな中で女の子は、槍を抜くことをオレにすすめる。女の子がオレの事を心配しているのは声で分かった。だけど、そんな事をしたら、あのバケモノが野放しになってしまう。どうするべきかオレは迷っていた。

「きゃあああああ!!」

土蔵の外から悲鳴が聞こえる。聞き覚えのある声だった。どういう訳か、近くに知り合いがいる。知り合いも妖怪に襲われているのかも知れない。そう考えてオレは焦った。助けに行かなければ……でも、どうやって？　入口の辺りを手で探ってみると、指に痛みを感じる。慌てて手を離したものの、妖怪に肉を食い千切られていた。傷口がジンジンと痛む。頭が、おかしくなりそうだ。

『この槍を抜いてくれたら、なんでも言うことを聞いてやる。わしも人間に恐れられた妖怪よ。約束は守る！』

あのバケモノの都合のいい言葉が頭に浮かぶ。だけど他に良い手は思い浮かばなかった。手探りで地下室への入口を探し当てると、上に載っていた物を横へ退ける。どこかに触れて指に傷が付いたけれど、そんな事を気にしている場合ではない。再び開いた四角い穴に身を下ろし、オレはバケモノの下までやってきた。オレの指から漏れた血の臭いが、かすかに漂う。

「頼みがある……外にいるバケモンをやっつけてくれ」

「へへ、いいぜ。だが、そのためにゃ、この槍がジャマだがなあ」

「……やっつけてくれよ」

「約束は守るさ……」

バケモノに刺さっている槍に手をかけて――それをオレは引き抜いた。

「けけけ」

「けけけけけけけけけけけ！」

「けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ!!」

けたたましい哄笑と共に、オレは吹き飛ばされた。オレの体は壁に衝突して、ぐへぇと息が漏れる。バケモノめ、さっそく裏切りやがった。吹き飛ばされたオレは、手の内にある槍を意識する。何があっても手放さないように、オレは強く槍を握りしめていた。こいつはオヤジから毎日のように聞かされていた「妖怪退治の名人のありがたーい槍」だろう。バケモノを実際に封じていた事から、それは真実に違いない。こいつがオレの知っている皆を傷付けるつもりならば、この槍

を使って、刺し違えになってでも止めてやる。

キィィィィィ

手に持った槍が鳴る。まるで自ら動き出そうとしているかのように震えていた。その時、オレと槍が繋がった。この「獣の槍」がオレに教えてくれる。この槍は妖怪を退治するためだけに、二千年も昔の中国で作られた。人の魂を力に変えて妖怪を討つ。ゆえに使う者は獣と化してゆくという。

「よくもわしをコケにしてくれたなああ……」

「うっ、うしおに触らないで！」

るんっ

何事か。身を竦ませるほどの怪音と、女の子の声が聞こえる。その間にザワザワとオレの体は変化していた。髪が伸び、体に力がみなぎる。真っ暗で何も見えなかった視界に、白い剣を持つ女の子と、片手を切り落とされたバケモノが見えた。バケモノは片手を拾って、この地下室から逃げ出そうとしている。

「ちいいいっ、神剣かあ!?」

「おい、待てよバケモン。どこに行くつもりだ。まだオレとの約束が済んでないだろ……！」

「だれが人間との約束なんて……ひっ!?」

「きさまーッ！」

「ひゃあああああ!?」

バケモノを追いかけて、オレは地下室から飛び出す。入口を塞いでいた無数の虫を、バケモノは吹き飛ばした。バケモノの放った雷によって、雷鳴が辺りに轟く。オレはバケモノに追いつき、槍を突き出した。するとバケモノは空中で回転し、器用に槍を避ける。そんな事をしていると進行方向に、家を締めつけるウネウネした物体と、それに襲われている知り合いの姿を見つけた。

「先におまえが行け。オレが止めをさす」

「はっ、はいっ！」

先行したバケモノが虫の集合体に穴を開け、オレが集合体を槍で斬り裂く。獣の槍で斬られた集合体は爆散し、跡形もなく消滅した。そこら辺の地面に張り付いて、生き残っていた妖怪も散っていく。虫に襲われていた知り合いは無事だった。その姿を見て安心したオレは、女の子を置き去りにしていた土蔵へ駆け戻る。知り合いの様子は気になるけど、土蔵に一人残した女の子も心配だ。バケモノを連れて地面に降り、獣の槍の行使を止めた。すると、一時的に伸びてい髪が千切れて散っていく。

「じゃ、あばよ」

なんて言いながら立ち去ろうとしているバケモノに、オレは槍を突きつける。こいつが『フフン！　知れたことよ！　まずオノレを食らって昔のように、この辺の人間どもを地獄へ引きずり込んでくれるわ！』なんて言っていたのは記憶に新しい。そんな奴を野放しにするなんて選択はありえない。

「まさか、許されると思ってんじゃないよな？」

「だって、サカナやムシはやっつけただろ……！」

「ちがうね。おまえの５００年分の妖気は、まだ当分の間ほかの妖怪を呼ぶんだろ？　それもおまえの責任だ！」

「きったねー」

「おっ、お話は終わり？」

土蔵の中から顔を出したのは、あの女の子だった。どこにも怪我は見当たらず、無事に見える。オドオドとした様子で、オレとバケモノを交互に見ていた、でも、オレやバケモノと視線が合うと慌てて目を逸らす。横のバケモノは兎も角、オレまで恐がられていた……まあ、あんな怖い目にあったんだから仕方ない。この女の子は見るからに気が弱そうだから、刺激が強すぎたのだろう。

「こっ、こんにちは、長飛丸様。うしおと、よろしくね？」

「あぁ？　長飛丸だぁ？　そんな古い名前は知らねーし、このクソ人間なんかと、よろしくもしてやらねーよ」

「でっ、でも字伏（あざふせ）は種族名みたいな物だし……じゃっ、じゃあ、シャガクシャ様って」

「なんだ、そりゃ？　わしの何所を見て、シャガクシャなんて妙な名前を……」
「いーじゃねーか、バカ妖怪。せっかく、この子が名前を付けてくれたんだから貰っておけよ。それとも嫌だってのか……？」
「あいたたたたた。分かった！　分かりました！　だから槍でわしを打つな！」
「じゃっ、じゃあ改めて、よろしくね。うしお、シャガクシャ様」

そこで、ふとオレは思った。オレ、この子に潮（うしお）って名乗ったっけ？　そもそも、この子だれだろう……？　なにか用があって、うちに来たはずだ。そして、この騒ぎに巻き込まれた。でも、その女の子の名前を聞いた記憶がない。たぶん、まだ名前すら聞いていない。おまけに、なんの用で来たのかも聞いていなかった……いいや、そう言えば『お母様が潮を助けてあげなさいって言ってね。それでね……』と聞いた気がする。
「オレは蒼月潮。君の名前は？」
「あっ、蒼月麻子だよ？」

女の子の名前を聞いて、オレは疑問を覚える。蒼月という名字が重なる事はあるだろう。でも、麻子と言えばオレの知り合いの名前だ。蒼月という名字と麻子という名前が重なるなんて、誰かの作為なんじゃないかと疑いたくなる。これはビックリドッキリ・ドキュメントなんじゃないかと思って、オレは辺りを見回した……あれ？
「えっ、本当に？」
「うっ、うん。お母様が『貴方のお父様は光覇明宗で優秀な法力僧だけど、獣の槍に選ばれなくて酒に逃げた蒼月紫暮です』って言ってたよ？」

前半部分で評価を上げたと思ったら、後半部分で一気に評価を下げた。後半部分から麻子さんの、母親の悪意が滲み出ている……その「お母様」はオヤジの事を恨んでいるんじゃないか？　それにしてもオヤジは獣の槍を抜けなかったのか。そんな話は聞いた事がなかった。

「……ところで麻子さんは何歳なんだ？」
「あっ、麻子でいいよ。歳は１６歳だけど？」
歳下だと思っていたら、麻子は歳上だった。オドオドした様子や、子供っぽい喋り方のせいで、オレは勘違いしていたらしい。歳を聞いた今でも「麻子さん」と言うよりも、「麻子ちゃん」という感じだ。年齢から察するにオレが中学２年生だから、麻子が高校１年生くらいか。麻子はオレの２歳年上らしい。つまり麻子は、オレが生まれる２年前に生まれたという事になる。でも、オレに姉がいるなんて話はオヤジから聞いた覚えがない。まさか……、
あのボケオヤジ、隠し子つくってやがったー!?

石食いは大ムカデの本性をあらわす

麻子を連れてオレは自宅へ駆けもどった。とは言っても敷地の外にある土蔵から門を潜って、拝殿の横にある住家へ移動したに過ぎない。すると知り合いの2人に見つかって泣き付かれた、さっき、オレが獣の槍で倒した妖怪に襲われていた知り合いだ。よほど怖かったらしく、知り合いが落ち着くまで時間がかかった。

話を聞いてみると知り合いは、オレが借りていたノートを取りに来たらしい……すっかり忘れてた。麻子と知り合いの2人には居間で待ってもらって、オレはノートを取りに行く。ついでにオヤジの姿を探していると、台所にあるテーブルの上でオヤジの書き置きをみつけた。

『潮へ。ちょっと日本海の方をブラブラしてくるから、一週間ほどまたテキトーにやっとくれ。

追伸。冷蔵庫の中の中華まんじゅーに手をつけたら殺すぞ。パパより』

「あのボケオヤジー!! かんじんな時にーっ!」

麻子の来訪に気付いて逃げたのか……なんて思ったけれど、事前に連絡もなく急にオヤジが遠くへ出かけるのは珍しい事ではない。まぁ、オヤジの事はいい。問題は麻子の事だ。おそらく生みの親の顔を見にきたのであろう麻子に、父親であるオヤジが居ないと告げるのは心苦しかった。

ついでに獣の槍に布を蒔きつけ、それを持ったまま居間へ戻る。この槍はオレの生命線だ。この槍を手元から離せば、シャガクシャと名付けられたバケモノが、オレを食らい尽くすだろう。そう考えて重くなった体にフンッと気合いを入れ、オレは居間に姿を見せる。すると麻子の前で、知り合いの2人が大騒ぎをしていた。

「あっ、蒼月くん! この子って蒼月くんと麻子の――」

「だまらっしゃい、真由子!」

アワアワと慌てる麻子の前で、知り合いの2人は取っ組み合いを始める。ドタバタと騒音が撒き散らされた。麻子の前で何やってんだ。

頭が痛くなってきた……それにしても、いったい何があったんだ？
少し前はショックで落ち込んでいた2人が、ちょっと見ない間に元気になっている。
「話は聞かせてもらったわ！　あたしの名前は中村麻子よ！」
「あたしは井上真由子っていうの、よろしくね」
「わっ、私は蒼月麻子だよ？」
「蒼月！　あんたは、この子のこと、なんて呼んでる？」
「麻子って、名前で呼んでるぞ」
「そう、それよ！　同じ麻子だと被るじゃない！」
「ごっ、ごめんなさい……」
「麻子ちゃんは悪くないのよ。悪いのは、蒼月！」
「オレェ!?」
　なんだか中村のテンションが妙に高い。ショックを受けて一時的に大人しかった反動か。ただでさえ小さく見える麻子が、さらに小さく見える……テンションが高い方が中村麻子で、小さく見える方が蒼月麻子だ。こうして考えてみると名前が紛らわしい。どっちがどっちなのか分からなくなる。
「あんたが麻子って呼ぶから紛らわしいのよ！　お姉ちゃんって呼べばいいじゃない！」
　オレの体を衝撃が貫いた。見た目はともかく歳上だし、腹違いの姉だし、間違ってはいない。でも、お姉ちゃんだ。その言葉を口に出すのは難しかった。オレは中村から、姉である麻子を見る。すると、サッと目を逸らされた……嫌われてる!?　その言葉はオレにとって初めてで、気軽に紛げる物ではない。時間がかかる。しばらく黙っていると、コチコチと時計の音が聞こえ始めた。恥ずかしかった。
「ね……姉ちゃん？」
「うっ、うん……」
　フラフラと視線を迷わせていた姉ちゃんは、部屋の隅を見つめたまま固まった。固まったまま動かなくなる。その部屋の隅に、なにか在る訳じゃない。姉ちゃんと呼ばれたショックで、姉ちゃんはフリーズしていた。そんな中、オレの肩に乗ったままだったバケモノもとい

シャガクシャは、姉ちゃんに切断された腕を接着しようと頑張っている。切断された部分を押しつけてギュウギュウとしていた。　邪魔だから他所でやれ。

　中村と井上が自宅へ帰るという。なのでオレは玄関まで見送りに出た。そこでオレは中村に耳を引っ張られる。そうして姉ちゃんから引き離された。なんとなくオレの後ろを付いてきていた姉ちゃんは、井上に引き留められている。姉ちゃんから十分に離れた場所でオレの耳を放した中村は、いつになく真剣な表情をしていた。
「あの子、他人に触られる事を異様に恐がるから気を付けなさいよ。不用意に近寄ったり、指一本でも許可なく触れないこと、分かった？」
「そんなにか……？」
「あんたが席を外している間にパニック起こして、あやうく斬られそうになったわ」
「そうか……わかった。気をつける。それと今日は、ありがとな。井上にも」
　オレの礼に中村は、フラフラと手を振って答える。そうして２人は帰って行った……ところでオレの横にいる姉ちゃんを如何するべきか。下手に触れるとパニックを起こすらしい。思い返してみれば土蔵で初めて会った時、姉ちゃんの側にいる虫を追い払おうとしたオレは、剣を抜いた姉ちゃんに斬られかけていた。これまで姉ちゃんは、どんな時を過ごして来たのだろう？
「姉ちゃんはオヤジに会いに来たんだろ？」
「うっ、うん……お母様が修行のついでに、お父様に会いに行ってらっしゃいって」
「修行のついで？」
「けっ、剣の修行だよ？　人あらざるものを斬って修行するの。人は斬っちゃダメなんだって……」
　いま不穏な言葉が聞こえたような……まるで姉ちゃんが人を斬りたがっているように聞こえる。まさか、そんな事はないだろう。きっと姉ちゃんの「お母様」は「人に刃を向けてはいけませんよ」と教え

たかったに違いない。しかし、人外を斬る修行か。今日初めて妖怪の存在を知って、獣の槍の使い手になったオレよりも、姉ちゃんの方が先人なんだな。

「……姉ちゃん。じつはオヤジの奴、いま遠くに出かけてるみたいなんだ。一週間くらい経ったら帰ってくると思うけど」

「そっ、そうなんだ……あっ、あのね？　お父様が帰ってくるまで居ちゃダメかな？」

「うーん。でも、こいつが居るしなぁ……」

一緒に住むとなると問題がある。オレの肩に無断で乗っているシャガクシャだ。こいつは人食いのバケモノだ。こんな危険な奴を、姉ちゃんの側に置いてはおけない。できれば姉ちゃんには、うちから離れてほしかった……そういえば姉ちゃんは、どこに泊まるんだ？

「だっ、大丈夫だよ？　私には、この子がいるから……」

そう言って姉ちゃんは、大事に持っていた白い剣を見せる。白い柄に、白い剣身の、真っ白な剣だ。剣身が白すぎて、濁っているように見える。たしか姉ちゃんは、この剣でシャガクシャの片手を切り落としていた。獣の槍の力を行使した時のオレのように、この剣を使った姉ちゃんは髪が伸びる。髪は生命力の象徴だ。この剣も獣の槍と同じように、使い手の魂を食らうのかも知れない。

「おっ、お母様から頂いた神剣なの。これは元々、御屋形様の剣なんだって。神様が造った凄い剣なんだよ？　わっ、わたしの身に危険が迫ったら、この子が飛んできてくれるから……」

るんっ

白い鞘が震える。収められていた剣が、姉ちゃんの言葉に応じるように震えた。その音を聞いたオレは、喉に何かが詰まったような感覚を覚える。それを姉ちゃんは神剣といって大事にしている。でも、その剣を見たオレは不吉だと思った。神は神でも、名前を言うことさえはばかれる神の手にあったような……でも、そんな危険な物を「お母様」が娘である姉ちゃんに預けるわけないか。

「うっ、うしおよりは妖怪と戦った経験があるんだよ？　それでもダメ？」

「そういう問題じゃなくて、姉ちゃんを危険な目に遭わせたくないんだ」
「そっ、それは私も同じ気持ちだよ？　うしおが心配なの」
「それは分かるけどさ……」
「うっ、うしおと一緒に居たいの」
　オヤジと会うために泊まる話が、オレと一緒にいるために泊まる話になっていた。どうしても姉ちゃんは、うちに泊まりたいらしい。プルプル震えながらオレに頼み込む。だけど、オレは譲れなかった。シャガクシャを何とかするまで、うちに誰かを泊めるなんて事はできない。
「そっ、そう……あっ、あのっ、ごっ、ごめんなさい。わたし帰るね……」
「ごめん。こいつを何とか出来たら、姉ちゃんに連絡するよ」
「うっ、うん……あのね。うしおに、おねがいがあるんだけど……」
「なんだ？　姉ちゃんのおねがいなら、なんでも聞いてやるぞ」
「ふっ、2人きりの時は……麻子って呼んでほしいな？」
　頬を赤く染めて、恥ずかしそうに姉ちゃんは言う――あぁ、いいなあ。世の中の姉弟というのは、こういう物なのだろう。そうに違いない。そうして姉ちゃんは帰って行った。それにしても今日はバケモノもといシャガクシャを見つけて、姉ちゃんと出会って、妖怪に襲われて、獣の槍を抜いて、中村と井上に泣き付かれて……濃い一日だった。

　翌日、オレは槍を持ったまま登校していた。槍には布を巻いている。朝っぱらからシャガクシャにテレビを打っ壊されて、オレの気分は最悪だった。いくらすると思ってるんだよ……おまけに登校するオレの肩にシャガクシャが乗っている。取り憑かれていた。少しでもオレが槍から離れれば、シャガクシャは襲いかかってくるだろう。
「きのうのコト夢だったなんて信じられないんだ」
「真由子ったら！　夢だったに決まってるじゃない！」
　中村と井上に会った。いつもは暇な図書委員だけど、今日は資料

を運ぶので急ぐらしい。２人は資料が搬入された旧校舎へ向かった。オレは教室へ行って授業を受ける。社会科の授業だ。シャガクシャは歴史の話を興味深げに聞いていた。５００年間封印されていたシャガクシャにとっては面白い物らしい。バケモノが勉強ねぇ……。

キィィィィィ

突然、槍が鳴った。獣の槍が教えてくれる。化物だ。化物が近くにいる。学校に入り込んだ。場所は旧校舎だ。旧校舎？　そこには今、資料を取りに行った生徒達がいる！　そう思った時、外からズドオオオンと大きな音が聞こえた。オレは槍を持って、教室から飛び出す。教師の止める声も聞かず、階下へ走った。

「いやあああっ！　石にィィ！　みんながああ……」

「おいっ！　しっかりしろっ！　なにがあったんだよっ!?」

この学校には旧校舎と繋がっている部分がある。その入口に、半身が石と化した女子生徒がいた。床に尻を着いた体勢のまま、制服の胸から下が石となっている。何を見たのか恐怖に怯える女子生徒は「石に！石に！」と泣き喚いていた。辺りを見回しても、他に生徒の姿は見当たらない……みんなは、どこだ？

「おい、どうしたんだっ!?」

「ほっ、保健室へっ！」

「救急車をっ！」

悲鳴に釣られて集まった教師や生徒が、石になった女子生徒を見て慌てる。オレは旧校舎の廊下を走り、他の生徒の姿を探した。だけど、どこにも中村や井上の姿はない。どうなってるんだ？　妖怪に連れ去られたのか？　旧校舎を出て走り回っていると、運動場を歩く黒い着物をきた人影があった。

「姉ちゃん？　どうしてここに？」

「ばっ、ばけものの臭いがしたから……」

キョロキョロと辺りを見回す姉ちゃんは、旧校舎へ向かう。まだ救急隊員も警察官も来ていない。旧校舎の中には1人の教師がいた。教師の大部分は、旧校舎の外へ探しに出ているようだ。生徒の姿が見

当たらないのは、教室へ戻るように教師に言われたのだろう。そんな中に姉ちゃんは乗り込んだ。当然、現場に残っていた教師に注意される。
「ここは立ち入り禁止だ！　事件の恐れもあるから、教室で待機しなさい！」
「わっ、わたしは妖怪退治に来たんだよ？　こっ、ここに化物が隠れてるの……」
「わー！　わー！　すいません先生！　この子が、この辺に落とし物をしたみたいで！」
　オレは慌てて誤魔化した。どうしたものかと思って姉ちゃんを見ると、布袋から白い剣を取り出している。剣身の濁った▪剣は光を反射せず、白く白く濁っていた。▪姉ちゃんの剣に驚いた教師が後退る。でも姉ちゃんは、その教師の横を通りすぎて、なにもない空間を斬った。
　るんっ
　ゴキッという音ともに空間がずれる。まさか姉ちゃん、空間を斬ったのか!?　そんな事もできるのかと思って驚いていると、斬られた空間は石と化す。まるで扉のように空間が開き、その奥から見上げるほどに大きな鎧武者が姿を現した。その鎧武者は姿を現すなり、姉ちゃんに向かって刀を振り下ろす。
　ビュオッと風を切って振り下ろされた刀を、姉ちゃんは白い剣で受け流した。踊るようにスルリと鎧武者の懐へ飛び込み、ダンッと床を強く踏みつける。そのまま白い剣を一閃し、鎧武者の胴を斬り裂いた。瞬く間に真っ二つになった鎧武者の姿にオレは安心し、オレは隣の教師に話しかける。
「先生、みんなを……」
「バカッ！　そりゃ石食いじゃねぇ！　石のサムライだよっ!!」
　声を上げたのはシャガクシャだ。その忠告は間に合わなかった。真っ二つになった鎧武者の断面から、数知れない石の蛇が飛び出る。鎧武者の懐に飛び込んでいた姉ちゃんは避け切れない。だけど姉ちゃんは石の蛇に構わず、鎧武者に斬りつけた。石の蛇は姉ちゃんに

食らい付き、全身を石へ変える。
「姉ちゃん！」
るんっ
白い剣が震える。その場で白い剣は回転し、その刃先で姉ちゃんを撫でた。すると姉ちゃんの体から石が剥がれ落ちる。黒い着物は石となって崩れ落ち、姉ちゃんは一糸も纏わぬ姿になっていた。そんな自分の姿に姉ちゃんは構わず、鎧武者へ、さらに斬撃を重ねる。
――斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る
るんっ、と姉ちゃんの剣が鳴いた。

「蒼月！　みんなを助けるから手伝って！」
「中村！　井上！　無事だったか！」
石になった生徒が壁や天井に張り付いている。その生徒を引き剥がそうと、中村と井上が頑張っていた。オレも槍を使って、天井に張り付いている生徒を剥がそうと試みる……そういえば、さっき姉ちゃんが白い剣を使って石化を解除していた。オレも槍で石化した生徒の服を突つく。すると石が剥がれて、ついでに服も剥がれた。天井から落ちてきた生徒を、オレは慌てて受け止める。柔らかい感触を手に感じた。
「げっ！」
「ちょっと何やってんのよ！」
「わざとじゃねーって！」
「あんたの服を着せなさい！」
「大変だ！　閉じかけてるぞ！」
先生の慌てる声に振り向く。すると、姉ちゃんの斬った空間が閉じつつあった。オレは生徒を中村に預け、扉の間に槍を突っ込む。足を開いて石の扉を押し返そうとしたものの、閉まる力の方が強かった。ギリギリギリと槍が軋む。まだだ……みんなが脱出するまで、空間を閉じる訳にはいかない。だからオレは槍の力を行使した。ザワザワと髪が伸びて、体に力がみなぎる。
「ちょっと、蒼月……それって」

「へへ……ちょっとな。ここはオレに任せて、先に行けよ」
とうぜん中村や井上、みんなに姿を見られた。でも、裸に剥かれた姉ちゃんよりはマシだろ？　扉を押し返すオレの下を、みんなが通って行く。あとは姉ちゃんだけだ。姉ちゃんの猛攻によって、もはや鎧武者はボロボロになっている。石の蛇は斬り落とされ、残り少なくなっていた。ピシピシと音を立てて鎧が再生しているものの、姉ちゃんに斬られる速さに追いついていない。壊れた鎧の隙間から無数の目が覗き、姉ちゃんに怒気を向けていた。
『おのれええええ!!　この石食いがあ、こんな所でええ!!』
鎧武者が砕け、内側から大ムカデが正体をあらわした。その大ムカデすら姉ちゃんは、苦もなく斬ってみせる……姉ちゃん、つえー。なんて思っていると、斬り落とされたはずの大ムカデの尻尾が跳ねた。姉ちゃんの体ほどもある大きな尻尾が、生きているかのように姉ちゃんへ襲いかかる。
「しっ、しぶとくないかな!?」
大ムカデの尻尾を斬って、姉ちゃんが悲鳴を上げた。大ムカデから飛び散った青い体液が、姉ちゃんの体に降りかかる。姉ちゃんの肌からシュウシュウと湯気が昇った……毒だ。肉が溶けている。変な臭いが辺りに漂った。おまけに斬った尻尾もビクンビクンと元気に床を跳ね、再び姉ちゃんに襲いかかる……変だ。なんで、あの化物は平気で動けるんだ？
「あーあ。こりゃー、あのガキ、死ぬな」
なんて呑気に言ったのはシャガクシャだった。金色の化物は、ちゃっかり扉の外へ避難している。先生や石になっていた生徒は、外へ避難したようだ。この場に残っている生徒は、中村や井上の２人だった。２人は「がんばれがんばれ」と姉ちゃんを応援している。その頭上にシャガクシャは浮いていた。下にいる中村や井上が気付いている様子はない。
「シャガクシャ……助けてくれ」
「やだね！　なんでわしが、お前ごときの役に立ってやらなきゃならんのよ」

「頼むよ……オレの大事な姉ちゃんなんだ」
　オレの頼みを聞いて、なにを思ったのかシャガクシャはニヤーとした。オレの言葉にシャガクシャが感じ入った訳じゃないだろう。それは碌な事を考えている顔じゃなかった。でも、姉ちゃんを助けてくれるのならば何でも構わない。シャガクシャは「1回だけだぞ！」とオレに釘を刺した。
「ツノのある大ムカデは左目――槍にツバつけてぶっ刺しな！　変化はヒトのツバに弱いんだ」
「にっ、にんげんのツバ!?　うっ、うしお、おねがい！」
　大ムカデの弱点を聞いて、姉ちゃんが慌てる。女の子にツバを吐けというのは難しいか。こちらに姉ちゃんは走り出して、オレに交替を願った。急な事だったけれど、迷っている暇はない。突っ張り棒にしていた獣の槍を外して、オレも姉ちゃんの方へ走り出した。オレはペッと、獣の槍にツバを吐きかける。姉ちゃんと交差したオレは、天井を這っていた大ムカデの左目を刺した。
『百年生きた大虫怪のわしが、ヒトごときにイイイ！』
　ギエエエエエと、大ムカデは悲鳴を上げる。大ムカデは苦痛で転げ回り、旧校舎の壁をドォンと吹き飛ばした。それを最後に動かなくなる。体を縮めるように震えると、本当に体が縮んで行った。昨日あった虫のような妖怪と違って爆散せず、本性であるムカデの死体が残る。オレは一息ついて、姉ちゃんに駆けよった。
「うっ、うしお、シャガクシャ様……あっ、ありがとう。助かったよ」
「そんな事はいいから姉ちゃん、服！　服！」
「ごっ、ごめんなさい」
　姉ちゃんの着物は石化して砕け散った。そこへ大ムカデの体液を被って、肌が変色している。だけどシュウシュウという音を立てて、肌についた傷は治りつつあった。オレは獣の槍を包んでいた布を姉ちゃんに被せようと思ったけれど……その前に、姉ちゃんの肌から黒いものが滲み出る。姉ちゃんの肌を覆う黒いものは、姉ちゃんの黒い着物へ変化した。その様子を見たオレは、ポカーンと口を開ける。
「ふっ、ふつうの服は、すぐにダメになっちゃうから……」

「へー、べんりだなー」
「……それで、これは如何いうことなのかしら、蒼月？」
「ね！　ね！　うしおくんっ！」
　姉ちゃんとオレに、横から声がかかる。その場に残っていた中村と井上だ。あんな目にあったのに、井上は元気だなー。石の扉はなくなって、オレと姉ちゃんの姿を晒け出していた。今さらな話だけれどオレは、中村や井上に変化した瞬間を見られている。大ムカデが旧校舎の壁を吹き飛ばしたせいか、旧校舎の外から教師達が走ってきていた……こりゃいかん。
「姉ちゃん！　逃げるぞ！」
「すっ、すたこらさっさー」
「ちょっと、あおつ……あとで説明しなさいよ！」
　中村と井上は教師に保護される。きっと、これから事情聴取だ。オレと姉ちゃんの事を黙ってくれていると嬉しい。まあ、化物と戦ったなんて話は教師も信じないだろうさ。テレビカメラで撮られた訳でもない。行方不明になった生徒が、長時間姿を消していた訳でもない。だから、大した騒ぎにはならないだろう。姉ちゃんと共に学校を抜け出して、オレの家へ向かった。

「あっ、あのね、シャガクシャ様。今日は助けてくれて、ありがとう」
「おめえのために助けたんじゃねーよ。あの忌々しい小僧が、わしに必死こいて助けを乞う姿が見たかったのよ」
「うっ、うん。でもシャガクシャ様が弱点を教えてくれなかったら、私も危なかったから……」
　大ムカデはバッサバッサと姉ちゃんに斬られていた。それでも高い再生力で動いていた大ムカデは、ツバを付けたオレの槍で止めを刺した。ツバを付けるなんて弱点を知らなかったら、姉ちゃんは体液まみれになっていただろう。もっと大怪我を負っていたかも知れない。そうオレが思っていると姉ちゃんは、シャガクシャの前に腕を差し出した。
「だから、ちょっとだけなら、かじっていいよ？」

「姉ちゃん！　なに言ってるんだよ！」
「だっ、大丈夫だよ？　ちょっとの傷なら大ムカデの毒を浴びた時みたいに、すぐに治るから……」
　姉ちゃんはシャガクシャに「かじらせる」つもりだ。人食いのバケモノを相手に、そんな危険な事はさせたくない。オレは慌てて姉ちゃんを止めようとした。すると、ヒュッと空気が唸る。オレの鼻先を白い刃先が通過していった。あぶなかった。中村の忠告を忘れてた。意図した行為ではないらしく、姉ちゃんはアワアワと慌てる。
「ごっ、ごめんなさい！　大丈夫？　怪我してない？」
「あっ、ああ……」
「けっ、混じりもんの肉なんぞ食えるかよ」
　いつの間にかシャガクシャは姉ちゃんから距離を取って、冷や汗を流していた。姉ちゃんに「かじらせる」つもりがあっても、「うっかり」斬られる可能性に思い至ったのだろう。もしもシャガクシャが姉ちゃんをかじっていたら、真っ二つになっていたに違いない。オレの姉ちゃんは、ちょっとデンジャラスだ。
「混じりもんって、どういう意味だよ？」
「……じつはわし、朝から石食いの事を知ってたのよ。妖怪同士はニオイで分かるからな。ヤツの結界が目の前にあるのに、必死で探し回るおめーがマヌケでよー。ぎゃはははは！」
「そういう事は早く話せよ、タコ！」
「コラ、勘違いすんなよ小僧！　わしはおまえに取り憑いてるんだぜ、食うためによ……人間なんぞクソくらえだ！」
　シャガクシャは朝から石食いの事を知っていたらしい。それを早く言ってくれれば、事件を防げたかも知れない。それなのにギャハハハと笑うシャガクシャの態度は、オレの気に障った。こいつは痛い目を見ないと分からないらしい。姉ちゃんから離れて、オレとシャガクシャは槍と爪で切り結ぶ。その様子を姉ちゃんは、アワアワと慌てて見ていた。
「蒼月ー！　居るんでしょー！　上がるわよー！」
「うしおくーん」

中村と井上がやってきたらしい。オレは槍をシャガクシャの顔面に叩き込んで動きを止める。さて、中村と井上に、どう説明するべきか……嘘なんて吐きたくないし、正直に話すか。真っ先に警察官が来なかったという事はオレと姉ちゃんの事を、みんなは黙ってくれているのだろう。ならばオレも、みんなを裏切る訳にはいかない。

「ねっ、ねえ、うしお。ちょっと確認したいんだけど……」

「どうしたんだ、姉ちゃん？」

「いっ、石になった人は、あそこに居た人だけだよね？」

「あっ」

オレが駆けつけた時、半身が石と化した女子生徒がいた。その女子生徒を姉ちゃんは知らない。その女子生徒は保健室へ運ばれたはずだ。その後、救急車で病院に運ばれたのかも知れない。石食いを倒せば石化は解除されるのだろうか？　そうでないとしたら……女子生徒の半身は石化したままのはずだ。バッと振り返ってテレビを見る。

だけど、今朝シャガクシャに壊されたテレビは、なにも教えてはくれなかった。

「うっ、うしお。テレビ壊れてるけど……」

「押し入れから古いやつ出してくる！」

姉ちゃんは鬼を斬り、人を斬った

人食いのバケモノであるシャガクシャに、姉ちゃんは自身をかじらせようとしていた。それは未遂で終わったけれど、代わりに姉ちゃんは料理を始める。うちの台所を借りて、みそ汁を作っていた。神経質に、材料の一つ一つを計量器具で量っている。石食いの弱点を教えたシャガクシャに、自分の肉の代わりとして食べて欲しいそうだ。

「姉ちゃんのみそ汁かー」

「おっ、お母様がみそ汁だけは作れるようにって教えてくれたの」

オレは感動していた。幻の母ちゃんのみそ汁だ。オレを生んで直ぐに母ちゃんは死んだから、母ちゃんの料理を食べた記憶がない。オレの母ちゃんのみそ汁じゃないけど、姉ちゃんが「お母様」から伝授されたみそ汁だ。テレビ番組で言っていた家伝の味に違いない。そうに違いない。すごく興味があった。シャガクシャに食わせるなんてもったいないな。

「シャッ、シャガクシャ様、どうぞ……」

「けっ、妖怪がこんなもん食うわけないだろ」

ガタッ

オレは腰を上げ、シャガクシャに獣の槍を突きつけた。シャガクシャに拒絶された姉ちゃんは落ち込み、目を伏せている。今にも泣きそうだ。シャガクシャァ……今おまえは選択を誤った。オレが大切に思っている物を、おまえは拒絶したんだ。オレは視線でシャガクシャに訴えかける。

――姉ちゃんのみそ汁をおろそかにするとは良い度胸してんじゃねーか、ミンチにすんぞ……！

「わー、おいしいなー。何杯でも食えそうだー」

態度を一変させて、シャガクシャは口にみそ汁を放り込む。最初からそうすりゃいいんだよ。オレは座り直すと、オレの分のお椀を手に取った。「いただきます」と言って口に入れる……これ冷蔵庫に残ってた大根の切れ端だ。なんだか冷蔵庫に余ってた食材を片付けたみたいだな……家伝の……味……？

「よかったな姉ちゃん」
「うっ、うん……」
　シャガクシャに食べてもらって姉ちゃんは喜んでいる。ちょっとはシャガクシャも喜べよ……と思って見ると、シャガクシャは変な顔をしていた。なにか考え事をしているらしく、おかわりを姉ちゃんに渡されると機械的に▪ダバァーと口へ放り込んでいる。見る間に姉ちゃんのみそ汁は減っていく。なにやってんだ、おまえは……！
「あー？　なーんか頭に引っかかるな……？」
「シャガクシャァ！　てめー、もうちょっと味わって食えよ！」
「なんだと小僧？　わしに指図するんじゃねえ！」
「よーし、シャガクシャ。ちょっと表でろよ……ここじゃ姉ちゃんのみそ汁が零れちまう」
「やだね。おい、ガキ。これを鍋ごとよこせ。小僧の分まで食っちゃる！」
　オレとシャガクシャは鍋の奪い合いを始めた。とつぜん起こった争いに、姉ちゃんはアワアワと慌てて右往左往している。結局、シャガクシャが鍋ごと口に放り込んで決着した。頬を膨らませてボリボリと、ステンレス鍋ごとみそ汁を食べるシャガクシャに、オレは獣の槍を叩きつける。するとシャガクシャは金属を食えないらしく吐き出した。きったねぇ！

　シャガクシャのオレへの態度は兎も角、姉ちゃんへの態度は軟化している。姉ちゃんは食材を持ち込み、シャガクシャのためにみそ汁を作っていた。だけど、どうやらみそ汁以外の料理は苦手らしい……味が酷かった。姉ちゃんの味覚は人並み外れている。ちゃんと量らなければ、味のバランスが狂った料理が完成する。一度作って不評だった後は、みそ汁に戻った。姉ちゃんの「お母様」は本当に「みそ汁だけは作れるようにした」らしい。そうしている間に一週間経ち、オヤジが帰ってきた。
「うしおー、オヤジ様が帰ったぞー」
「おっ、おじゃましてます……」

時刻は午後7時、オレ達は食事中だった。とつぜん帰ってきたオヤジに、席から立ち上がった姉ちゃんが慌てて挨拶をする。一週間経って、すっかり忘れてた。姉ちゃんはオヤジの隠し子だった。だけど姉ちゃんから、写真以外でオヤジと会った事はないと聞いている。オヤジは自分の子供だと分かるのだろうか……？　そう思っているとオヤジは、オレを廊下へ連れ出した。

「おい、うしお。まさかお前、パパがいない間に彼女を連れ込んどるのか？」

「このボケオヤジ、おめーの娘だよ！」

「なにを言っとるんだ、お前は？」

オヤジは呆れた顔をする。あっ、このボケオヤジ分かってねーわ。オヤジは部屋を覗き、姉ちゃんの姿を確認する。そしてオレの顔に視線を戻した。その間オレはジトーと、半眼でオヤジをにらんでいる。オレの冗談だと思っていたオヤジは、やっとオレの態度に疑問を抱いた。

「え？　マジなのか？」

「マジマジ」

「しかし、あの子はうしおよりも歳下だろう？　父ちゃんは母ちゃんを裏切るマネはしておらんぞ」

「姉ちゃんは16歳で、オレの2歳年上って聞いてるぞ」

「時期を考えると母ちゃんと出会う前か……いいや、しかしなぁ……」

「姉ちゃんの「お母様」は『貴方のお父様は光覇明宗で優秀な法力僧だけど、獣の槍に選ばれなくて酒に逃げた蒼月紫暮です』って言ってたなー」

その言葉を聞いた途端、オヤジはピシリと固まった。ダラダラと汗を流し始める。これはアウトだ。思い当たる記憶があるに違いない。またオヤジは部屋を覗き、姉ちゃんの顔を確認した。その場でウンウンと唸り始めたオヤジだったけれど、誰の子供か思いつけない様子だ。やがて諦めたらしくオヤジは部屋に入って、姉ちゃんに話しかけた。

「私は蒼月紫暮と申します」

「はっ、はじめまして、蒼月麻子です……」
「おい、うしお。ドッキリじゃないだろうな？」
「現実を見ろよ、オヤジ」
　ドッキリでもビックリでもない現実だ。こうしてオヤジと姉ちゃんを並べてみれば、他人の空似じゃ済まされない。オレから見ても、オヤジと姉ちゃんに血縁関係があると分かる。性格は全く似てないけどな。オヤジの性格まで、姉ちゃんに受け継がれなくて良かった。
「麻子ちゃんのお母様の名前を、お聞きしても宜しいかな？」
「とっ、斗和子です」
「お母様のご職業は？」
「えっ、えーと……錬金術師……かな？」
　オヤジは姉ちゃんに質問する。錬金術師か……獣の槍を抜く前だったら、そんな話は信じられなかった。姉ちゃんの「お母様」は、妖怪退治に使う道具を開発しているらしい。そんな話をしていると、姉ちゃんは帰る用意を始めた。するとオヤジが姉ちゃんを引き留める。
「麻子ちゃん。外は真っ暗だから、今日は泊まって行きなさい」
「あっ、あの……でも……」
　とまどう姉ちゃんは、オレの様子をチラチラと探る。人食いのバケモノであるシャガクシャがいるから、うちに姉ちゃんを泊めた事はなかった。だけど姉ちゃんに対するシャガクシャの態度は軟化している。泊めても大丈夫だろうか……狙われるとするならば、オレかオヤジだろう。オヤジは泊める気のようだし、オレも姉ちゃんに頷いた。すると姉ちゃんは、パッと顔を輝かせる。
「そっ、それじゃあ、おじゃまします……」

　その夜、一度寝床に入ったオレは起き上がって、オヤジの寝室へ向かっていた。姉ちゃんの事もあって忘れてたけど、シャガクシャの事をオヤジに話していない。そういえば帰ってきたオヤジが、シャガクシャの存在に気付いた様子はなかった。見えていないのか？　とりあえず文句を言うついでに、人食いのバケモノに憑かれている事を相談しよう。

そうして部屋の前へ行くと話し声が聞こえた。ハッキリとは聞こえないけれど、高い女性の声だ。この家にいる女性といえば姉ちゃんしかない。いったいオヤジの部屋で何をしてるんだ？　姉ちゃんがいるのなら急に開けるのは不味い。声をかけるためにオレは足を止めた。すると扉の前に、なぜか姉ちゃんの剣が置いてある。

「はっ、恥ずかしい……」

そんな姉ちゃんの声が聞こえて、オレは扉をスパーンと開けた。まさかとは思ったけれど……腰を下ろしているオヤジの前に、裸の姉ちゃんがいる。プルプルと震える姉ちゃんは、大事な所を隠していた。『父ちゃんは母ちゃんを裏切るマネはしておらんぞ』なんて言葉を信じたオレがバカだったぜ……！

「なにしてやがる、この生臭坊主がーっ！」

「なにを勘違いしておるバカ息子がーっ！」

「あっ、あの、うしお、違うの。私が見て欲しいって言って……」

その言葉に振り返って見ると姉ちゃんは裸……ではなく、いつもの黒い服を着ていた。そうか……姉ちゃんが……姉ちゃんはオヤジに対して、いろいろと思う事があったのだろう。思い詰めていたに違いない。だけど、道を誤った子供を止めるのが、大人の役割ってもんだろうがー！

「このボケハゲ！　娘に手ぇ出してんじゃねー！」

「だれがハゲだ！　このチビ！」

ゲシッ

「息子を足蹴にするとはてめー！」

「てめーとはなんだ！　気にしてる事を！」

ドカッ

「いててて、なにすんだハゲ！」

「こーしてやる！　ちーびちーび！」

ポカッ　ポカッ

結局、戦いはオヤジの勝利に終わった。あいかわらずアホのくせにバカ強い。床に倒れるオレの周りを、アワアワと慌てる姉ちゃんが右往左往していた。オレに手を伸ばそうとするものの、途中で手を引っ

込めてしまう。シャガクシャは打ちのめされたオレを見て大笑いしていた。そんな混沌としている中、シャガクシャが見えないオヤジは説教を始める。
「うしお……お前も、もう14だ。そろそろ、この寺の住職の息子として、寺の縁起を知っておいても良かろう」
〜かくかくしかじか〜
オヤジによると蒼月家の祖先は、獣の槍でシャガクシャを封じた者らしい。この寺はシャガクシャを見張るために建てられた。蒼月家の口伝によると「土に通じる扉はひらくまじ」……そんな話をしているオヤジの後ろで、暇になっていたシャガクシャが「ふあー」とアクビをしている。オヤジ、そういう事は早く言えよ。手遅れだ。
「オレは父親として、おっちょこちょいのおめーが間違えて、そのドアを開けちまう前に言っといてやってるんだからな！」
「そうか！　分かったぜ、オヤジ！」
「あっ、あの……うっ、うしお、忘れてるよ？」
オヤジに返事を返して、オレは部屋を出て行こうとする。そんなオレに姉ちゃんが声をかけ、槍を差し出した。おーおー、そうだった。オヤジと喧嘩した時に放り出して忘れていた。巻いていた布が外れて、獣の槍があらわになっている。姉ちゃんから槍を受け取ると、オレは布を巻き直した。
「まて、うしお」
「は？　なんスか？」
「……」
「……」
「……」
「……」
「はっはっ、まさかな！　私としたことが……それが獣の槍だなんてあるわけがな……」
「そうだよオヤジ。バカだなあ……」
今まさに「おもえもなー」と言っているシャガクシャの事は黙っておこう。そうしよう。土蔵は扉が壊れた時のままだ。住家へ帰って

くる時に土蔵の前は通るけれど、きっとオヤジは暗くて気付かなかったに違いない。姉ちゃんは空気が読めるので、オヤジに余計な事は何も言わなかった。

翌日の朝、土蔵の前でオヤジはハゲ散らかしていた。気付いちまったか……それを無視してオレは中村や井上、それに姉ちゃんと共に出かける。行き先はデパートで開かれている絵画の展覧会だ。中村が「姉ちゃんを誘うように」と言って、オレも誘ってくれた。オレが前から見たいと思っていた羽生画伯の展覧会だ。

羽生画伯の描いた一人娘の「礼子像」のシリーズには感動する。だけど、熱心なファンがついて、美術賞も沢山もらって、これからって時に……変になった。人の目に釘を刺した絵、悲痛な表情を浮かべた人々の絵、悪魔の尻尾に突き刺された人の絵なんて感じに、暗い絵が増えていく。

そして一人娘が暗闇の中、小さな窓から差し込む光に照らされて、椅子に座っている絵が最後だった。その絵を最後に、羽生画伯は死んだ。その絵だけは写真だ。本物は一人娘の礼子さんが持っている。変だけれど、でも暗いムードがある、この絵をオレは好きだった。

「か～～っ、やだね～～。この『絵』とやらを描いたヤツは、別の人間どもを呪って死んでいったな……そうして死んでいった者は普通……」

――鬼になる

「ちっ、違うよ、シャガクシャ様。憎悪でも……愛情でも……、一つの想いに囚われた人は鬼になるんだよ？」

――るんっと剣が鳴いた

「けっ、大して変わりゃしねーよ……にしても、いつもは大人しいガキが、今日は語るじゃねーか」

「うっ、ううん……愛しているから殺すのと、愛したいから殺すのは違うから……」

翌日、オレと姉ちゃんは一緒に登校していた。とは言っても姉ちゃんに、学校へ行く用事はないはずだ。姉ちゃんは昼の間、何をしているんだろう？　と思って聞いてみると妖怪退治だった。シャガクシャの５００年分の妖気に引かれた低級の妖怪を退治しているらしい。５００年分の妖気か……石食いの事件以来、化物を見なかったから、すっかり忘れてた。

「姉ちゃん、がんばってるんだ」

「そっ、それほどでもないよ……」

頬を赤く染めて、イヤイヤと首を振る。そんな姉ちゃんを連れて、オレは学校へ向かった。今日の姉ちゃんは学校に用事があるらしい。どこかに隠れ潜んでいる化物がいるそうだ。さらに詳しく聞くと、羽生画伯に関係があると姉ちゃんは言った。昨日の展覧会にあった写真に、化物の気配が残っていたようだ。羽生画伯の最後の絵に……？

「おーい、うしおー。また妖怪退治かー？」

「今日はちげーよ」

オレと姉ちゃんが石食いを退治した事は有名になっている。中村と井上によると、そういう噂が流れているらしい。石食いの時にオレが上着をかけた生徒も、オレに礼を言って返しに来たしなー。今日は姉ちゃんと一緒に登校した事で、妖怪退治に来たと思われているようだ……姉ちゃんは化物探しに来てるから間違ってはいないか。

テレビ番組で、石食いによる失踪事件は報道されていない。何も知らない人から見れば、ちょっと姿が見えなくなった程度だからな。あの時、一人だけ石化を解除し忘れた生徒がいたけれど、搬送された病院は分からなかった。姉ちゃんによると妖怪退治の組織もあるから、石化を解除できない心配はいらないらしい。

「その和服の子どこで拾ったんだー？」

「オレの姉ちゃんだよ！」

姉ちゃんは着物を着ているから目立つ。そうして知り合いに声を返していると、足に何か引っかかった。よそ見をしていたオレは、転んで地面に倒れる。誰かの足に引っかかったのかと思って顔を上げると、倒れたオレを見下す男子生徒がいた……わざと足を引っかけら

れたんだ。
「やば……3年の間崎サンだよ」
「番格のかよ。おっかねーっていうぜ」
「2年の蒼月か……バケモノを倒したって有名だぜ。目立ちすぎなんだよ。分かるか？」
　そう言って先輩はオレを殴る。辺りにいる生徒から悲鳴が上がった。カッとなったオレは、先輩を殴り返す。すると先輩は足で、オレを蹴った。姉ちゃんに情けない所は見せられないと思ったオレだったけれど、それからは一方的な展開だ。オレは容赦なく殴られ、制服を泥で汚される。
　――るぅん
　オレが殴られている校門の前で、異質な音が鳴り響いた。それは、これまで聞いた中で一番、異様な音だった。校門の周りにいた生徒達の動きが止まり、先輩の動きも止まる。その隙にオレは両脚を跳ね上げ、先輩の顔にヘッドバットを食らわせた。そのせいで頭にガンガンと響く。それでも姉ちゃんの様子を見るために起き上がると、姉ちゃんは剣を抜いていた。
「あっ、あなたは殺してもいい人間？」
「姉ちゃんストーップ！」
　オレは慌てて姉ちゃんを止める。プルプルと震える姉ちゃんだけど、それ以上に震えているのが先輩だ。あの白い剣が出す異様な音は、人の心を侵すらしい。さっきまで元気にオレを殴っていた先輩も、顔を青くして立ち上がる事すら出来なくなっていた。オレは……慣れてきたのかも知れない。とりあえず、姉ちゃんを止めよう。このままじゃ本当に「うっかり」で先輩を斬っちまう。
「――わたしを斬りなよ。なんなら、殺してくれてもかまわない」
　姉ちゃんの剣の音色を聞いて、オレ以外にも動ける人がいた。だけど振り返ってみれば、その女子生徒は死人のような顔をしている……ぜんぜん大丈夫そうじゃなかった。でも、どこかで見覚えのある顔だな？　姉ちゃんは白い剣を抜いたまま、女子生徒にトテトテと近寄る。だけど、剣を鞘に納める事はなかった。

「あっ、あなたに憑いている鬼を斬りにきました」
と姉ちゃんはのたまう。オレは訳が分からない。だけど女子生徒は心当たりがあるようで、死人のようだった顔をハッという驚きの表情へ変えた……そうか、「一人娘」だ。羽生画伯の絵だ。あの絵に描かれた少女は、女子生徒の生き写しだった。姉ちゃんは「展覧会の写真に化物の気配が残っていた」と言っていた。あの女子生徒は、羽生画伯の一人娘に違いない。
「バカな事を……言わないで」
冷たかった声に感情が混じる。それは怒りだった。鬼を斬ると言われて、羽生さんは怒りを覚える。姉ちゃんが冗談を言ってると思っているのかも知れない。もしくは羽生さんは鬼の事を……そう思っていると姉ちゃんは剣を振り上げ、羽生さんの首筋に刃を当てる。
「それ以上はいけない！」と思って駆けよるオレだったけれど、とつぜん旋風が巻き起こった。
「うわあああああ!!」
「きゃあああああ!!」
姉ちゃんの剣の音色を聞いて、固まっていた生徒達が吹っ飛ばされる。砂嵐が姉ちゃんと羽生さんを取り囲んだ。布に巻かれた槍がキィィィィと震える……化物だ。近くに化物がいる。これは化物の仕業だ。砂嵐の向こうに巨人のような人影が見えた。オレは獣の槍の力を行使して、砂嵐に突っ込む。無数の砂粒に襲われ、目を開けていられなかった。
『ぐおおおおお!!』
「とうさん！」
砂嵐を抜けると、野太い悲鳴が聞こえる。羽生さんの悲鳴も聞こえた。ザワザワと髪を腰まで伸ばした姉ちゃんの前に、腕を斬り落とされた鬼がいた。すぐに新しい腕が生え、鬼の体は元に戻る。だけど頭を両手で押さえ、鬼は苦しんでいた。その隙に鬼へ斬りつけた姉ちゃんだけど、鬼の傷は間もなく再生する。斬っても無駄と思ったらしく、姉ちゃんは鬼から離れた。
『礼子だけだ……わたしには礼子だけなんだ……』

「おー、思いだした。あのガキの剣、見覚えがあると思ったぜ」
シャガクシャが苦しむ鬼を見て言う。姉ちゃんは鬼から視線を外さなかったけれど、シャガクシャの言葉に耳を傾けていた。シャガクシャは石食いの倒し方を教えてくれた。あの時のように、鬼を倒すヒントを教えてくれるかも知れない。そう思っていたものの、シャガクシャは別の事を話し始めた。
『礼子は父さんのものだ……守ってやる、守ってやるぞ』
「獣の槍が妖怪を殺すための槍なら、ありゃー人間を殺すための剣よ」
『礼子は私といるのが幸せなんだ』
「あの鬼は――鬼になっても残っていた「人間」を殺されたのさ」

――るんっ、と姉ちゃんの剣が鳴いた。
『――だから食いたい』

それは鬼だった。まさしく鬼だった。キィィィと鳴る槍が、少し前の鬼とは別物である事を教えてくれる。きっと鬼は羽生さんの父親、羽生画伯だったのだろう。だけど、もはや人の心など残っていない。ただの化物だ。白く濁った剣に人の心を斬られて、鬼に成り果てた。
『れいこおおお、食ろうてやるぞおお!!』
「……おとう……さん?」
豹変した鬼の姿に、羽生さんは呆然としていた。その体を巨大な手に掴まれ、鬼に連れ去られる。鬼は飛び上がり、その場から去っていった。鬼が去ると共に旋風が止み、砂嵐も治まる。姉ちゃんは剣を納めると、すぐに駆け出した。その後をオレも追おうとしたものの、後ろから聞こえた声に引き止められる。
「お、おい! 今のは何だ! 礼子は何所へ行った!?」
「羽生さんは……化物に連れて行かれた」
「くそっ!」
さっきの先輩だった。先輩は羽生さんの知り合いらしい。オレの言葉を聞くと、先輩は駆け出した。姉ちゃんの後を追うように走って

いく。だけど姉ちゃんの足は無茶苦茶はやかった。ちょっと目を外した間に見えなくなっている。どこへ行けば良いのか分からないオレは、先輩の後を追いかけた。

「先輩！　当てがあるのか!?」

オレの問いに先輩は答えない。だけど先輩が道に迷って足を止める事はなかった。やがて洋館に辿りつく。その上空で大きな一枚の絵を持った鬼が、姉ちゃんと交戦していた。姉ちゃんが、飛びながら戦ってる……姉ちゃんは鬼に突っ込む。鬼の手を斬り刻み、絵を落とさせた。その代わりとして姉ちゃんは、鬼の手に捕まる。

「姉ちゃん！」

「そっ、それに人がはいってるの！」

目の前に落ちた大きな絵を見る。羽生画伯の最後の作品だ。一人娘が暗闇の中に座っている絵だ。そういえば鬼に連れて行かれた羽生さんの姿が見当たらない。鬼に食われたのか。もしくは……そう思って絵に近付いたオレは、謎の力に弾き飛ばされた。この絵には、なにかある！

キンッ

獣の槍を振って、その何かを切った。そうして絵に触れると、絵の中に手が沈む。頭を突っ込んでみると、絵の中に謎の空間が広がっていた。そこに羽生さんが浮かんでいる。オレは絵の中に乗り込み、羽生さんに手を伸ばした。だけど、腕の長さが足りない。オレは槍を引っかけて、羽生さんの体を引っ張った。オレは羽生さんと共に、絵の中から脱出する。

「礼子！」

「間崎……賢ちゃん……」

「姉ちゃん！」

先輩と羽生さんの横で、オレは上空を見上げた。すると、自力で回転する白い剣が鬼の腕を斬り裂く。鬼の手から自由になった姉ちゃんは、こちらに向かって落ちてきた。その後を鬼が追っている。姉ちゃんは剣を振り上げ、落ちる勢いのまま、羽生画伯の絵に振り下ろした。

ガキッ

しかし、刃が通らない。鎧武者も斬り裂いた刃が、単なる紙に防がれた。どうなってるんだ？　それに、どうして姉ちゃんは鬼じゃなくて、この絵を狙う？　姉ちゃんは鬼の手に弾き飛ばされた。鬼は先輩ごと羽生さんを捕まえ、絵に引きずり込む。鬼の顔が浮かんだ絵を、オレは獣の槍で刺した。だけど、姉ちゃんと同じように小さな傷すら付けられない。

『ひひひ、効かんなあ。おまえもこい！　ゆっくりと食ってやる……』

オレも鬼の腕に捕まった。絵の中に引きずり込まれる。駆けよった姉ちゃんがオレの手を掴もうと手を伸ばし……だけど姉ちゃんは最後まで手を伸ばせなかった。あと少しという所で姉ちゃんは体を震わせ、オレの手を掴めない。指先が震えて、姉ちゃんの手は宙を掻いていた。泣き出しそうな姉ちゃんの表情が――

「おいっ、うしおっ！　みじめっぽく泣いてみろよ！　泣いて助けてくれっていやあ、助けてやってもいいぜぇ！」

姉ちゃんの後ろでシャガクシャが言う。そのシャガクシャが言っていた……鬼は姉ちゃんに人の心を斬られたのだと。今の鬼と比べれば、まだシャガクシャは心が残っているように見える。だからオレは助けを乞わなかった。シャガクシャが自分の意志で、オレに手を貸してくれる事を期待した。

そうして絵の中に引き込まれる。オレは槍を口にくわえ、先輩と羽生さんに両手を伸ばした。鬼が大きく口を開け、先輩と羽生さんを持っていく。2人を食べる気だ。それを阻止しようと、オレは2人の体を掴んでいた。鬼がオレを2人から引き離そうとして、腕が千切れそうになる。オレを捕まえている鬼の手が力を増し、体からミシミシと音が聞こえた。

「あ～!!　ホンっっとに腹が立つ！」

外から伸ばされた腕が、オレの頭を掴む。掴んで、絵の外へ引っ張られた。だけど、先輩と羽生さんもいる。鬼の腕はオレ達を掴んで放

さない。まだオレの半身は絵に取り込まれたままだ。シャガクシャはブツブツと文句を言いながら絵の中に飛び込んだ――シャガクシャは来てくれた。
「人間にゃ、潮時ってコトバがあるんだってな……今が、そいつよ！」
『ぎゃあああああ!!』
シャガクシャの爪が切り裂き、悲鳴と共に鬼の手が緩む。オレは先輩と羽生さんを引っ張り出した。オレは勢い余って、ゴロゴロと転がって姉ちゃんの横を通りすぎる。姉ちゃんは白い剣を両手で持ち、刃を絵に向けていた。凛として、剣を構える。立ち上がったオレに「うしお」と、姉ちゃんの安心する声が聞こえた。
「今だ、ガキ！　絵を斬れえっ!!」
絵の中から飛び出したシャガクシャは、姉ちゃんに合図を送った。姉ちゃんは白い剣を振り上げる。絵に向かって振り下ろす。だけど、その前に飛び出す影があった。羽入さんだ。羽生さんが姉ちゃんの前に飛び出し、絵の前に立ち塞がる。姉ちゃんの剣筋は迷いを見せて――
「やめてええっ！」
――るんっと、姉ちゃんの剣が鳴いた。

羽生さんの体に刃が埋まる。羽生さんごと、羽生画伯の絵は真っ二つになった。姉ちゃんの剣に斬られた羽生さんの肉体は、爆散して跡形もなく消え去る。まるで獣の槍で化物を刺した時のように……シャガクシャが言っていた。獣の槍が妖怪を殺すための槍ならば、あれは人間を殺すための剣だと。
「れ……れいこ？」
「ごっ、ごめんなさい！」
目の前で羽生さんが消え去り、先輩が呆然としている。姉ちゃんは謝っていた。羽入さんを殺した事を謝っていた。それでオレは姉ちゃんが、羽入さんを殺めてしまった事実を確認する。事故だったのかも知れない。だけど殺してしまった。骨も何も残っていない。

残っているのは、縦に引き裂かれた制服だけだ。
先輩はチリを掻き集める。かつて羽生さんだった物を掻き集めていた。涙を流しながら地面を這っていた。だけど風がチリを飛ばしていく。羽生さんだった物を飛ばしていく。羽生さんの着ていた制服には、まだ温もりが残っていた。その熱も少しずつ失われ、拡散して無くなった。
「……人殺し」
先輩が呟く。姉ちゃんは後退った。顔を上げた先輩は鬼のような顔をしていた。先輩と羽生さんの間に何があったのかオレは知らない。だけど先輩にとって羽生さんは、大切な人だったのだろう。姉ちゃんは怯え、先輩の視線から目を逸らす。体をプルプルと震わせ、剣をカタカタと震わせていた。
「人殺し。悪魔め！　どうして礼子を殺した!?　なにも殺す事なんてなかっただろうが!!」
「ごっ、ごめんなさい……」
「先輩、姉ちゃんは、羽生さんを殺そうなんて思っていなかった……！」
「黙れ！　バケモノを倒して良い気になってたんだろ！　ふざけやがって！　返せよ、礼子を返せ！」
先輩は泣き喚き、怒り狂う。姉ちゃんは剣を納める事も忘れて、青い顔をしていた。オレは姉ちゃんに飛びかかろうとしていた先輩の前に立ち塞がる。先輩がオレを殴り、オレも先輩を殴り返した。やがて先輩は力を失い、地面に倒れ伏す。先輩は空を見上げて「ちくしょうちくしょう」と呟いていた。
羽生画伯の絵は真っ二つになっている。羽生さんが暗闇の中、小さな窓から差し込む光に照らされて、椅子に座っている絵だ。姉ちゃんに斬られた今は、真っ黒な絵と化している。隅から隅まで、真っ黒に塗り潰されていた。小さな窓から差し込む光もなくなって、描かれていた羽生さんの姿は見えなくなっている。
なぜ羽生さんは姉ちゃんの前に飛び出したのだろう？　……きっと羽生さんは父親の事が好きだったんだ。鬼になっても父親の事が

好きだった。オレは、どうすれば良かったのか。鬼を殺すべきではなかったのか。落ち込むオレを見て、シャガクシャが頭にかじりつく。だけど、そんな事も気にならなかった。シャガクシャはモゴモゴした後、飽きたのか離れていく。姉ちゃんが泣いて、先輩が泣いて、オレも泣いて、化物を倒したのに誰一人すくわれていなかった。

もう二度と、羽生さんの笑顔を見ることはできない。

光覇明宗は殺人の罪を裁く

オレの肩にシャガクシャが乗り、手に獣の槍を持っている。もちろん獣の槍は見えないように布を巻いていた。カバンを持ち、クツを履いて、「行ってきます」という。するとオレを見送る姉ちゃんは「行ってらっしゃい……」といった。羽生さんを殺してしまった姉ちゃんの声は弱々しく、あの日から元気がない。

学校へ登校すると、ヒソヒソと声が聞こえる。オレを見た学生が噂話をしていた。羽生さんが行方不明になった話だ。噂話によると「呪われている」と有名だった羽生さんの下にオレと姉ちゃんが妖怪退治へ行って、羽生さんが行方不明になった。「殺した」とは言われていないけれど、なにか後ろ暗い事があると思われている……それは間違っていない。

石食いという化物を倒したとして有名になっていた名前は、悪名へ転じていた。前はオレへ親しげに声をかけていた人々が、今はオレから距離を置こうとしている。話しかけても、すぐに会話を打ち切って、オレから離れようとしていた。そういう風に逃げるような態度を向けられるのが辛い。そんなオレに、中村が声をかけた。

「どうしたのさ、蒼月」

「姉ちゃんが、事故で羽生さんを殺しちまったんだ……」

「そう……それって妖怪絡み？」

「羽生さんのオヤジさんが鬼だったんだ。それを姉ちゃんは斬ろうとして、羽生さんはオヤジさんの盾になった」

「そうなの……蒼月のお姉さんは大丈夫？」

「あの日から元気がない。こんな時に限ってオヤジは、また遠出してやがるし……」

「そうなんだ……じつはあたし礼子と知り合いだったんだけど、蒼月はお姉さんを如何したいの？」

「……どうって？」

「このまま礼子の命を奪った事を、無かった事にしたいの？」

今、羽生さんは行方不明という事になっている。警察が行方を捜索

していた。羽生さんの家に激しく争った跡、つまり鬼と戦った跡が残っているので、事件に巻き込まれたと思われている。学生の失踪で、家に激しく争った痕があり、さらに羽生さんは有名な羽生画伯の一人娘だ。そのニュースはテレビ番組で報道され、世間を騒がせていた。

羽生さんの命を奪った事を、無かった事にはできない。もしも、それを隠し通して生きたとしても悔やみ続けるだろう。現に姉ちゃんは苦しんでいる。心の内に秘めて苦しむよりも、すべて話してしまった方がいい。もちろん姉ちゃんだけに背負わせるつもりはない。オレだって、あの場にいたんだ。

「うっし、中村サンキューな！」

「がんばってね、うしお」

オレは家へ戻る。すると姉ちゃんはオレの顔を見て、パッと顔を明るくした。この反応にオレは驚く。昨日はオレが帰ってきても、こんなに姉ちゃんが元気になる事はなかった。昨日は元気のない表情で、帰ってきたオレを迎えていた。姉ちゃんも気持ちを切り替えるような事が、なにかあったのかも知れない。

「なにか良い事でもあったのか？」

「うっ、うしおが元気になったから、私も嬉しいの」

その言葉に違和感を覚える。なんだろう。なにか、おかしい。ズレを感じた。それじゃ、まるで姉ちゃんが、人を殺した事を何とも思っていなかったかのような……いいや、羽生さんを殺してしまって元気のない姉ちゃんに、余計な不安をかけてしまった。姉ちゃんもオレの事を心配していたんだ。だけど、そんな姉ちゃんにオレは、辛い現実を突きつける。オレには2つの選択肢があった。

姉ちゃんに自首させる――――――――――――――――――――――――――――姉ちゃんに自首させない

↓姉ちゃんに自首させる

「オレも一緒に行くから――姉ちゃん、自首しよう」
「うっ、うん……」
あっさりと姉ちゃんは頷いた。姉ちゃんも、このままではダメだと思っていたに違いない。オレと姉ちゃんは、自首する準備を整える。獣の槍は置いて行こうかと思ったけれど、手放せばシャガクシャに食われる。姉ちゃんの白い刀も、羽生さんを殺害した凶器なので持って行くことにした。
「とりあえず近くの交番へ行こう。あそこの警察官なら見知った人だから」
「うっ、うん……」
いきなり警察署へ行くよりも良いだろう。それに化物の話を信じてくれるか分からない。交番にいる知り合いの警察官なら、話くらい聞いてくれるはずだ。そういう訳で交番へ行ったオレは、姉ちゃんの代わりに警察官に事情を説明した。すると警察官は何処かへ電話をかける。
「迎えが来るから、1時間ほど待っててくれるかの」
1時間とは、ずいぶんと長い。警察署からパトカーが来るとしても、そんなに時間はかからないはずだ。不思議に思って聞いてみたものの、返事は曖昧なものだった。行き先は言えないらしい。どういう事なのだろう？　緊張している状態で、一時間も待つのは辛かった。知り合いの警察官がアメを差し出してくれたので、ありがたくいただく。
「お待たせいたしました」
そう言って現れたのはオヤジだった。黒い法衣を着ている。てっきり警察官が来ると思っていたオレは、オヤジが来たので驚いた。考えてみれば当たり前の話か。オレはオヤジに連絡する手段を持っていなかったけれど、知り合いの警察官は連絡先を知っていたらしい。保護者が呼ばれるのは当然だった。
「ついてきなさい」
だけどオヤジの様子はおかしい。オレに何も聞かず、先導を始めた。車に乗って移動し、その次はヘリコプターに乗せられる。狭い機

内をシャガクシャは嫌がって、ヘリコプターの外を飛んでいた。いったい何所へ行くんだ？　ヘリコプターは山奥へ飛んで行く。やがて山や木々に囲まれた寺院が見え始めた。
「……あれ？」
　そこでオレは気付く、ヘリコプターの横を飛んでいたシャガクシャが居なくなっていた。ヘリコプターの後ろを見ると、離れて行くシャガクシャの姿が見える。シャガクシャは見えない壁に打つかったような格好をしていた。その見えない壁と格闘しているシャガクシャだったけれど、やがて距離が離れて小さくなる。
　シャガクシャは隙あらばオレを食おうとする。そのために、ずっとオレに張り付いていた。それなのに何やってんだ？　もしかして本当に壁でもあるのか？　オレから離れて好き勝手するんじゃないかと心配になる。だけどヘリコプターに乗っている俺は戻れなかった……あんな奴だけど、居ないと寂しくなるな。
「オヤジ、ここって何所だ？」
「光覇明宗の総本山だ」
　やっとオヤジが答えてくれた。光覇明宗は、うちの宗派だ。うちの寺も光覇明宗の所有する土地で、オレやオヤジの住んでいる住家も光覇明宗のものだ。オヤジが光覇明宗の僧侶だから、あの家にオレは住んでいられる。もしもオヤジが破門にされたら、あの家から出て行く事になるだろう。
　だけど、分からない。どうして自首した姉ちゃんとオレは警察署じゃなくて、光覇明宗の総本山へ連れて来られたんだ？　時間も、もうすぐ日が沈む頃だ。夕日に照らされた建物は、古風な木造建築だった。その敷地にあるアルミニウム製のヘリポートは場違いに思える。そう思っているとオヤジが口を開いた。
「これより羽生礼子の殺害に関する処分が言い渡される。私は関係者の親族に当たるため、関わる事はできない」
「待てよ、オヤジ。なんで警察じゃなくて、うちの宗教の本拠地なんだ？」
「うちの寺――宗門には2つの顔がある。一つは普通の宗教として仏

の教えを衆生に広くひろめ魂の救いとすること……もう一つは世にある数多の妖怪たちを封じ、あるいは滅し、日本より外に出さず、ニラみを効かせることだ」
「……？」
「つまり、光覇明宗は妖に対する警察所でもあり、裁判所でもあるという事だ」
「そうだったのか……ちぇーっ、言ってくれたって良かったのによ」
「これは秘密の事よ。おまえがペラペラ話して、光覇明宗を俗な胡散臭いもんにする訳にはいかん」
　妖怪の犯した罪を裁くのが、光覇明宗なのか。姉ちゃんが命を奪ったのは羽生さんだけど、それには鬼が関わっている。普通の裁判所ならば姉ちゃんは殺人の罪を問われるけれど、妖怪の存在を考えに入れる裁判所ならば罪は軽減されるかも知れない。そんな風にオレは期待していた。
　オレと姉ちゃんはオヤジに連れられて、古風な建物の奥へ進む。そして大きな襖障子（ふすましょうじ）の前で足を止めた。関係者の親族に当たるオヤジは、ここから先へ進めないらしい。オレは当事者なので良いのだろう。
「武器の類いは、ここに置いて行け」
　オレは布で巻いた獣の槍を見る。オヤジは、これを槍だと知っているのか……まぁ、でかいし、そりゃあ見れば武器と思うか。シャガクシャは居ないし、槍を手放しても大丈夫だろう。なのでオレは獣の槍をオヤジに預けた。姉ちゃんも震える指先で、白い刀を置く。そうしてオレと姉ちゃんの準備が整うと、目の前の襖障子が開かれた。

　そこは大広間だった。オヤジと同じ、黒い法衣を着た人々が座っている。問題なのは。その人数だった。百を超える数の僧侶が、入ってきたオレと姉ちゃんを見る。オレは気圧され、姉ちゃんは「ひっ」と悲鳴を上げた。そんな僧侶たちの間に、空いた道がある。その奥には黒い法衣を着た僧侶たちとは対照的な、白い着物を着た女性がいた。
「先へ進みなさい」

案内役の僧侶に促される。だけど姉ちゃんは、血の気が引いて固まっていた。どう見ても前へ進めそうにない。だからオレは姉ちゃんと手を繋ぐ。オレは初めて、姉ちゃんの肌に触れた。驚いた姉ちゃんは「ひゃ!?」と声を出して体を引く。それでもオレは、姉ちゃんの手を放さなかった。

姉ちゃんは他人に触られる事を恐れる。あの剣（つるぎ）は姉ちゃんにとって、心を守るための刃だ。もしも他人に触られても、最悪でも斬ってしまえる。他人に傷付けられても、そいつを斬ってしまえる。その刃を剥ぎ取られた今、姉ちゃんの心は無防備だった。心を守るための手段がなかった。

だったらオレが姉ちゃんの心を守る。歳上なのに姉ちゃんの手は、オレよりも小さかった。そんな姉ちゃんの手をオレは包む。手が離れないように、しっかりと握りしめる。そうして姉ちゃんの進む道を、オレが切り開くんだ。たくさんの僧侶に囲まれる中、オレは姉ちゃんの手を引いて、大広間の中心へやってきた。

「これより羽生礼子を死に至らしめた自称・蒼月麻子と蒼月潮の処分を言い渡す。一、蒼月麻子は滅殺処分とする。二、蒼月潮は光覇明宗にて指導処分とする」

滅殺？　オレの事は如何でもいい。それよりも姉ちゃんの処分に、オレは混乱を隠せなかった。理解が追いつけない。どうしてそうなったのか、さっぱり分からない。そう思っていると処分を言い渡した僧侶は、続けて詳しい内容を語った。オレが警察に話した事情も含まれて、やたら長い。纏めて言うと、次のような内容だった。

一、蒼月麻子は滅殺処分とする。

蒼月麻子は羽生礼子を死に至らしめた。これは羽生礼子に憑いた鬼を滅殺する過程で、蒼月麻子の過失によって損なわれたものである。本来であれば過失に至った事情は考慮されるものであるが、蒼月麻子は認可を得ないまま繰り返し妖（あやかし）退治を行っており、特別緊急の対処が必要な状況ではなかったにも関わらず、安易に鬼と接触して状況を悪化させたため、蒼月麻子は重大な過失を犯したものと

推定される。
二、蒼月潮は光覇明宗にて指導処分とする。
蒼月潮は蒼月麻子を補助し、羽生礼子を死に至らしめた。とは言え、蒼月潮は羽生礼子殺害の当日より数日前に初めて妖の存在を知り、やむをえぬ事情で『獣の槍』を使用していたものであり、鬼の滅殺に関わった理由も善意と推定されるため、その罪が特別重いものとは言えない。
そも、蒼月潮は妖から自衛するために緊急の対処が必要な状況であった事は明らかであり、光覇明宗が妖に対処する組織である事を蒼月潮は父親である蒼月紫暮から知らされておらず、その後も独力で『獣の槍』から解放された妖に対処する必要があったため、『獣の槍』の無断使用は酌量（しゃくりょう）が認められるものである。
また蒼月潮が『獣の槍』の占有を止め、光覇明宗に返還する事で、所有者の許可なく無断で使用した罪を軽減する。

オレにとって重要なのは姉ちゃんが滅殺、つまり死刑になるという宣告だ。震える姉ちゃんの手が冷たい。こんな一方的な結末は認められなかった。オレは姉ちゃんと手を繋いだまま、ダンッと片足を立てて腰を浮かす。そうして抗議しようと思ったオレは、周囲の僧侶に取り押さえられた。
「待てよ！　姉ちゃんは羽生さんを助けようと必死だったんだ！　羽生さんを絵の中から助け出すために、助ける時間を稼ぐために、わざと姉ちゃんは鬼に捕まってたんだぞ！　そんな姉ちゃんを殺そうとするなんて間違ってる！」
「その時は、そうだったのかも知れぬ。だが、その危機は蒼月麻子の軽率な行動によって引き起こされたものなのだ」
「だからって、姉ちゃんの命を奪ったって、なんにも生らないだろ……！」
「そも蒼月麻子は化物であり、人を殺めた化物を見逃す事などできぬ――『白面の剣』とあれば、なおさらのことだ」
「姉ちゃんが化物だなんて、訳の分かんねぇこと言ってんじゃねー！」

「まだ分からぬのか？　アレは中村麻子という、お前の『姉』でもなければ、『人間』でもなく、『妖（あやかし）』でもない――何者かによって造られた人形だ」
　顔に火傷の痕がある僧侶が言う。その僧侶の言っている事が分からなかった。姉ちゃんが人形だって？　姉ちゃんはオレの腹違いの姉だ。オヤジが母ちゃんと出会う前に作った子供のはずだ。それが全て偽りとでも言うのか？　人間じゃないって言うのか？　あの温もりが偽りだとでも言うのかよ……！
　オレは大広間の外へ引きずり出される。姉ちゃんはオレに背を向けたまま、大広間の中央に座り続けていた。まるで死を受け入れているかのように……だけどオレは、姉ちゃんの手が震えている事を知っている。たぶん姉ちゃんは、こうなるって分かってたんだ。オレは姉ちゃんの手を引っ張って、死刑場へ連れて行ってしまった。
「おんっ！」
　大広間の僧侶が、一斉に詠唱を始める。すると姉ちゃんの体がピンッと張り、ギリギリと締め付けられた。オレは僧侶を振り払って、大広間へ突っ込もうとする。だけど、大広間の入口に張られた何かに弾かれた。なんだ？　なにかある？　まるで羽生画伯の絵に触れなかった時のように……？
「姉ちゃん！　すぐ助けるからな！」
　なんだか分からないけれど、獣の槍があればコレを切れるはずだ。大広間の外に控えていたオヤジを見る。オレはオヤジに槍を預けた。だけど槍は、オヤジの後ろに控える僧侶が持っている。長い数珠を巻き付けられていた。オヤジはシャラシャラと鳴る錫杖を持ち、オレを迎え撃つ体勢を取っている。
「自分の娘が殺されてもいいのかよ、オヤジィ！」
「光覇明宗、蒼月紫暮――参る」
　どいつもこいつも分からず屋が！　わずか1秒だって時間が惜しい。あんなものに、姉ちゃんが何秒も耐え切れるなんて思えない。答えないオヤジに、オレは殴りかかった……その時、思ってもいなかった方向から加勢される。白い剣を抱えた僧侶のツルツルな頭から、

ニョキっと髪の毛が生えた。髪をザワザワと伸ばし、数珠を巻いたままの白い剣を振り上げ、背後からオヤジに襲いかかる。

メキョッ

「血迷ったかー!?」

頭部を強打されたオヤジは、オレの目の前で地面に倒れた。オヤジに襲いかかった僧侶は続けて、獣の槍を持つ僧侶に襲いかかる。僧侶は槍を使って防ごうと思ったものの上手く行かず、裏切った僧侶によってノックアウトされた。裏切った僧侶は数珠を引き千切り、白い剣を抜いて――そして、あの音が鳴り響く。

るぅぅぅん

おぞましい音色が頭の中を掻き回し、チカチカと脳裏で光が瞬く。自分の体を自分のものでないように感じ、体に付いている分厚い肉を振り落としたくなる。ガリガリと肌を掻き、内側にある魂の解放を求め、爪が肌を傷付けるのも構わない。むしろ血肉を掻き出すために必要なことだった。

ゴチン

と頭を叩かれて、オレは正気に戻った。首を掻いていたのか、ヒリヒリと痛みを感じる。オレの頭を叩いたのは裏切った僧侶だ。左手に真っ白な剣を持ち、右手に獣の槍を持っている。その槍でオレの頭をペチペチと叩いていた。オレが正気に戻るまで待っていたらしい。

「だっ、だれだ……?」

「我等は『白面の剣』よ」

「白面の剣? たしか姉ちゃんの事を、そう呼んでいた奴がいた……」

「我等は『白面の剣』であり、汝の姉も『白面の剣』である。時間がない。先に行くぞ」

そう言って裏切った僧侶は、姉ちゃんの剣と獣の槍を持って、大広間へ足を踏み入れる。大広間の見えない壁はなくなっていた。大広間の中にいた僧侶たちを見て、オレは表情を歪める。僧侶たちの多くは床に倒れ、もがき苦しんでいた。首を掻いたり、頭を床に打ちつけ

ている。首から出血したまま動かなくなったり、頭に床を打ちつけたまま動かなくなっている者もいた。見るに堪えない光景だった。
そんな地獄を意に介さず、裏切った僧侶は進んでいた。大広間の中央に倒れている姉ちゃんの下へ走って行く。オレ以外にも無事な人はいたらしく、大広間の奥には多くの僧侶が正常な状態でいた。その中心には白い着物を着た女性がいて、僧侶たちは光り輝くなにかに覆われている。
「逃げ足が必要か……気が向いてくれるといいが」
と言って、裏切った僧侶は板張りの天井を見上げる。そして槍を構え、空へ投げた……獣の槍がー!? なんで投げた!? 獣の槍は天井を貫いて見えなくなる。そして裏切った僧侶が再び歩み始めた時、ドシンッと大きな揺れが起こった。立っていられないほどの激震だ。無事だった僧侶の一人が悲鳴を上げる。
「バカな! まさか本山の多重結界がーっ!」
裏切った僧侶は姉ちゃんの下へ辿りつく。そして白い鞘を差し出した。すると倒れていた姉ちゃんの手が動き、差し出された鞘へ伸ばされる。だけど、白い鞘を握ったまま姉ちゃんは動かなくなった。やっぱり無理だ。あんな目にあった姉ちゃんは、自力で動けない。
ドオン
今度は天井が吹き飛んだ。大穴が開いて、そこから雷を纏った化物が舞い降りる。ヘリコプターに置いて行かれたシャガクシャだった。シャガクシャは大きな塊を、そこら辺にポイッと投げる。それは人間の塊だった。グチャグチャに潰された僧侶が、一つの塊となっている。
「シャガクシャァー! おまえ、・なにやってんだよ!?」
「そこら辺をぶらついてたら、こいつらが突っかかってきたからよ――かるーく撫でてやったのさ」
「おまえがやったのか!?」
「そんな事より……ちっと見ない間におもしれぇー事になってるじゃねーか?」
シャガクシャはニヤニヤしながら辺りを見回す。正気を失って自

傷する僧侶たちの姿を見回していた。なにが面白いんだよ!? オレはチラリとオヤジを見る……白い剣で殴られたけど、鞘付きだったから大丈夫だろう。そう思ってオレはオヤジを置いて、姉ちゃんの下へ行くために大広前へ踏み込んだ。

「おい、小僧。こっちへ来るってーことが、どーゆーことなのか分かってんのか?」

シャガクシャが警告する。シャガクシャがフワリと、姉ちゃんの側に舞い降りた。すると裏切った僧侶は姉ちゃんを抱えて、シャガクシャの背中に乗せる。それに嫌がるシャガクシャだったけれど、白い刀を持った僧侶に脅されているようだった。そして重力に引かれ、空から落ちてきた獣の槍が、その場にドンッと突き刺さる。

前に姉ちゃんたちがいた。後ろにオヤジがいた。このまま前に進めば、オレのせいでオヤジは破門にされるかも知れない。そうなれば、生まれ育った家を追い出される事になるだろう。オレは、どうすればいい……? オヤジは気絶したままで、なにも答えてくれなかった。

姉ちゃん達と一緒に行く――――――――――――姉ちゃん達と一緒に行かない

↓姉ちゃん達と一緒に行く

「わりぃな、オヤジ。今まで育ててくれて、ありがとよ」

中村と井上に、親しかった学校の友人に――日常に、さようなら。

オレは姉ちゃんの下へ駆け出した。

獣の槍を拾い、シャガクシャの背に飛び乗る。意識の曖昧な姉ちゃんを抱きしめた。もう二度と放さない。放したくない。姉ちゃんの魂を手放してしまうような気がするから……僧侶たちの攻撃を受け

たせいか、姉ちゃんの黒い着物はなくなっていた。なのでオレの上着を脱いで被せる。そうしているとシャガクシャが浮き上がった。だけど裏切った僧侶は乗っていない。この場に残るつもりなのか？

「あんたは、どうするんだよ……？」

「ひひひ……獣の槍の伝承者よ。魂を食われた人間の末路を教えてやろう。真似はするなよ？」

裏切った僧侶は白い剣を構える。その髪が伸び、その体が膨らみ、変化を始めた。その皮膚が白く色を変え、虹色の輝きを放つ。いいや、もはや皮膚ではなかった。それは金属だ。僧侶は見る間に白銀の西洋甲冑へ姿を変えた。変化を終えると白い剣を、姉ちゃんが握りしめている鞘へ納める。西洋甲冑は無手の状態になった。

『獣の槍の伝承者よ。憶えておけ。こうなれば、もはや人には戻れぬ——永久の別れだ』

「なにやってんだ！　待てよ……！」

白銀から虹色の輝きを放つ西洋甲冑は、少し前まで人間だったバケモノは言った。あっさりと人間を捨てたバケモノに、オレは怒りを覚える。仲間を裏切り、バケモノと成り果てた僧侶が、無事で済むはずがない。名前も知らないけれど、こいつを置いては行けない。だけどオレの手は西洋甲冑を掴めなかった。突き放されて、シャガクシャの背に戻される。

シャガクシャが飛び上がり、西洋甲冑は大広間の奥へ走り出した。西洋甲冑は光り輝くなにかに打つかって、それを打ち破ろうとしている。その光が突然きえると僧侶たちから光が飛び、西洋甲冑に襲いかかる。その最後を見届ける事なく、シャガクシャは建物の外へ出る。

「雷よォ！」

シャガクシャが雷（いかづち）を呼び、光覇明宗の総本山へ落として行く。雷と炎が、夜の真っ暗な総本山を照らした。あの白い刀の音色は遠くまでは届かないらしく、外を元気に走り回っている僧侶たちの姿が見えた。無事な人達の姿を見て、オレは安心する。シャガクシャが空を飛ぶため、総本山は瞬く間に遠くなった。追っ手もなく、脱出は成功したらしい。

「おい、うしお。あてはあんのかよ？」
「とりあえず、うちへ行くか」
「わ……わたしの……家……」
「姉ちゃん！　まだ安静にしてないと」
　とりあえず一度うちへ帰ろうと、オレは思っていた。だけど姉ちゃんの提案で、▪▪姉ちゃんの家へ行く事になる。姉ちゃんの「お母様」の家だ。姉ちゃんに場所だけ教えてもらって、シャガクシャに飛んでもらう。うちに残した物はあるけれど、僧侶に発見される恐れがあった。帰る必要がないのならば帰らない方がいい……帰ったらきっと、二度と戻れないと思って、行くのが辛くなる。
「なあ、シャガクシャ。オレはお前に誰も殺して欲しくないんだ」
「あん？　なに言ってんだ。化物がニンゲンを殺すのは当たり前だろーが」
「お前にも姉ちゃんにも、人を殺して欲しくない」
「けっ、そんなこと言ったって、化物を見ればニンゲンは襲いかかってくるんだぜ？」
「オレが守るさ。守れるように強くなる。お前や姉ちゃんが、誰も殺さなくていいくらいに……」
「うつけもんが……寝言は寝て言いな」

　――誰よりも強く、より強く
　誰も殺さなくて良いように――
　――誰も命を落とさないように強くなるから

斗和子さんによる獣の槍破壊実験

シャガクシャの目は夜でも見通せるらしい。夜明けを待たず、目的地へ向かった。姉ちゃんの実家は山奥に建っている。とても大きな洋館だ。東館と西館に分かれていた。だけど真夜中なので明かりは見当たらない。外と同じで真っ暗だ。月の明かりを頼りに、オレは地面へ下りる。

「シャガクシャ、運んでくれてありがとよ」

「勘違いすんなよ、小僧。そのガキが死んだら、わしへの貢ぎ物が減るからな」

姉ちゃんのみそ汁の事だ。シャガクシャは裏切った僧侶に脅されて、姉ちゃんを背中に乗せた。だけど途中で落とそうと思えば落とせただろう。シャガクシャが食おうと思えば食われていた……そのときギィーと扉が開いた。オレの目の前で洋館の扉が、内側から開く。そこから姿を見せたのは、黒衣の女性だった。

「夜遅くにすいません。ここが麻子の家と聞いて……」

「ええ、そうよ。私の名前は斗和子。総本山では大変だったようね。ここは安全だから安心してもいいのよ」

「オレの名前は蒼月うしおです」

「ふふふ。まさか、こんなに早く獣の槍と会えるなんて思わなかったわ……」

真夜中だったけれど姉ちゃんの「お母様」は出迎えてくれた。どうやら総本山で起きた事は、すでに知っているらしい。お母様の案内で、オレは姉ちゃんの部屋へ案内される。そこは机も本棚もない殺風景な部屋だった。ベッドしか置かれていない。ここは本当に姉ちゃんの部屋なのか？

「大変だったわね。だけど大丈夫。この様子なら、日が昇る頃には回復するわ」

「そっか。よかった……」

お母様は姉ちゃんの剣を手に取り、姉ちゃんの肌に指を沿わせる。姉ちゃんの服は僧侶たちに剥がされたので無くなっていた。すると、

お母様の指先から黒いものが広がって、黒い着物へ変化する。姉ちゃんは眠ったまま、いつもの黒い着物の姿になっていた。これは石食いの体液で、姉ちゃんの服が溶かされた時のようだ。
「あら、見た事があるようね。この術をアサコに教えたのは私なの……何回この子の肌を見たのかしら？」
「い、いや、オレは、その……」
「ふふふ、気にする必要はないのよ。化物と戦っていれば服が破れる事もあるわ……今回の相手はニンゲンだったようだけれど」
　あの術はお母様から伝授されたものだったのか。姉ちゃんはお母様から、みそ汁も伝授されている。少し表情に陰があるけれど斗和子さんは、優しい母親に思えた。オレにも母ちゃんが居たらなぁ……だけど母ちゃんは、オレが生まれて直ぐに死んでしまった。墓参りにも行った事がある。
「それにしても、まさか蒼月紫暮と須磨子の子供が、獣の槍に選ばれるとはね」
「オレの母ちゃんを知ってるんですか？」
「ええ、とある大妖を封じる3代目のお役目様――日崎須磨子」
「え？　お役目様……？」
「その様子だと、父親から何も聞いていないようね。聞きたい？」
「……いや、いいよ。死んだ母ちゃんの事なんてオレは知らないし、どうでもいい」
「死んだ？　須磨子が？」
「オレが生まれて直ぐに死んだってオヤジが言ってた」
「――ふふふ、そんな訳ないじゃない」
　オレの心にピシリと、ヒビが入る。なにを言っているんだ、この人は……まるで母ちゃんが生きているかのようにお母様は言う。そんな訳がない。そうだとしたら――どうしてオレの側にいない？　生きているのだとすれば、どうして死んだ事になってるんだ？　そんな事はありえない。
「ウソだろ」
「ウソじゃないわ」

「オヤジは死んだって言ってた」
「貴方の母親は生きている」
「母ちゃんの墓だってあるんだ。そんなウソつくなよ！」
「生きているわ。今も3代目のお役目様として、海で働いている」
「そんなの信じられねぇよ……！」
　そうだとしたら――オレは母ちゃんに捨てられたって事になるじゃないか。死んだのだから会えないのは仕方ない。居ないものを気にしても仕方がない。母ちゃんが居なくて辛い時もあったけど、そう思って生きてきた。なのに、姉ちゃんのお母様は否定する。オレの母ちゃんの生存を肯定して、オレの心を否定した。
「ごめんなさい。つらい思いをさせてしまったわね」
　そう言ってお母様は、オレを抱きしめた。温かい感触を感じて、息が詰まる。その温もりはオレの心に染み込んだ。その態度にオレは戸惑う。体に電気が流れたような、心地いい感触を感じた。お母様と触れた部分がムズムズする。心臓がドキドキと鳴って、体が熱かった。
――天にます　神さまよ
――この子にひとつ　みんなにひとつ
――いつかは恵みをくださいますよう
　優しい子守唄が聞こえる。その優しさにオレは溺れていった。逆らいがたい、深い眠りへ落ちていく。今だけは、すべてを忘れてもいいのだろう。許されている気がした。シャガクシャが如何しているのか、オヤジが如何しているのかなんて、不安が消えていく。オレは力を抜いて、姉ちゃんのお母様に全身を預けていた――あぁ、あったかいなぁ。かあちゃんみたいだ。
　朝になって姉ちゃんは目覚める。喜んで走り寄ったオレは、その勢いのまま姉ちゃんに抱きついた。斬られるかと思ったけれど、姉ちゃんは石のように固まっている。よく見ると、姉ちゃんの剣がなかった。オレは剣に触ってないし、お母様が持って行ったのだろうか？
「目覚めたようね。無事で良かったわ、麻子」

「うっ、うん……ただいま」
　姉ちゃんの部屋を訪れたお母様は、姉ちゃんに剣を返す。すると姉ちゃんは剣を、大切そうに抱きしめた。だけど、その剣があるとオレは姉ちゃんに触れない。あの剣は姉ちゃんにとって心の支えだから、無理に引き離すことはできなかった。また触れ合えなくなった事を残念に思う。
　その後、オレと姉ちゃんは朝食の席に招かれた。テーブルに着いているのは、オレと姉ちゃんとお母様の3人だ。だけど食器は4人分用意されている。どうやらシャガクシャも数に入れているらしい。席に着いたオレは「いただきます」と言って、朝食をいただいた。
「あっ、あれ？　パンじゃないんだ。珍しいね？」
「今日はお客様が居るから和食にしたの。うしお君の家の宗派は光覇明宗だから、洋食を食べる習慣はないのでしょう？」
　テーブルに並んでいるのは白い御飯とみそ汁だ。姉ちゃんによると、いつもはパンらしい。オレだってパンは食べるけど……好んで食べるのはクリームパンと牛乳の組み合わせだ。だけど、本物の「母ちゃんのみそ汁」には代えられない。感動のあまり出そうになる涙をこらえつつ「うめぇうめぇ」と言いながら、おいしくいただいた。
「キッ、キリオは？」
「あの子なら、今は妖怪退治のために出ているわ」
「そっ、そうなんだ……」
「姉ちゃん、キリオって？」
「わっ、わたしの弟だよ？　血は繋がってないけど……」
「4人しかいない獣の槍の伝承候補者なの。私の自慢の息子だわ」
「あれ？　姉ちゃんは斗和子さんの子供じゃ……？」
「血が繋がっていないのはキリオなの。でも、そんな事は忘れるくらい、私の息子だと思っているわ」
　つまりキリオは、オヤジの血もお母様の血も引いていないのか。オレとキリオに血縁関係はない。まあ、そんな事とは関係なく、キリオと仲良くしたいけどさ。ところで獣の槍の伝承候補者って何だ？
食事を終えたオレはお母様に聞いてみる。オレ達を逃がしてくれた

僧侶は「獣の槍の伝承者」とオレの事を呼んでいた。
「光覇明宗に使い手として選別された才能ある者が「獣の槍の伝承候補者」よ。四師僧と呼ばれる上位の僧が1人ずつ選ぶから、その数は最大で4人しかいないの」
「生徒会みたいなもんか。キリオって凄いんだな」
「生徒会というよりは、日本代表の選手と思った方がいいわね」
「そんな凄い奴等が使い手として選ばれる獣の槍を、オレが持ってるのか……」
「いずれ現れる白面の者を打ち倒すために、光覇明宗は伝承者を育てているの」
「白面？　そういえばあいつら、麻子の事を『白面の剣』とか言ってたな」
「白面の者――それは８００年前、２００年に渡って人や妖と戦争を繰り広げた獣の名よ。『白面の剣』は白面の者に寝返った者を指す言葉なの」
「じゃあ、麻子が……その……『白面の剣』？」
「いいえ、勘違いされた原因は麻子の剣ね。伝承によると『白面の剣』は『人間を殺すための剣』を武器として戦っていたの。だから、その剣も『白面の剣』と呼ばれ、その剣を持つ者も『白面の剣』とみなされるわ」
「ややこしいなぁ……」
　かつて『白面の剣』と呼ばれる裏切り者がいて、『白面の剣』と呼ばれる剣があって、今も『白面の者』に加担する者は『白面の剣』と呼ばれる。剣の方は『白面の剣』で、裏切り者の方を『白面の使い』と呼んだ方が分かりやすいんじゃないか？　どうして裏切り者を、わざわざ『白面の剣』なんて紛らわしい言い方をするんだ？
「もしかして『白面の剣』って、オレ達を助けてくれた人なのか……？」
「助けてくれた？　その人は、どんな人だったのかしら？」
「普通の僧侶に見えたけど……『魂を食われた人間の末路』とか何とか言って、西洋甲冑になっちまった。オレ達を逃がすために残ったんだ……」

「剣に魂を食わせたのでしょうね。剣に魂を食わせた人間は化物となって、人間に対する憎しみに支配されるわ。完全に化物となったのならば、元に戻す方法は存在しない」
「……あれ？　ちょっと待ってくれ。そんな危険な剣を、姉ちゃんは使ってるのか？」
「うしお君の槍も似たようなものよ。獣の槍に魂を食われれば化物となって、化物に対する憎しみに支配されるわ。剣と同じように完全に化物となったのならば、元に戻す方法は存在しない」
「斗和子さんは……いや、姉ちゃんも魂を食われるって知ってるのか？」
「うっ、うん。人間を殺すための剣なんて言われてるけど、宿ってる神気のおかげで化物にも有効だから……べっ、べんりでしょ？」
　いや、便利って……姉ちゃんは魂を食われても良いのだろうか？
と思ったけれど、獣の槍を使っているオレも姉ちゃんの事は言えない。魂を食われると分かっても、オレは獣の槍を使い続けるだろう。
「姉ちゃんに戦って欲しくない」なんてセリフは、姉ちゃんを守れるほど強くなってから言うべきだ。
「ところで、うしお君。私は妖怪退治に有効な法具を開発しているの。そのために少し、獣の槍で実験させてもらえないかしら？」
　槍を手放すとなると、シャガクシャの様子が心配だ。そう思ってシャガクシャを見ると、シャガクシャのために特別に用意されたこんがり肉を頬張っていた……あの様子だと大丈夫か。それに獣の槍を預けている間は、姉ちゃんが守ってくれるという。そこまでされたのならば、お邪魔している身分で断る理由はなかった。

　準備が整ったらしく、オレは東館へ移動する。そこには大きな井戸があって、よく分からない液体が煮えたぎっていた。オレはお母様に獣の槍を渡す。槍を手にしたお母様は嬉しそうだ。るんっるんっとしながら獣の槍に、なにやら赤い布を巻いていた。そして吊り下げ機にセットすると、井戸へ獣の槍を落とす――そして1分ほど経って上げると、獣の槍は跡形もなくなっていた。

「え？」
よく見ると、吊り下げ機の先端が溶けている。まさか獣の槍は溶けてしまったのか？　そんな訳はないだろうと思って、オレはお母様を見る。すると慌てる事なく、ジィーと炉を見つめていた。この様子なら大丈夫だろう。まだ慌てるような時間じゃない。そう思っていると、横から姉ちゃんの呟きが聞こえた。
「おっ、お母様って、ちょっとマッドだから……」
「姉ちゃん、マッドって？」
「きっ、気が狂ってるっていうか……けっ、研究のためなら見境がないっていうか……」
「姉ちゃん、そういう事は先に言おうよ!?」
「麻子ったら……きっと大丈夫よ、うしお君」
「なんで『きっと』なんて付けた!?」
「落ち着いてちょうだい。獣の槍は使い手が呼べば応えてくれるわ。炉の中で溶けてしまった獣の槍に、呼びかけてみましょう」
聞き間違いじゃない。今、『溶けてしまった』とお母様は言った。溶けると知りつつ放り込んだのか？　だけどオレが呼べば応えてくれるという。獣の槍滅失の危機に、オレは動揺していた。後ろでシャガクシャが「ぎゃはは」と大笑いしている……お前は黙ってろ！
ちょっとお母様に疑いの目を向けつつ、オレは獣の槍を呼んでみた。
「獣の槍よ、来い！」
シ～ン

――来なかった

「ははははは！　アホ面さらして、『獣の槍よ、来い！』だってよ！　ひー！　ひー！」
「シャガクシャ……てめー、後で憶えてろよ……！」
「だっ、大丈夫だよ！　きっ、きっと獣の槍も応えてくれるよ！」
「あらあら」
のんきなお母様だ……とにかくオレは獣の槍を呼び続ける。姉

ちゃんの声援に後押しされて、恥ずかしさに耐えて呼び続けた。だけど、なにも変化が起きない。これは不味いんじゃないか？　だけど諦めたら、そこで獣の槍は終了だ。だから諦めずに、オレは呼び続けた。

獣の槍がなかったら、オレには人並みの力しかない。姉ちゃんを守るなんて事はできないだろう。少なくとも姉ちゃんよりも強くならなければならない。それでも強さは足りない。みんなを守れるように、誰も死なないように、オレは強くなりたいんだ。人を捨ててでもオレ達を助けてくれた、あの人のように！

ドオオン

井戸が内側から破壊される。そうして姿を見せたのは獣の槍だった。お母様の言う通り、オレの呼びかけに応えてくれた。本当に無事だったのか……ちょっとお母様の事を疑ってしまった。そこで違和感を覚える。獣の槍はオレの手に戻ってくるのか？　この方向は、まるでお母様を狙っているかのような……！

るんっ

お母様へ向かって飛んでいた槍を、姉ちゃんの剣が弾く。獣の槍は勢いを失って、地面にガランと転がった。危ない所だった。獣の槍には意思のような物がある。槍を使うと頭に響く声があった。初めて使った時も、二千年も昔の中国で作られた事や、人の魂を力に変えて妖怪を討つ事を教えてくれた。だから井戸に放り込んだお母様を、槍の意思は敵と見なしたのだろう。その気持ちは分かる。

「麻子、よくやったわね」

「えっ、えへへ……」

「……まさか赤い布で封じた上に、あの井戸に沈めても復活するなんて」

そんなお母様の呟きを聞いて、オレは思った。この人に獣の槍を預けるのは止めよう。槍を壊すような実験を、平気でやるに違いない。いい母親なのだろうけれど、実験になると見境がないらしい。本当に獣の槍を滅失していたら、どうするつもりだったんだ？　その後も

「電気を流してみたい」とのたまうお母様を、オレは振り切った。その電気というのは高電流の事に違いない。獣の槍が蒸発してしまう。

　その日の昼、姉ちゃんに誘われた。話したい事があるらしいので、姉ちゃんの部屋へ向かう。ベッドしかない、殺風景な部屋だ。不思議に思って聞いてみると、学校へ行った事がないらしい。中学校は卒業していると思っていたけれど違ったようだ。それは不味いんじゃないか？　もしかして姉ちゃんの言動が幼い理由って……？

「うっ、うん。そうじゃなくて、あっ、あのね。私はね」

「姉ちゃん、落ち着いて」

「うっ、うん。私は正確に言うと、人間じゃないの」

「姉ちゃんは人間に見えるけど」

「マッ、マテリアっていうのに、ホムンクルスを付け足した生物なの」

「それって、人間と何か違うのか……？」

「えっ、えっとね。私は有名な法力僧だった、うしおのお父様の……」

「オレのボケオヤジの？」

「……せっ、せーえきから作られたの！」

「ひらがなにしても、そんなこと言っちゃダメだからな!?」

「マッ、マテリアを作るのに上手く行かなくて、成功していたホムンクルスを混ぜてみたんだって」

「よく分からないけど、それって斗和子さんがやったのか……？」

「ちっ、ちがうよ。引狭（いなさ）って人。もう死んじゃったけど……」

「そうなのか……」

　顔に火傷の痕がある僧侶の言った「人形」というのは、この事なのだろう。

「だっ、だから、あのっ。ごめんなさい……本当は、うしおのお父様の子供じゃないの」

「え？　いや、オヤジの……遺伝子から生まれたんなら、そんなに変わらないんじゃないか？」

「そっ、そうかな……？」

「オレは、そうだと思ってる。オレの姉ちゃんだって思ってる」

「うっ、うしお……」
　姉ちゃんがオレに飛びついた。いつものように斬られるかと思ったオレだったけれど、剣先は飛んでこない。姉ちゃんは剣を手放し、オレの体に抱きついていた。剣は床に落ちている。プルプルと震える姉ちゃんは――カタカタと歯を震わせていた。ああ、そうか。やっぱり姉ちゃんは恐かったんだ。今も人を恐がっている。
「あっ、あのね。そっ、総本山でうしおと繋いだ手を引き離されて、法力僧たちに体を潰されそうになった時、わたしは殺されてもいいかなって思ってたの」
「たしかに姉ちゃんは羽生さんを殺した。だけどオレは姉ちゃんに、死刑になって欲しくなかったんだ」
「わっ、わたしは生きてもいいのかな？」
「オレは姉ちゃんに……麻子に、生きて欲しい」
「うっ、うん……」
「オレが姉ちゃんを守る剣になるよ。姉ちゃんが誰も傷つけなくてもいいように」
　オレは姉ちゃんを抱きしめる。とても歳上とは信じられない、小さくて臆病な姉ちゃんだ。それが、とても愛おしかった。マテリアだとか、ホムンクルスだとか、そんな事は如何でもいい。オレの目の前にいる姉ちゃんが全てだ。オレが選んだ事だから、最後まで姉ちゃんと一緒に行こう。

　その日の夜、オレと姉ちゃんとお母様は夕食の席に着く。オレと姉ちゃんは、このまま洋館で暮らすのだろうか。少なくともお母様は、光覇明宗へ報告する気はないらしい。この洋館で隠れ住んでいれば見つからないだろう。だけどお母様が、姉ちゃんを一人で修行の旅に出すような性格だった事を忘れていた。
「北海道の旭川にあるカムイコタンへ行くといいわ。そこに貴方の母親について教えてくれる者がいる」
「母ちゃんの……」
　オレの母ちゃんは海で働いていると、お母様は言っていた。だけど

北海道の旭川と言えば、周りに海なんてないだろう。どういう事なんだ？　お母様の言っている事は本当なのか。これまでのお母様を考えるに、ウソではないだろうとオレは思う。オレは母ちゃんの事を知りたい。だけど、おそらくオレと姉ちゃんは、光覇明宗に行方を探されている……それでも行けと、お母様は言っていた。

「後悔したくないのならば隠れ潜むよりも、思い切って前へ進むといいわ」

　そうしてオレと姉ちゃんは旅立つ事になった。あとシャガクシャも。翌日の朝、オレと姉ちゃんは洋館を出発する。短かったけれど、心安らぐ休息だった。これから先は困難な道が続くだろう。だけど恐れず、進まなければならない。行ける所まで行ってみよう。いつか終わりの日が来るとしても、姉ちゃんと繋いだ手は放さない。

ここから日本縦断の長い旅が始まる！

目的地は北海道旭川のカムイコタンだ。姉ちゃんのお母様は「そこに貴方の母親について教えてくれる者がいる」と言った。飛行機に乗れば、今日中に目的地へ着けるだろう。だけど、姉ちゃんと一緒に搭乗ロビーで飛行機を待っていると、警察官に声をかけられた。

「蒼月潮と麻子だな。羽生礼子失踪の重要参考人として任意同行を求める」

無用心だった。状況を甘く見ていた。オレと姉ちゃんは、すぐに飛行場から逃げ出す。獣の槍は荷物として預けたままだ。だけど、呼べば飛んでくる事は分かっている。そうして槍はオレの手に戻ってきた。ただし、飛行場の窓ガラスを打ち破って……あちゃー。姉ちゃんの剣も同じだ。顔を隠す必要を感じて、姉ちゃんと共にフード付きのコートを買う。

「まずは東京から脱出しないと……」

「だっ、大丈夫だよ？　おっ、お金はあるから」

姉ちゃんが持っている銀行のカードが命綱だ。バスに乗ったものの、警察に検問を張られていたので、窓を開けて飛び降りる。パトカーが追ってきたので槍の力を借り、屋根に飛び乗って逃げ切った。だけど安心したオレ達の前に、僧衣を着た男が立ち塞がる。警察を振り切ったと思ったら、次は光覇明宗の追っ手か？

「オレは凶羅、槍をくれ。そしてついでに、そっちの妖怪の魂も」

るんっ

次の瞬間、空気が弾けた。剣を抜いた姉ちゃんと、巨躯の僧侶が交わる。そして僧侶の持っていた錫杖が切断された。姉ちゃんが剣を振り下ろし、それを僧侶は避ける……オレは反応すらできなかった。こんな様じゃいけない。オレも獣の槍の力を行使して、戦闘状態に入る。

「法杖がっ！　それに……はやい!!」

「あっ、貴方は殺してもいい人間？」

「姉ちゃん、ダメだ！」

このままだと姉ちゃんが、また誤って人を殺してしまう。オレは姉ちゃんの代わりに、僧侶の前に立った。すると僧侶は短い棒状の独鈷（どっこ）を、オレと姉ちゃんの周りに突き刺す。なにをするのかと思ったら「かっ！」という僧侶の気合いと共に、体を締め付けられた。これは光覇明宗の総本山で姉ちゃんが受けた……！

「オレの法力をくらえい！」

るんっ

オレの不安は呪縛と共に、姉ちゃんの剣で斬り払われた。あっさりと姉ちゃんは、法力による拘束を排除する。そんな姉ちゃんが、動揺しているオレよりも早く動けるのは当然だ。姉ちゃんはオレの横を通りすぎて、僧侶に向けて剣を振った。その刃の先が掠り、僧侶の右腕に浅い傷が付く。姉ちゃんが人を殺さなくて一安心したオレだったけれど……

ボッ!!

「ぐおおっ!!」

僧侶の右腕が爆発した。肉が抉れ、大きな穴が空いている。その傷口を見て、ゾクリと寒気が走った。羽生さんの時は胴体に剣が入って、全身が爆散している。ちょっと掠っただけでも、あんな風になるのか……あれ？　オレって、よく今まで無事だったな。

「このオレが手も足も出んとはな……おまえ、何者だ……？」

「あっ、蒼月麻子だよ？」

「オレを殺せ……バケモノめ……殺さないと後悔するぞ」

「うっ、うん……」

「待った、姉ちゃん！　殺しちゃダメだ！」

「そっ、そうなの……？　うしおが、そう言うのなら……」

「オレは……あきらめんぞ……」

「じゃあ、その時はオレだけを狙えよ。間違っても姉ちゃんに、人を殺めてほしくないんだ。ついでに、おまえにも死んでほしくない」

とりあえず救急車を呼んでやろう。そう思っていると、いいタイミ

ングでパトカーがやってきた。オレは重傷の僧侶を警察に任せて、姉ちゃんと共に逃げ出す。その後、どこかのホテルに泊まろうと思ったけれど……明らかに未成年なオレ達は怪しまれた。警察の巡回に引っかかる恐れがあるため、野宿するしかない。

この野宿という問題は、これらも続くだろう。飛行機がダメになったから、電車に乗って北海道へ行こうと思っていた。だけど電車も夜になれば止まる。北海道に着くまで野宿しなければならない。オレ一人ならば野宿でも良かったけれど、姉ちゃんも一緒だ。なにか野宿しなくてもいい方法はないのか……？

「あっ、あのね。フェリーなんてどうかな？」

「そうか、フェリーだ！」

電話ボックスに置いてある電話帳で調べ、出航時間を尋ねる。出発は明日の夕方か、もしくは今日の真夜中になるそうだ。オレと姉ちゃんはシャガクシャに乗って、なるべく人気のない森の上を通り、東京へ戻った。まさか東京から脱出したオレ達が、また東京に戻っているとは思うまい。

なんとか出発時間までに乗り場について、フェリーに乗り込んだ。真夜中にフェリーは出航する。フェリーの行き先は当然、北海道だ。次の夜には北海道へ着くだろう。眠くて仕方なかったので、オレと姉ちゃんは一緒に寝る。翌朝になるとレストランで朝食を食べた。ラウンジにあるテレビで朝のニュース番組を見ていると、飛行機墜落のニュースが流れる。

「わっ、わたしとうしおが、乗る予定だった飛行機だね？」

「ＲＢＡ札幌行き７６８便……ほんとだ」

捨てずに持っていたチケットを見比べると、間違いなかった。昨日、オレ達が乗るはずだった飛行機は墜落している……偶然なのか？

まさかオレと姉ちゃんが乗っていると思って、飛行機を墜落させたとか……誰が？　警察や光覇明宗が、そんな事はしないだろう。気になったオレはニュースに耳を傾けた。

「戦闘機のパイロットだった厚沢二慰は、一ヶ月前に墜落した飛行機の機長だった檜山さんと親しく、今回も檜山さんの娘である勇さんと

同伴していたそうです」
「厚沢二慰が無理心中を計った恐れも……」
　1ヶ月前にも飛行機墜落事故は起きていたらしい。その事件では自衛隊の戦闘機が飛行機に異常接近して、墜落したと推測されていた。その戦闘機に乗っていたパイロットが、今回の飛行機にも乗っていた。パイロットは操縦席を乗っ取って、今回の飛行機を墜落させたとされている。その証拠としてパイロットは「怪物に襲撃されている」と言って錯乱していたという。結果、１００人近い乗客が道連れとなった。
「じっ、じつは空飛ぶ妖怪に襲われて、墜落したとか？」
「そんな妖怪いるのか？　おーい、シャガクシャーって……」
「ほー、自分以外の力で動くのって初めてだぜー。景色がたいらに滑っていくぞー」
「……あれが大妖怪ねー」
「あっ、あのね。衾（ふすま）じゃないかな？」
「姉ちゃん、知ってるのか？」
「ひっ、飛行機を抱え込むほど大きな妖怪で、いつもは空を飛んでるんだって」
「へー。じゃあ、もしもその衾（ふすま）って妖怪の仕業だったら、これからも被害は出るのか」
「うっ、うん。でも退治するのは難しいと思うよ？　同じルートの飛行機に乗っても、必ず襲われるとは限らないから……」
　墜落した飛行機にオレ達が乗っていれば、墜落を防げたかも知れない。そう考えると残念に思った。朝のニュース番組は、すでに次の話題へ移っている。オレが住んでいた町の名前が表示されていた。商業地区で広範囲に渡って、無差別殺人事件が起こったらしい。学校の奴等は大丈夫か？
『被害者は＿＿区の＿＿＿＿さん、＿＿区の＿＿＿＿さん、＿＿区の井上真由子さん』
　驚いたオレは、思わず声を上げる。井上真由子、オレの知り合いだ。死んだ？　ウソだろ？　いったい何があったんだ？　ニュースによ

ると、工事現場の作業員からデパートへ買い物に来ていた中学生まで、多くの人が殺されたらしい。遺体はバラバラで、一部が見つかっていなかった。犯人も捕まっていない。
「うそだろ……」
　不可解な事件だった。もしかすると、これも化物の仕業なのかも知れない。知り合いの死に、オレの気分は落ち込んだ。それと共に、姉ちゃんを助けるために光覇明宗と敵対した事や、気絶していたオヤジに別れを告げた事を思いだす……オレの帰る場所が失われて行くように感じた。
「よォ、知り合いの名前でもあったのか？」
　見知らぬ人から声がかかる。それは革製のジャンパーを羽織った若い兄ちゃんだった。話しかけてきた兄ちゃんは、オレの隣の席に座る。そしてオレの方をジィーと見た。オレは何とも思わなかったけど、姉ちゃんは怖かったらしい。オレを盾にするような形で、姉ちゃんは隠れた。
「オレの知り合いが、事件に巻き込まれて死んじゃってさ……まいったよ」
「そいつァ、災難だったな。同級生かなにかだったのか？」
「うん、あたり。つい最近まで学校で顔会わせてたのによう……」
「うっ、うしお？」
　言葉にすると、涙が止まらなくなった。死んだなんて信じられない。そんなオレを見た姉ちゃんは、オロオロと慌てていた。隣の兄ちゃんはポケットティッシュを差し出してくれる。その兄ちゃんに付き添われて、オレはラウンジから出た。その後を姉ちゃんが付いてくる。
「あんがとよ、兄ちゃん」
「秋葉流だ。おまえは？」
「蒼月うしお。こっちは姉ちゃんの麻子」
「ずいぶんと小さい姉ちゃんだな？」
　それはオレも思っていた。とても歳上には見えない。姉ちゃんがマテリアとかホムンクルスとか、よく分からない物を元に作られた影

響かも知れない。その後、兄ちゃんとオレは言葉を交わす。フェリーは何事もなく進んで、時間が過ぎて行った。だけど夜になって急に天気が変わり始める。空を黒い雲が覆って、ビュウビュウと強い風が吹き始めた。

「うっ、うしお。来るよ、大きいのが」

「どうしたんだ、姉ちゃん？」

「ニブイな、おめえはよ。うしお……」

姉ちゃんもシャガクシャも様子が変だ。嵐を不安に思っているのかも知れない。そう思った時、ドォンと船が大きく揺れた。何かに打つかったような衝撃だ。窓の外を見ると暗闇の中で、巨大な何かが動いている。窓に近付いて見ると、巨大な海蛇のようなモノが大きく口を開けて、フェリーを飲み込もうとしていた。船体は引き摺られているらしく、大きな口へ近付いて行く。

「うわあーっ！　バケモノだーー！」

「飲み込まれるぞーー！」

「バケモノにしたって大きすぎだろーー!?」

「ちっ、ちょっと結界斬ってくるね？」

「止めときな、ガキ。どうせ、もう間に合わにゃーよ」

そうしてパクリと、オレ達の乗る船は飲み込まれた。

バケモノに飲み込まれたフェリーは、肉で出来た大きな空洞の中を進んでいる。フェリーの明かりに照らされた肉の壁が、生々しくうごめいていた。進んでいると言っても、バケモノの腹の奥へ向かっている訳じゃない。船員たちは船首を入口へ向け、エンジンを動かしていた。だけど、いくら進んでも入ってきたはずの入口が見当たらない。大きな空洞が何所までも続いていた。

「あっ、あやかしだね。外にある領域を定める結界とは別に、内部にいる者の力を削ぐ結界があるの。早く仕留めないと危ないかも」

「結界の中だから、いくら進んでも出口が見つからないのか。石食いの時みたいに、結界を切れないのか？」

「結界を構成するものが、あやかし本体だから……」
　オレと姉ちゃんは肉壁を、槍で刺したり剣で斬ったりしてみる。だけど、油でヌルヌルしている肉壁は滑った。刺さったと思ったら、グニャリと肉壁が変形したに過ぎない。おまけに肉壁から妖が生え、反撃を始めた。姉ちゃんは自力で飛び、オレはシャガクシャに乗って飛び、妖の迎撃に追われる。これじゃ船を守るだけで精一杯だ！
「坎（かんっ）！」▪
　気合いの声と共に、フェリーが光に覆われる。あれは法力じゃないか？　甲板に立つ人が見える。それは錫杖を持った流兄ちゃんだった。光の壁は結界らしく、妖の侵入を防いでいる。とりあえずフェリーは安全らしい。オレは迎撃を姉ちゃんとシャガクシャに任せて、流兄ちゃんの下に近付いた。
「よォ、蒼月。元気にやってるみたいだな」
「流兄ちゃん！　これって兄ちゃんが？」
「まぁな。だが、これだけ大規模な結界となると一人じゃキツいぜ」
「姉ちゃんが言ってたんだけど……このあやかしの内部にいると力を削がれるんだ」
「へぇ、そうなると長くは結界を張っていられない訳か。おまえは如何したい、蒼月？」
「どうにかして、あやかしの結界を破って、早く脱出しなくちゃ……」
「うっ、うしお！　たっ、たいへん！　シュムナがいる！」
　姉ちゃんの慌てる声に見上げる。すると、服の溶けた姉ちゃんが上空を逃げ回っていた。いつも着ている黒い着物が、なぜか溶けている。腕の袖（そで）や脚の裾（すそ）の部分が溶けて、肌が露わになっていた。そんな姉ちゃんを追い回しているのは霧だ。白い霧が意思を持ち、空飛ぶ姉ちゃんを追い回していた。よく見ると霧に、人の顔が浮かび上がっている……あの白い霧は妖怪だ！
『ひひひ。だめだよーう。おまえは～、食われるよ～』
「シュムナ……？」
「あやかしにシュムナ、それに長飛丸か。どいつもこいつも８００年以上生きている大妖怪だろ？　まるで怪獣決戦だな」

「兄ちゃん、知ってるのか？」
「シュムナは霧の妖怪で、その霧は万物を溶かす。切っても切れず、突いても突けず、苦手なものは火だって話だぜ？」
シャガクシャ口から火を吹いて、霧の妖怪を追い払っていた。だけど火が治まれば元通りだ。ダメージを受けている様子はない。苦手というだけで、滅殺に繋がる弱点ではないらしい。それじゃ無敵じゃないか。霧の妖怪は結界に接触して、ミシミシと音を鳴らした。このままじゃ結界が破られちまう！
「蒼月ィ！　悪いが、もう限界だ！」
あの霧の妖怪に侵入されると大変な事になる。オレは姉ちゃんのように空を飛べないけれど、シャガクシャを呼び戻している時間はない。だからオレは手に持つ獣の槍を、霧の妖怪に向かって投げた。だけど槍は霧を素通りして……そのまま霧に捕まる。こりゃいかん。オレは槍を呼ぶけれど戻ってこなかった。
「バーカ！　なにやってんだよ、うしおー！」
「う、うるせー！　しかたねーだろ！」
再びシャガクシャが火を吹く。おかげで霧の妖怪は槍を手放し、オレの手に戻ってきた。だけど、そんなアホな事をやっている間に結界が消える。オレや兄ちゃんを包み込むように霧が迫ってきた。化物から逃れようと必死で船を動かしている船員を食われれば、このフェリーは制御不能になる。どうする？　どうすればいい!?
『……まさか赤い布で封じた上に、あの井戸に沈めても復活するなんて』
ふと　斗和子さんの言葉が思い浮かんだ。あの時、姉ちゃんのお母様は、赤い布を槍に巻いた上で井戸へ沈めた。その赤い布に似たものが、今も槍の柄に巻き付いている。これは槍を初めて見た時から巻き付いていた布だ。これは槍の力を封じているのかも知れない。もしかすると――これを解けば槍の力が強くなるかも知れない。その希望にオレは、すがった。
ブチィ
槍に巻き付いている赤い布を、手で引き千切る。半分ほど残してみ

ようなんて、甘い事は言ってられない。思い切って、すべて引き千切った。すると槍が震え、唸り始める。それが喜んでいるようにオレは聞こえた。もしくは泣き叫ぶように、あるいは怒りのあまり声を上げるかのように……！

キィィィィィ!!

『ひいいい！　獣の槍ィィィ!!』

獣の槍が発光する。オレの手を離れ、槍が勝手に飛び立った。巻き起こった旋風が、周囲の霧を掻き散らす。そのまま槍は、空洞の奥へ飛んで行った。そして何が起こったのか分からないけれど、遠くからバケモノの悲鳴が聞こえる。するとシャガクシャが雷を放った。少し前まで阻まれていたシャガクシャの雷は、あやかしの肉壁を破壊する。結界が消えたんだ。

獣の槍が戻ってくる。オレの手に戻ってきた。これまでの槍と比べて軽い。今までの槍とは別物だ。だけど槍から流れ込む意思が、オレの魂を侵していく。やっぱり封印らしい赤い布を全部引き千切ったのは、やりすぎだったのかも知れない。とりあえず、片手に残っていた赤い布を巻いてみた……おっ、いいかも。

るんっ

空飛ぶ姉ちゃんが、肉壁を一直線に斬り裂いていく。反対側もシャガクシャが切り開いていった。あやかしの肉壁が開いて、嵐の空が見える。空を黒い雲が覆って、ビュウビュウと強い風が吹いていた。そんな空に向かって姉ちゃんが、白い剣を投げる。すると、パリィィィンと空が割れて崩壊した。偽りの空が剥がれ落ち、星空の瞬く晴れた空が姿を現す。あれが姉ちゃんの言っていた『外にある領域を定める結界』だったのだろう。

『ひ～、ひ～、このシュムナ。この程度で滅ぼされるものか～』

「はいはい、おつかれさんっと――坎（かんっ）！」

『んあ……？』

「かっ！」

霧の妖怪は、まだ生きていた。霧が寄り集まり、形を成す。だけど姿を見せた瞬間に、兄ちゃんの結界に閉じ込められた。その結界が気合いの声と共に小さくなる。霧の妖怪は小さく圧し潰されて、手の平サイズになった。それに兄ちゃんは法力を叩き込む。結界の中は光に満ちた……やったか!?

「ちぃ！　これだけじゃダメそうだ。蒼月、もう1回頼むぜ！」

「ええ!?」

オレは慌てて赤い布の封印を解く。つまり、また引き千切った……今度こそ、赤い布は使い物にならなくなる。封印が解けて全開状態の槍を、オレは結界に叩き付けた。光が弾けて、中身が消える。どこにも霧は見当たらない。今度こそ、霧の妖怪に止めを刺せただろう。

『ひー、ひー、こわいよ～う』

……どこからか声が聞こえる。だけど、その声は遠退いて行った。とりあえず危機は去ったようだ。あやかしの巨体が崩壊し、空へ光が飛んで行く。それは人魂だった。あやかしに囚われていた魂たちが解放されて行く。終わったのか……そう思うと疲れが出る。同じく疲れ果てた兄ちゃんと背中を合わせて、オレは座り込んだ。兄ちゃんの背中が、熱くて心地いい――。

「うっ、うしお！　その船から離れて！」

終わったと思っていた。だけど違った。オレと兄ちゃんはフェリーに、ズブリと沈む……なんだ、これ？　下を見ると、目玉があった。目玉の妖怪が床一面に敷き詰まっている。その目が目が目が目が目が、たくさんの目が、オレを見ていた。なんて気持ち悪い。

『人間め～！　くだらぬ事を～！　だが蒼月と槍は逃がさぬ！』

『このまま我らの腹で締め付けながら、船ごと海に沈めてくれるわ！』

――るんっ、と姉ちゃんの剣が鳴いた。

姉ちゃんに斬り出され、シャガクシャに引っ張られた。飛び上がるオレ達を、ゾワゾワと盛り上がる目玉の大群が追ってくる。だけど目玉は、姉ちゃんに切り刻まれて崩れ落ちた。さっきまでオレ達の乗っていたフェリーが、隙間なく目玉に覆われている。水飛沫を上げて、

沈んで行く。あれには、まだ他の乗客が乗っている。助けないと……！

「ぐううううっ!?」

だけど痛みに襲われた。獣の槍は、オレの魂を食らう。これは全開状態の槍を行使した反動だ。意識が遠くなる中、フェリーに手を伸ばす。だけど、フェリーは遠すぎて届かなかった……違う。遠いのはオレの体だ。オレの体が遠くにあるからフェリーに届かない。オレの手は届かなくて、フェリーは乗客を乗せたまま沈んで行く。姉ちゃん、シャガクシャ、兄ちゃん……ああ、聞こえないのか。目の前が暗い……。

「だれかー！」

「助けてくれー！」

「きゃあああ！」

「死にたくないよー！」

「こわいよー！」

「いやだー！」

みんなの悲鳴が聞こえる。オレの救えなかった人達が死んでいく。冷たい夜の海に沈んで行った……寒い。歯がカチカチと震える。『蒼月と槍は逃がさぬ』と目玉は言っていた。あいつらの狙いは、オレと獣の槍だったんだ……オレのせいだ。オレがフェリーに乗ったから……

ごめん。

伝承候補者は婢妖に取り憑かれている

オレが乗っていたせいで、フェリーは沈没した。全開状態の獣の槍を使った反動で、オレは戦闘後に気を失う。目が覚めると、北海道の旅館だった。子供のオレと姉ちゃんだけだったら不審に思われていただろう。だけど流兄ちゃんのおかげで、不審に思われる事はかったようだ。

「……ひどい悪夢を見た」

乗客の悲鳴が、耳に張り付いている。体が冷たくて重い。きっと悪夢じゃなくて、あれは現実だったんだ。助けを求める人々の声が、聞こえていた気がする。気絶したオレの耳に聞こえていたのかも知れない。オレが船に乗ったから、オレを狙った化物が来て、みんなを殺してしまった……この手から、命が零れて行く。

朝食を食べながら、兄ちゃんから昨日の話を聞いた。オレが気絶してからの話だ。あれからシャガクシャと姉ちゃんは、すぐに陸地へ向かって飛んだらしい。目玉の妖怪と共に沈んで行く、乗客の救出は行わなかった。体力が尽きる前に陸地に着けるか分からず、そんな余裕はなかったからだ。

「これから兄ちゃんは何所に行くんだ？」

「お前等といると退屈しなさそうだし、しばらく付いて行くさ」

……退屈？

「そっか……」

「安心しろよ。オレは光覇明宗の使いじゃない」

光覇明宗の使い……じゃない？　そう言えば兄ちゃんは、錫杖や法力を使っていた。　光覇明宗じゃないとなると、他の宗派の人なのか？　いったい兄ちゃんは何者なのだろう……まさか『白面の剣』？　そんな顔をしていると兄ちゃんは「くくく」と笑って正体を明かした。

「――獣の槍の伝承候補者、秋葉流だ。よろしくな」

兄ちゃんは、4人しかいない伝承候補者の1人だった。フェリーで会った時から兄ちゃんは、オレと姉ちゃんの正体に気付いていたのだ

ろうか？　そう聞くと兄ちゃんは、シャガクシャを指差した……ああ、そっか。こんなのが近くにいれば一目で分かるか。その後、オレは移動手段に迷う。兄ちゃんのバイクで行くべきか、それともバスで行くべきか。
「うっ、うしおがバイクに乗って……わっ、わたしは飛べるから大丈夫だよ？」
「でも姉ちゃんは、シャガクシャみたいに姿を隠せないだろ？」
「でっ、でも、この人と一緒に行けば、うしおも旅館に泊まれるから……」
「シャガクシャ、おまえが姉ちゃんを乗せてやってくれないか？」
「あぁ？　おい、うしお。わしを馬か何かと勘違いしてるんじゃねーだろーな？」
「いいじゃねーか、このくらい。ケチケチすんなよ」
「あっ、あのね？　うしおは大丈夫だけど……シャガクシャ様は……斬っちゃうかも」
　オレは触れるようになったけど、シャガクシャはダメらしい。そうだったのか……けっきょく姉ちゃんは、バイクに同乗するオレの体に掴まる事になった。その状態で飛行すれば、体力の消費を抑える事もできるらしい。他人から見れば、バイクに3人乗りしている状態だ。警察に通報されない事を願う。
　そんなオレ達の前からバスが出発して行った。あのバスが妖怪に襲われたりして……そんな訳ないか。だけど、化物に狙われているオレが乗れば、その危険性は高まる。そう考えると、バイクで良かった。その時は兄ちゃんを巻き込む事になるけれど……兄ちゃんも分かってる。それに伝承候補者に選ばれるほどの優秀な法力僧だから心配は少ない。
　兄ちゃんのバイクに乗って、北海道を北上していた。目的地であるカムイコタンのある旭川には、今日の内に着くだろう。シャガクシャは上空を飛んでいた。その間、兄ちゃんは「光覇明宗」と「獣の槍」の話をしてくれる。そもそも光覇明宗の始祖が「獣の槍」を護れと言ったようだ。

「流兄ちゃんは、獣の槍を取り戻さなくていいのか？」
「いーや。オレがその槍を操るより、お前等を見てた方が気持ちいいからな」
「だけどオレ達、光覇明宗の総本山で無茶苦茶やっちゃったんだけど……」
「無茶苦茶やる理由があったんだろ？　今度はお前の話を聞かせてくれよ」
　オレは兄ちゃんに、これまでの事を話す。時間は十分にあった。姉ちゃんが鬼を見つけた事、姉ちゃんが羽生さんを殺した事、姉ちゃんに自首をすすめたこと、オヤジに総本山へ連れて行かれた事、姉ちゃんが処刑されそうになった事、身を捨てて姉ちゃんを助けてくれた僧侶の事、姉ちゃんの実家に行った事、姉ちゃんのお母様に会った事。
「……囁く者達の家か」
「ささやく、ものたちの、いえ？」
「外国にゃ「魔道」っつーもんがある。その研究の過程で見つけられたのが、人工的に妖を造りだす……そんなテクニックさ」
「人工的に妖を？　そういえば姉ちゃん、マテリアとかホムンクルスとか言ってたっけ？」
「う、うん……」
「囁く者達の家には、そんな妖が山ほど、オレ達にグチをたれたがってるって話だぜ？」
「オレが姉ちゃんの家に行った時は、優しそうな「お母様」しか居なかったけどなー」
「お母様ねぇ……ん？　ありゃー、杜綱か？」
　道路に人が立っていた。その人は知り合いらしく、兄ちゃんはバイクを止める。辺りには家も乗り物も見当たらない。どうやって、ここに来たのだろう？　その人は神職が着るような白い服を着ていた。オレ達が止まった事を察して、シャガクシャは……空から降りてこないな。まぁ、いいか。
「流兄ちゃん、知り合い？」
「ああ、獣の槍の伝承候補者の杜綱悟だ。そのはずなんだが……おま

え、杜綱だよな？」
「ああ、たしかに私は獣の槍の伝承候補者の一人――杜綱悟」
「うっ、うしお！　その人から化物の臭いがする！」
そう言って姉ちゃんは、オレの前に進み出た。白く濁った剣を、杜綱という人へ向ける。すると杜綱という人の背後が、黒く歪んだ。そこから滑らかな表皮を持つ、人のように大きいナメクジのような物が姿を現す……いや、あれはヒルか？　オレ達に向かって、その巨大なヒルは飛びかかった。
るんっ
踏み出した姉ちゃんが剣を振る。瞬く間にヒルは斬り裂かれた。だけど断たれた体から、いくつもの頭が生える。姉ちゃんは迫るヒルの頭を斬り落としていた。だけど、それは石食いの時と同じパターンだ。斬っても斬っても生えるヒルの頭部を潰すのが精一杯で、それ以上すすめない。このままでは、いつか食い付かれる。
「姉ちゃん！」
獣の槍の力を行使したオレは、姉ちゃんの加勢へ向かう。オレの前に立ち塞がったヒルへ、槍を突き出した。するとボンッという音と共に、ヒルは消し飛ぶ……こんな威力だったっけ？　槍の封印を解いたからか？　まるで溶かすように獣の槍は、バケモノを消滅させた。
「兄さん！」
「杜綱さん！」
「助けるぞ！」
そこへバイクに乗った集団が現れる。そいつらは折りたたみ式の錫杖を展開すると、オレや流兄ちゃんに襲いかかった。なんだよ、こいつら！　なんでオレ達の邪魔をするんだ？　その間に姉ちゃんは分裂したヒルに取り囲まれ、体に食い付かれる。その光景を見たオレはカッとなった。
ドムッ
オレが動く前に、ヒルは吹き飛んだ。姉ちゃんを囲んでたヒルが吹き飛ばされた。その衝撃で、姉ちゃんは地面に倒れる。やったのはシャガクシャだ。空から降りてきたシャガクシャが、姉ちゃんを助け

てくれた。それを嬉しいとオレは思う。オレもシャガクシャに、負けていられないな！

キィィィィィ!!

獣の槍が発光する。槍に導かれるように、勝手に体が動いた。流兄ちゃんやオレに襲いかかってきた人々を、槍の柄で殴り倒す。そうしてオレは姉ちゃんの下へ走った。ヒルも倒したし、襲いかかってきた人々も倒した。姉ちゃんと流兄ちゃんも無事だ。あとは杜綱という人だけだった。

「おまえ、なんてコトすんだよ！　ぶっとばしてやりてーぜ」

「ふん、そうか。やってみろ……」

「わっ、わたしもやるよ？」

「いいや、姉ちゃんは見ててくれ」

流兄ちゃんによると、この人は獣の槍の伝承候補者だ。姉ちゃんではなく、オレが目当てなのだろう。だったらオレは1人で、この人と戦う必要がある。姉ちゃんを巻き込まないために、オレは杜綱という人に近寄る。すると杜綱という人は数珠を投げて、獣の槍に巻き付けた。

「くくく、柳月派不動縛呪。強力なこの縛呪を断ち切るのも、貴様ならば雑作あるまい――だが、その隙が命取りよ！　蒼月イ、死ねぇぇ!!」

「やだね！」

獣の槍が発光し、巻き付いた数珠を弾く。その場から高く跳んだオレは、杜綱という人の頭部を、カンッと槍の柄で強打した。杜綱という人は体を揺らし、バランスを取ろうとする。ガードレールに手を置き、ふらつく体を支えた。その杜綱という人は頭を抑えて苦しそうだ……強く叩きすぎたか？

「がああああ！」

「お、おい、大丈夫か？」

「兄さん！　おまえ兄さんに何をしたの！」

「無事ですか？　杜綱さん！」

「おのれ蒼月！　杜綱さん、気を確かに！」
杜綱という人は奇声をあげた。さすがに心配になって声をかける。すると、さっき槍で倒した人々も、杜綱という人に声をかけた。なんだかオレが悪いみたいだ……いいや、そうか。オレが悪いんだ。光覇明宗の総本山で裏切った僧侶は数多くの人を死に追いやり、シャガクシャも人を殺し、オレも獣の槍を強奪した。それでもオレは、姉ちゃんを死なせない道を選んだ。共犯者である事をオレは忘れてはならない。
「純（じゅん）……兄は……私は、もうだめだよ」
「にい……さん……？」
「流……みんな……妹を……純を、頼む！」
そう言って杜綱という人は、ガードレールを乗り越えた。その先は高いガケだ。逃げるつもりなら、まだいい。だけど死ぬつもりなのか!?　一番近くにいたオレは槍を投げる。獣の槍は杜綱という人を追って、その体を岩壁に縫い止めた。見ると槍は服に刺さっている。早く上げないと、服が千切れちまう！
「あいつを引き上げる！　手伝ってくれ！」
「おい、正気か蒼月？　そいつはお前を殺そうとしたんだぜ？」
「関係ないね！　目の前で死にそうな奴を放って置けるかよ！　もう二度と誰も死なせねーってオレは誓ったんだ！」
殺したって何にも生らない。敵でも味方でも変わらない。悪い事をしたからって、そいつを殺すのは間違ってるんだ。そんなんじゃ何にも生らない。なんの解決にもならない。なにも分からないまま終わって、後には何も残らない。オレの目の前では誰も死なせたくなかった。誰にも死んでほしくなかった。

みんなで杜綱という人をガケから引き上げる。姉ちゃんは他人に触れないし、シャガクシャを説得するのは時間の無駄だ。気絶している杜綱という人を、バイクに乗っていた人々が心配そうに見守っている。流兄ちゃんによると杜綱以外の人は、伝承候補者の選出に漏れた人らしい。

「あっ、あのね？　あの人、婢妖（ひよう）に憑かれてるんじゃないかな？」
「姉ちゃん、婢妖って？」
「フェリーを沈めた目玉の事さ――「白面の者」が手足のごとく使う下等な妖怪だ。過去数度にわたって、光覇明宗の「獣の槍」探索を妨害している。合体し……物に取り憑くそうだぜ」
　婢妖（ひよう）について流兄ちゃんが教えてくれた。フェリーを沈めた、あいつらか……オレは怒りを覚える。白面の者……その名前を初めて聞いたのは、姉ちゃんのお母様からだった。２００年に渡って、人や妖と戦争を繰り広げた獣と聞いている。とは言っても、ずっと２００年間戦っていた訳じゃなくて、白面の者が潜んでいた時期もあったんじゃないか？　その白面の者が獣の槍を狙っている？
「その白面の者ってやつは、なんで獣の槍を狙うんだ？」
「……さあ、なんでだろうな？　麻子ちゃんは知ってるのか？」
「えっ？　おっ、おやっ、じゃなくて……『白面さんを倒すために獣の槍が作られたから』って聞いてるよ？」
　急に流兄ちゃんは姉ちゃんへ話を振った。すると変な風に姉ちゃんはどもる。「おっ」って何だろう？　いま姉ちゃんは白面の者の事を、別の名前で呼びそうになっていた気がする。そういえば姉ちゃんの「お母様」は、白面の者や獣の槍、母ちゃんの仕事についても知っているようだった。姉ちゃんも白面の者について、いろいろと知っているのかもしれない。
「姉ちゃんは、杜綱の体から婢妖を追い出す方法を知らないか？」
「ひっ、婢妖は物と一つになるから、そのまま倒すと憑依対象ごと壊しちゃうよ？」
「婢妖を倒すと、杜綱の体が傷つく？」
「うっ、うん。でも、頭にいる婢妖さえ退治すれば、自力で追い出せると思う」
「だけど、もしも失敗したら杜綱の頭が……どうすればいいんだ？」
「こっ、この子だったら、こんな風に……」

――散って
白い剣が砕け散った

無数の白い破片となって、姉ちゃんの周囲に漂う。白く濁った剣の破片は、太陽の光を浴びても光り輝く事はない。不気味なほどの白さで、宙に浮いていた……びっくりした。姉ちゃんの剣が壊れたのかと思った。姉ちゃんの剣って便利だなー。これって獣の槍でも出来るのか？

「こっ、こんな風に小さくすれば、婢妖だけ退治できるよ？」

「よしっ、じゃあオレも！」

――獣の槍よ、散れ

ああ、うん……ダメだった。獣の槍は答えてくれない。そもそも姉ちゃんの剣のように、バラバラになる事が無理なんじゃないか？シャガクシャが「お母様に槍を溶かされた時」のように何か言うかと思ったけれど、暇そうにアクビをしているだけだった。こんな時に空気を読まず、爆笑するような奴じゃなかったか。杜綱を心配する人達の気持ちを、あいつも分かってくれているのだろう……そう考えると安心した。

「じゃっ、じゃあ体の中に入って、婢妖を倒すしかないかも……」

「姉ちゃん、そんな事もできるのか？」

「でっ、できるけど……わっ、わたしの剣じゃ危ないかも」

「ああ、そっか……じゃあオレは？　やろうと思えばオレも、他人の中に入れるのか？」

「うっ、うん……」

「よしっ。じゃあ姉ちゃん、その方法をオレに教えてくれ！」

「だっ、だめだよ」

「どうして？」

「うっ、うしおの魂が、獣の槍に食われちゃうから……」

姉ちゃんのお母様が言っていた。姉ちゃんの剣も獣の槍も、使い手の魂を食らう。そうして魂を食われた人間は化物となる。姉ちゃんの剣ならば人間に対する憎しみに……獣の槍ならば化物に対する憎しみに……支配される。そうして完全に化物になったのならば元に戻す方法は存在しない。

「それでもオレは、杜綱を助けに行ってくるよ」

「よく考えろよ、蒼月。あいつはおまえが、そこまでやらなくちゃいけない人間か？」

流兄ちゃんがオレに問う。獣の槍の伝承候補者、杜綱悟。その人の事をオレは何も知らない。オレがやらなくても、他の誰かがやるかも知れない。獣の槍を奪ったオレなんかじゃなくて、他の誰かに助けてほしいと思っているのかも知れない。オレよりも上手くできる人がいるかも知れない。それでも――、

「杜綱を見てると、ここんトコがぎゅうって、胸が苦しいんだ……！」

『だれかー！』

『助けてくれー！』

『きゃあああ！』

『死にたくないよー！』

『こわいよー！』

『いやだー！』

――今すぐ手を伸ばさなければ、手遅れになってしまう

「だがよ、おまえがバケモノになっちまったら、おまえの姉ちゃんはどうするんだ？　誰がおまえの姉ちゃんを守ってやれるんだよ！」

「姉ちゃん……」

「うっ、うしお……」

――オレが姉ちゃんを守る剣になるよ

――姉ちゃんが誰も傷つけなくてもいいように

姉ちゃんの実家で、オレは誓った。ここでオレがバケモノになれば、その約束は守れない。これからも姉ちゃんは、光覇明宗に追われ

続けるだろう。さらに言えば光覇明宗の総本山から逃げた日、「姉ちゃんと一緒に行く事」をオレは選んだ。そのオレが姉ちゃんを裏切るのか？

「姉ちゃん、帰ってくるよ。絶対、帰ってくるから。約束する」

「うっ、うしおが頑張ったって、どうにもならないよ……あっ、赤い布の封印を解いた槍は、うしおの魂を持って行っちゃうから」

「流兄ちゃん、姉ちゃんのこと頼んでもいいかな？」

「やーだね。おまえの姉ちゃんなんだろ？　自分で何とかしろよ」

「うっ、うしお!!」

姉ちゃんの怒った声が耳を叩く。　大ムカデの体液で裸になっても、羽生さんを殺したせいで悪魔なんて言われても、光覇明宗に殺されそうになっても怒らなかった姉ちゃんが――オレに対して怒っていた。その怒りを示すかのように、無数の白い欠片がグルグルと回る。姉ちゃんの周りで、轟々と渦を巻いていた……すでに流兄ちゃんは、背を向けて逃げ出している。

「あっ、あの人のために死ぬのなら――その前にうしおを、私が殺すから！」

姉ちゃんの纏う渦から白い欠片が、ヒュッと風を切って飛び出す。姉ちゃんの持つ『人間を殺すための剣』の――その欠片だ。それは容赦なく、オレの頭部を狙っていた。たぶん当たったら、頭がパーンってなる。オレは慌てて身を捻りつつ、獣の槍の力を行使した。ザワザワと伸びた髪に白い欠片が当たり、黒い髪を消し飛ばす。

「う……わぁ……？」

視界が揺れた。頭の中でキチキチと変な音がする。白い欠片が当たった瞬間に、なにか持って行かれた？　そういえば姉ちゃんが羽生さんの鬼を斬ったとき、残っていた「人間」まで斬ってしまったとシャガクシャは言っていた。姉ちゃんの剣は「人間」を斬る。もしかして姉ちゃんの剣に斬られると、その分オレは「人間」を斬られてバケモノに近付くのか……その事に気付いたオレは、サァーと血の気が引い

た。
ダダダダダダッ
姉ちゃんが白い欠片を連射する。あの「人間」を斬る欠片に、一発でも当たる訳にはいかない。当たるたびにオレの寿命は縮むし、下手な所に当たれば肉体が爆散する。オレは足下を切り上げ、道路の一部を持ち上げた。それを盾にしたものの、あっさりと白い欠片に貫通される。ドドドドッという鈍い音が連続して聞こえた。こ、こええ……その時、空が光る。
ズシンッ
オレと姉ちゃんの戦場に、雷が落ちた。大気が震え、大地が揺れる。それに驚いたのか、姉ちゃんの攻撃は止んだ。流兄ちゃんは他の人達と共に、気絶している杜綱の周りに光る膜を張っている。あれは、きっと結界だ。この場に雷を落としたのはシャガクシャだった。オレを助けてくれたのか？
「おい、ガキ。勝手に殺すなよ。そいつはわしが食うんだぜ」
「ごっ、ごめんなさい」
「うしお、てめーもだ。わしに食われる前に、勝手に死ぬんじゃねぇ」
「悪ィな、シャガクシャ」
「てめーがバケモノになるってんなら、その前にわしが食らってやる！」
シャガクシャー！
お前もかー！
「だからおめーにぴったり付いて行って、おめえがバケモンに変わり始めたらおいしく食ってやらぁ」
「わっ、わたしも、うしおがうしおじゃなくなる前に殺してあげるから！」
シャガクシャと姉ちゃんは、オレに「付いて行く」という。どこにって？　決まってるさ……その気持ちが嬉しくて、胸が温かくなった。くそっ、涙が出てくるじゃねーか。たとえバケモノになったとしても、シャガクシャに食われるのなら、それでいいさ。だけど姉ちゃん

にオレの命を奪わせたくないなぁ……そうなったら、きっと姉ちゃんは悲しむ。

「オレと一緒に行ったら、姉ちゃんもバケモノになっちまうじゃ……？」

「わっ、わたしは大丈夫だよ？　うしおと違って元々、完全な人間じゃないから……」

姉ちゃんと一緒に、

「ここまで来ておめーを食えんなんて、気が治まんねぇからな」

「じゃ、どこまでも付いて来いや、シャガクシャ！」

シャガクシャと一緒に、

「に、兄ちゃん……もしか……オレがダメになったら……この槍……」

「オレァ、お古は使わねぇポリシーよ」

流兄ちゃん、行ってきます。

蒼月潮は魂を食われて獣と化した

わしゃー、長飛丸だ。今はシャガクシャなんて妙な名前を付けられている。まあ、それも小僧を食らうまでの辛抱よ。この獣の槍を持っている小僧を、隙を見て食らっちゃる……なのによう、なんでこいつは死にたがるかね？　今も見ず知らずのニンゲンのために、おのれの寿命を削ろうとしてやがる。意味分かんねーぜ。そんな事するくらいなら、とっととわしに食われろや！

「どっ、どこから入るのかな？」

「頭にいる婢妖を倒せば、他の奴等は逃げて行くんだろ？」

「うっ、うん……この人の体は霊的に鍛えられてて、居心地が悪いんだって……」

「そりゃー、目から入った方が手っ取り早いに決まってんだろ」

わしとうしおとガキは、杜綱ってニンゲンの目玉から侵入する。目玉の裏側を通って、脳ミソへ向かった。そこで待っていたのは人の形をした婢妖が1体だ。あいつが婢妖の大将か。1体で迎え撃つたぁ、よっぽど自信があるらしい。さっさと親玉を倒して、こんな狭苦しい所から出ちまおうぜ！

『よく来たな……私は、婢妖を率いて脳に棲む――血袴（ちばかま）』

血袴は片手に弓を構える。そこから射出された婢妖が、わしの体に食い付いた。だが、うしおは婢妖を避け、ガキは斬り落としている……ちっ、避け損なったのはわしだけかよ。うしおとガキは血袴へ迫る。だが、周囲の血管が触手のように伸びて、わしらの体に絡み付いた。こんなの雷でェ……！

『はははは、抵抗もせねばな？　やるがいい。脳で多数の血管破裂だ！』

「シャガクシャ、待てええ！」

「ああ!?」

バチィッと雷が走る。それはわしらを捕らえていた脳の血管を破壊した。化物と違ってニンゲンは、この程度で壊れちまうのか？　わしらは血管から逃れ、脳ミソから目玉まで後退する。うしおが血管を

傷付けるなって言うから、そのまま外へ逃れた。ニンゲンってめんどくせーな。

「――そんな奴が槍に魂をくれても、杜綱を助けようとしてんだ！助けられねぇわけがねえんだよ！」

「に、にいちゃん……ちょっとただいま」

「蒼月ィ!?　もう戻ってきたのか!?」

なにやらナガレが、うしおについて熱く語っている場面に戻ってきたらしいな。どいつもこいつも気まずそうな顔してやがる。そりゃーこの世の別れみてーなツラして突っ込んだやつが、一時も経たずに戻ってきたら呆れて物も言えねーだろ。わしの知ったこっちゃねーけどよ。

「あいつら杜綱の血管を使ってくるから、下手に攻撃できないんだ」

「真っ先に頭の婢妖を潰せれば話は早かったんだが、そう楽には行かねぇか」

「まずは血管に取り憑いてる婢妖を倒さないと……」

「おそらく心臓か脊髄だな。そこに取り憑いている婢妖を排除すれば、制御を奪えると思うが……」

「ありがとう、流兄ちゃん。また行ってくるよ」

「ああ、また行ってこい」

締まらねぇな。今度は目玉から入るんじゃなくて、指先からだ。腕を通り、心臓へ向かう。体の組織から飛び出る婢妖を倒しながら進んだ。そーいやずーっと昔、人に取り憑く妖怪がいたなぁ。あいつらが居りゃあ楽なんだが、今どこにいるのかも知れねぇ……案内役が居れば体に入り直すなんて面倒は省けたかもな。そろそろ肺を抜けて心臓だ。

『くっくっく、これは驚いた。よりにもよって君達の方から、こっちへ御足労くださるとはな……白面の御方は、この人間を操って君達を葬れとおっしゃったが、これで直接殺せる……やれ、うれしや』

心臓に棲まう婢妖が言った。脳ミソにいた婢妖みてーに、他の婢妖と形が違うな。そいつは血管を伸ばして、わしらを捕まえようとする

……だがなぁ、その手は二度目なのよ。うしおの投げた槍が、血管を避けるように曲がって、婢妖を貫いた。全開状態の槍に突かれた婢妖は、その場で消し飛ぶ。

だが、そこでうしおに異変が起こった。うしおの腕から無数の毛が飛び出る。獣の槍に魂を食われたうしおが、獣と化して行く……わしは化物になる前に、獣になる前に、うしおを食らうと言った――それが今か？　ガキを見ると、うしおに向かって神剣を構えている。

「……行くぜ」

なんだ「まだ」か……じゃあ、しゃーねーな。わしは安心して、うしおの後を追う。ガキも安心して、剣を納めた……なにも、おかしな事はねえ。次はナガレの言ってた脊髄って所だ。そこには心臓みてーに変わった婢妖はいねぇ。だが、大量の婢妖が待ち伏せしていた。うじゃうじゃいやがる！

「獣の槍よォ、オレの体が変わったっていい！　力を貸せ!!」

まーた、あのアホは槍に魂を食わせてやがる。だが、婢妖の数が多すぎた。雷で纏めて吹っ飛ばせりゃいいんだが、このニンゲンの肉体を傷付けるとうしおがやかましい。すると、外から力が送り込まれた。なんだ？　外のぼーずどもが、なんかやったのか？　その力で婢妖どもの動きが鈍る。うしおが婢妖どもを倒すと、残った奴等は体内から逃げて行った。

さーてと、ここを登れば脳ミソだ。さっきと変わらず、血袴って奴が待ち構えていた。さっきみてぇに血管を使ってはこねーが、婢妖弓って厄介な代物を持っていやがる。おまけに血袴は、かなりの腕前だ。うしおでもキツイな。まともに対抗できるのはガキだけか。

『剣よ。なぜに、その剣を振るって、白面の御方に敵す？』

「うっ、うしおが、この人を助けたいって言うから……」

『ふむ、ならば槍の伝承者に聞こう。なぜに、その獣の槍を振るって、白面の御方に敵す？』

「バカヤロウー！　おまえらが勝手に襲ってくるだけだろが、白面の者に直接恨みなんかねーや！」

『そうか、了解した。ならばここでは殺すまい。おまえはその槍を置いて去るがよい』
「ふざけんなっ、人を殺すような奴等に獣の槍を渡すかよっ！」
『人を殺すような奴等か……ははは、ならば仕方あるまい。白面の御方は人も生物も妖も、すべてを滅ぼせとおおせだ。どうせ白面の御方に、おまえが敵すべくもない。この場で葬ってくれよう！』
　なかなか決着がつかねぇ。血袴1体に、うしおとガキの2人がかりだ。それでも血袴を仕留め切れなかった。そうしていると血袴が、うしおに何かを見せる。幻術か？　何かを見たらしいうしおは、びびって使い物にならなくなった……なにやってやがんだ、あのアホは！
　そんなうしおを庇って、代わりにガキが切り伏せられる。胸を斜めに斬られて、血が溢れ出た。ガキの手から剣が零れ落ちる。そんなガキと血袴の間に、わしは飛び込んだ。すると血袴の放った無数の矢が、わしの背中に突き刺さる……ぐおおおお、こいつはァいかん！
「うしお……ずっと……」
「獣の槍ィィ！　残りの魂くれてやらあ!!」
　キィィィィィ!!
　獣の槍が唸る。血袴に向かって、うしおは突っ込んでいった……あのパーが！　なんの考えもなしに突っ込んで勝てる相手かよ！　案の定、うしおは血袴に押さえ込まれる。わしは全身に突き刺さった婢妖に食い付かれて動けん。ガキは胸から血を流し、ヒューヒューと苦しそうに息をしていた。
『邪魔が入ったが今こそ！　去ねい！　伝承者ああ!!』
　グサリと――
　――血袴の背中に剣が突き刺さった
『がああっ、剣ィィィ!!　きっさまあああ！』
「これで終わりだ、血袴ァ!!」
『かっ、かあああーっ！』
　今のはガキの仕業か？　その隙にうしおは槍で、血袴の中心を突き刺した。▪血袴は体の中心を抉り取られ、上半身と下半身の2つに分

かれる。傷口からボロボロと崩れる血袴は、間もなく消滅した。杜綱に取り憑いていた婢妖の最後だ。あー、終わった終わった。わしはボロボロのうしおとガキを引きずって、目から外へ出る。
「うしお！　麻子ちゃんもか！」
「オレは平気だよ。それよりも姉ちゃんを……」
　わしはニンゲンの治療なんてできねーからな。うしおとガキはナガレに任せる。ガキは胸を深く切られちゃいたが、あいつは純粋なニンゲンじゃねーからな。あの程度の傷なら、布かなんかで縛ってくっつけとけば、そのうち治るはずだ。うしおも槍を使っている間の傷なら、短い時間で治る。あーあ結局、うしおを食い損ねちまったなー。

　キィィィィィ!!

「な、何だ!?」
「婢妖かっ!?」
「うしおくん、気分悪いの!?」
「どうした、うしおっ！」
　近くに化物もいねぇのに槍が鳴る。すると、うしおを中心に風が巻き起こった。うしおやガキの治療を行っていたニンゲンたちが弾き飛ばされる……こいつァ、妖気の風だ。うしおから強烈な妖気が噴き出ている。槍を使っている時だって、こんなに強い妖気を感じた事はなかった。
「そいつに近寄るなァ！　今のそいつは、バケモンよ！」
　獣と化したうしおが、わしに飛びかかる。突き出される槍を、わしは避けた……ちぃ、わしが分からんのか！　ぶん殴って、正気に戻しちゃる！　うしおの狙いはわしだけらしく、他の者には見向きもしねぇ。その間に周りの人間達は、ちょこちょこと動き回っていた。
「シャガクシャ、そこから離れろっ！　こいつらの結界に閉じ込められるぞ！」
「わかったぜ！」
　とは言ったものの、うしおを引き離せねぇ。わしが空に飛べば、う

しおは追って来れねぇだろう。だが、うしおがボケーと突っ立ってくれるか？　そうなると別の奴が標的になるはずだ……ここにはわしの他にもう1匹、混じりもんがいる。ああ、くそっ、めんどうくせぇ。
「このままやれえっ!!」
「くうう、しゃーねえ。杜綱、やるぜ！」
「ああ。みんな、腦の陣をとる！」
「――腦の陣！」
　わしらを取り囲んだニンゲンどもから法力が放たれる。だが、うしおが槍を一閃すると、その力は砕け散った……ダメじゃねーか！　そのままうしおはわしを切り付け、わしに背を向ける。逃げる気か？　その先には体を起こしたガキがいた。麻子と名乗る混じりもんが――、
「うしお……」
　胸の傷が開いて、ボタボタと血が零れ落ちる。そんな体でガキは倒れるように、前へ一歩進んだ。両手を開いて伸ばし、うしおへ向ける……おい、ちょっと待て。おめーの剣は何所にやった？　見ると剣は、ガキの足下に落ちている。バッカ……死ぬ気か!?　うしおといいガキといい、どいつもこいつも、なんでてめーの命を投げ捨てやがる!!
「うしお……」

――獣の槍が、その体を貫いた。

　地面から飛び上がった白い剣が、槍を弾く。だが、ガキの脇腹に槍は突き刺さった。そこがボンッと爆発して、ガキの腹が弾け飛ぶ。辺りに腹の中身がブチ撒けられた……あのガキは純粋なニンゲンじゃねえ。その部分に槍が反応したんだ。ガキと擦れ違ったうしおは、ガキの体を突き飛ばして、そのまま走り去る。その背中にわしは、声を投げ付けた。
「なにやってんだよ、うしおー!!」
　だが、うしおは振り向きもしやがらねぇ。あのアホが……ぶったお

れたガキの側に、ニンゲンどもが集まる。ガキが妖気で編んだ服も吹っ飛んでいたから、ガキの傷口はよく見えた。ニンゲンだったら即死だろーな。だが、完全な化物だったら、槍が反応して半身が吹き飛んでいた。混じりもんのガキは運良く、まだ息がある。

「おい、ガキ……死ぬのか？」

答えはなかった。

「死ぬな……」

どうして、そんな事を言ったのか。わしにも分からん。そもそもこのガキは、わしにとって何だったのか。うしおと同じで厄介な剣を持つガキだ。石食いの時に礼として「かじってもいい」と言ってきた。だが混じりもんの肉なんぞ食っても上手くねぇ。そう言うとニンゲンの食い物を作ってきた。あんなんで腹が膨れるかよ……だがまァ、足しにはなったさ。わしにとってこいつは――、

――死ぬな……死ぬじゃない……こんな傷くらい、すぐ……治る

「うれ……しい……。初めて……やさしいことば……かけて……くれた」

「なんだよ……元気じゃねーか」

「ご……めん……なさい。すぐ……元の姿に……もどるから」

「いーから……とっとと戻りやがれ」

「きらいに……ならないで……」

ガキの化けの皮が剥がれる。足の先からニンゲンの皮が剥がれ始めた。その下から現れたのは肉の塊だ。中に骨の入っていない、単なる肉の塊さ。足の皮が剥がれ、太ももの皮が剥がれ、手の皮が剥がれ、腕の皮が剥がれ、胸の皮が剥がれ、頭の皮が剥がれる。そこには目も、歯も、唇も、髪の毛もない、肉だけで出来たバケモノの姿があった。目のあった場所は空洞になっている。単なる肉塊。こいつがガキの本性だ。

「ひっ!?」

「こいつはァ……」
「人間じゃない……？」
「おい！　おまえは、こいつが人間じゃないって知ってたのか？」
「あぁ？　化物同士は臭いで分かるから当たり前だろーが。なにを、そんなに驚いていやがる？」
　ガキの腹に開いた傷は、急速に治りつつある。危うくニンゲンのまま死ぬ所だったぜ……ったく、わざわざ弱っちいニンゲンの姿に変化するなんて、なに考えてんのか分かんねーや。最初から、その姿でいりゃーよかったんだよ。そうしてガキの傷が治るまで待っていると、空から爆音が聞こえてくる。ありゃー、へりこぷたーってやつか。
「拙僧は光覇明宗の僧、蒼月紫暮！　麻子どのはおられるか！」
　空飛ぶ機械から飛び降りて来たのは、うしおのオヤジだった。うしおのオヤジは地面に横たわる肉塊を見ると歩み寄る。このオヤジは初対面の夜に、ガキに本性を明かされていたからな。知らねぇのは、うしおだけだ。本性を見られると「恥ずかしい」ってのは、よく分かんねーよな。
「麻子どの。うしおを救うために、麻子どのの力を貸してほしい」
『ばジぎゃぶグが』
　肉の塊が出した声は、ニンゲンのものじゃねぇ。ガキは本性のままじゃ、ニンゲンの言葉を喋るのは難しいらしいな。やっぱ、まだ生まれたばかりのガキだ。腹の傷が完全には治ってねぇが、ガキは人に変化した。黒い髪が生え、空洞だった穴が目で埋まり、人のような唇が形作られ、人のような歯が生え、皮が張り付き、全身に骨が入る。そして黒い着物を体に被せて、ガキの変化は終わった。
「はっ、はい……」
「ではヘリへ。シャガクシャ殿も……他の者も陸路で神居古潭（カムイコタン）へ向かってほしい。うしおも其所へ向かっている」
「紫暮殿、よろしいのか？　うしお殿は獣の槍を奪った大罪人とされているのでは？」
「お役目様より、じきじきにお話をたまわった。獣と化したうしおを人間に戻し、真に獣の槍の使い手であるか否かを、我々は試さねばな

らぬ……そのためならば、彼女が『白面の剣』である事にも一時は目を瞑ると」

そうしてへりこぷたーで移動した先には、別の女もいた。たしか中村麻子と言うたか。そこで女とガキは、うしおを元に戻す手順の説明を受ける。その方法は簡単だ。うしおのオヤジが持っていたクシで、うしおの長く伸びた髪を梳くらしい。おい、そんなんで本当に戻るのかよ?

「ただ、うしおに縁のある女性の数が足りませぬ。ここにいる中村麻子どのと、麻子どのだけなのです」

「そっか……真由子がいないから……」

「……じゃっ、じゃあ私が先に行くよ? なっ、なんとかするから……」

そういう訳だ。うしおの進行方向で、わしとガキは、うしおを待ち受ける。もう1人の女と他の法力僧は別行動だった。ぼーずどもがいりゃ、結界でうしおを押さえられただろーに……日は傾き、夜が近くなっている。婢妖の姿は見当たらねー。使い手が獣になっている隙に、槍を破壊しようとは思わんかったのか? まー、封印状態なら兎も角、今の槍は赤い布の封印がねー。まともにやっても婢妖ごときにゃ倒せんと、分かってるんだろ。

さて、うしおが来たぜ。

「行くぞ、ガキ!」

「はっ、はい! シャガクシャ様」

るぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅん

ガキの剣が唸る。白い剣が七色の輝きを放った。これが神剣の全力解放ってわけか。ぼーずどもを遠ざけたのは、これが理由だな。この音色を聞きゃー、ニンゲンは勝手に死んじまう。８００年前に白面と戦った時も、ニンゲンが大勢死んだっけな。まァ、化物には関係ねーけどよ。

キイイイイ!!

るぅぅぅぅん!!

耳を引っ掻くような高音と、腹に響く重低音が重なる。そうして獣の槍と神剣が、キインッと打ち合った……うしおの状態は悪化してやがる。全身にヒビが入っていた。わしは火を吹いて、うしおに掴みかかる。ガキが言うにゃ、雷は弾き返されるらしいからな。押さえ込むのは槍を持っている、うしおの左腕だ。

「うしお、私はね？　うしおになら殺されてもいいって思ってたの」

ガキは腕を振り下ろす。

「でも、やっぱり、私が、うしおを――」

七色の光を放つ神剣が、

「――愛したい」

獣の槍を叩き斬った。

月夜の下、うしおの髪を女が梳く。髪が抜ける度に、うしおはニンゲンへ戻っていく。うしおの妖であった部分が、ニンゲンの女に引き抜かれていた。眠るうしおの頭を、女が膝に載せている……その様子に背を向けて、視界に入れないようにして、ガキは座り込んでいた。

その側には、真っ二つになった獣の槍が置かれている。槍は刃の部分が、斜めに切断されていた……あのクソ忌々しい槍が、今はこの有様だ。わしが蹴っ飛ばしても、まるで石ころみてーに大人しい。ぶっこわれてやがる。今の内に仕返ししてやるぜ、ほーれほーれ！

「おめーはうしおの毛を千切らねーのか？」

「わっ、私は人間じゃないから、うしおの『人間』も引き抜いちゃうと思うから……」

そんで膝を抱えて丸くなっているわけか……獣の槍がガラクタと化した今が、うしおを食らう絶好の機会だ……なんだろーが、これまで「獣の槍を使ううしお」に悩まされてきたんだぜ？　「獣の槍を使ううしお」じゃねーと張り合いがねぇじゃねーか。あー、それにうしおを食らおうとすれば、このガキが邪魔するだろーし……ちっ、しゃーねーな。あいつを食らうのは、また今度にしてやるぜ！

剣造りの娘は灼熱の炉に身を投じた

槍に魂を食われたオレは、体の自由が利かなくなった。オレの意思に反して、シャガクシャへ槍を向ける。流兄ちゃん達がオレを止めようとしたけれど、ダメだった。シャガクシャを切り付けて、オレの体は逃げ出す。その先には、血袴のせいで傷を負った姉ちゃんがいた。

（おい、待てよ……そっちには行くな。なにをする気だ……待て!!）

オレを迎えるように、姉ちゃんは両手を広げる。その手に武器を持っていなかった。姉ちゃんの剣は足下に落ちている。姉ちゃんは無抵抗で、オレを受け入れようとしていた……ダメだ！　姉ちゃん、逃げてくれ！　オレは自分の腕を引っぱり、槍の位置を移動させる。姉ちゃんの剣も飛び上がって、槍を弾いた。だけどオレの槍は、姉ちゃんの体に突き刺さる。

（うわあああああ!!）

ミチャッという音が耳に聞こえた。姉ちゃんを貫いた感触が体に伝わる。姉ちゃんの腹に、槍の埋まった光景が目に映る。その部分がボンッと爆発して、姉ちゃんの脇腹は吹っ飛んだ。血飛沫と肉片が舞って、オレに降りかかる。そのまま姉ちゃんを突き飛ばしたオレは、後ろを振り返ることなく去った。

よりにもよってオレが、姉ちゃんを傷付けてしまった。心がギシギシと軋む。胸を捻り潰されているかのように痛んだ。姉ちゃんは剣を持たず無防備で、オレを迎い入れるように無抵抗だった。きっとオレが止まるって信じてくれていたんだ。そんな姉ちゃんをオレは……殺してしまったのかも知れない。

体が言う事を聞かなかった。意識が遠くなる。そうしてオレは槍の中に取り込まれた。ぶっこわれそうな闇の中で、1人の男に出会う。その男は血の涙を流し、口から火を吹き、カーンカーンッと金槌で金属を打っていた。これは人か……いや妖なのか？　その男は白面の者を憎んでいた。

「おじさん……誰だ？　なんで白面の者を憎んでる？」

『なんで……憎いかだと……フフフ……さあなあ、もう忘れたなあ。もう二千年もの昔だものなあ……』
『オレがこの獣の槍をつくってから……』
オレの体は何処かへ向かって走り、道中の化物を殺して行く。やめろ……もう、やめてくれ……オレは誰も殺したくないんだ……体がバラバラになる。意識が曖昧になる。オレも槍に魂を食われて、獣になっていくのか……そんな中、遠くから音が聞こえる。脳を揺らすような気持ちの悪い音や、金属で打ち合う音が聞こえた。その音にオレは魂を揺さぶられる。
『――愛してる』
闇に光が差し込んだ。闇が割れて、その隙間から虹色の光が差し込む。その光に照らされると、槍の中にいた男は悲鳴を上げた。暗かった世界は虹色の光に侵され、明るくなっていく。槍に囚われていたオレの体が解放された。槍から魂が解放される――ああ、オレは、帰れるんだ。

目覚めると、麻子に見下ろされていた。すると、いきなり突き飛ばされてオレは地面を転がる……なにすんだ、おめーは！　麻子とギャースカピースカやって、ふと気付く。なんで麻子が、ここに居るんだ？　……なんでも、オレを人間へ戻すためにアレコレしたらしい。そりゃー、心配かけたな。
「ただいま、麻子」
と言うと、頭にチョップされた。
「あの子にも言ってやんなさいよ。あの子があんたを止めて、あたしは髪を梳いただけなんだから」
指差された方向を見ると、姉ちゃんがいた。姉ちゃんは空を見上げている。つられて空を見ると、空を覆う黒い霧を、白い流星が撃ち払っていた。黒い霧は、数知れないほどの婢妖だ。白い流星は、砕けた姉ちゃんの剣だった。婢妖の大群が姉ちゃんに撃ち落とされていく。
「姉ちゃん！　怪我は大丈夫なのか!?」

最後に姉ちゃんを見た時は、横腹が吹っ飛んでいた。姉ちゃんに飛び付いて、傷の具合を確かめようとする。もしも姉ちゃんが無理をしていたら、すぐに休ませないと。そう思って姉ちゃんの着物をめくり、服の中をのぞく。すると、後ろから麻子に蹴り飛ばされた。なんだよー。

「あっ、あのね。うしお……壊しちゃった」

そう言って姉ちゃんが差し出したのは、真っ二つになった獣の槍だ……あちゃー、壊しちゃったか。流兄ちゃんや杜綱さんに何て言おう……と思っていたら、ショックのあまり地面に頭を垂れている杜綱さんと見た事のない女の人、それと槍が壊れても気にしてなさそうな流兄ちゃんの姿を見つけた。流兄ちゃんによると、女の人も獣の槍の伝承候補者らしい。その……ガラクタと化した槍の……そうなんだ。それとオレのオヤジの姿もあった。

「うしお。この先に神居古潭という洞がある。獣の槍を操る者が、入らねばならぬという洞だ。そこから無事に出る事が適えば、おまえは光覇明宗に正当伝承者と認められるだろう」

「でもよー、オヤジ。その獣の槍が壊れちまってるぞ」

「よいか、うしお。光覇明宗には仏の教えを説く宗教としての顔とは別に、闇の伝承を持っている。それは獣の槍を護ること……その使命を果たすために我等は全国に散って、妖怪を封じておるのだ」

あっ、このハゲ、聞いてねーや。

「分かったぜ、オヤジ……迷惑かけたな」

「無事に戻ってきたら……ぶん殴ってやるわ」

シャガクシャはボケーと突っ立っている。何やってんだ、あいつ？

そう思って声を掛けると、オレに向かって大きな口を開けた。獣の槍が壊れている間に、オレを食らうつもりか……！　だけど、ヒュッと音がする。シャガクシャの顔前に、姉ちゃんの白い流星が落下した。

「だっ、だめだよ、シャガクシャ様」

「ちぇー、そんなこったろーと思ったぜ！」

そうしてオレは皆に別れを告げた。オヤジの言った神居古潭へ向

かう。そこへ行くとガケに横穴が開いていた。横穴の入口に鳥居が立っている。シャガクシャもオレに付いてくるらしい。だけど姉ちゃんは、オヤジに止められた。すると姉ちゃんは剣を、オレへ差し出す。
「もっ、もっていって……」
「姉ちゃんはいいのかよ？」
「こっ、ここで待ってるから……」
「そっか……じゃ、行ってくるよ」
「うっ、うん……いってらっしゃい」
　ネジ穴のような横穴を、オレとシャガクシャは歩く。そういえば穴の前にあった大木にも、大きな穴があいていた。グルグル回りながら飛んできた物が、ガケに当たって減り込んだみたいだ。その奥には大きな社（やしろ）が建っている。その中には、社の奥で黒く渦巻く化物と、直立した白銀の西洋甲冑があった。
『……来たか。獣の槍の伝承者よ』
　白銀の西洋甲冑が喋る。こいつと同じ者を、オレは見た事があった。光覇明宗の総本山だ。姉ちゃんの剣に魂を食われて、僧侶は白銀の西洋甲冑と化した。同じように、こいつも剣に魂を食われ果てたのか。姉ちゃんのお母様は、ここに「貴方の母親について教えてくれる者がいる」と言っていた。
「オレは蒼月うしお。あんたは？」
『我等は白面の剣だ。それ以外の何者でもない』
「あんたはオレの母ちゃんを知ってるのか？」
『ひひひ、知ってはいるな。だが、それを教える役割は我等のものではない』
「長―いこと。待ったよう。獣の槍を使う者よう。いーろいろ知りたいコトあーるべなあ。いーろいろよお……ぜーんぶ、この「時逆」が教えてやろうなあ」
　そう言って現れたのは、１つの妖を２つに分けたような妖だった。時逆は、オレとシャガクシャを過去へ連れて行く。時逆によると、二千三百年ほど昔の中国の都らしい。そう言って時逆は姿を消した

……え？　案内してくれないのか？　とつぜん空中へ放り出されたオレとシャガクシャは、地面に激突する。シャガクシャー！　てめーは飛べるだろー！
「あ……」
「えっ、え～と！　オレっ、蒼月潮……っっって～」
「ば～か。トキサカとかのコトバ信じたら、今はムカシのちゅうごくだ。コトバが通じるかよ！」
　女の人の前に落下したらしい。目の前で女の人が驚いていた。慌てて自己紹介するものの、シャガクシャに突っ込まれる。そりゃそーだ。だけどオレは中国語を知らない。国語で習う漢文くらいか。英語で習うアメリカ語だって怪しいぜ。どうした物かと思っていると、女の人が表情を緩めた。
「よかった、妖怪じゃなかった……空から急に落ちてきたように見えたから、私てっきり妖怪だと思って！　生きた心地しなかったわ……」
「バカ、通じるぜ。向こうのいってる事も分かるぞ」
「そんなコトいったって知るか！　トキサカが何かしたんだろ」
　その女の人にオレは名前を聞かれる。蒼月（あおつき）と名乗ったけれど、蒼月（シャンユエ）と解された。女の人は決眉（ジエメイ）という。どうやらオレの言葉は、オレが思っている言葉と違うように伝わるらしい。そこでオレはシャガクシャに「妖がうじゃうじゃ居るから食われんなよ」と警告された。
「ひいいっ！　鉤殻虫だあああっ」
　地面が盛り上がり、馬車が吹き飛ばされる。大きなエビのような姿の妖怪が、地面から飛び出た。城壁の前にいた人々は逃げ惑う。虫っていうか、あれは妖怪じゃないか？　オレもジエメイを連れて逃げる……そうだ、姉ちゃんの剣は使えないのか？　オレは姉ちゃんの剣を鞘から抜く。だけど剣は、獣の槍のように応えてはくれない。やっぱオレじゃ使えないのか？
　ドムッ！
「ちっ、言った矢先にこんなトコでくたばんなよな～。死体はまずい

んだぜ」
　こっちに向かって来ていた虫を、シャガクシャが倒してくれた。だけどシャガクシャの足下から、地面を吹き飛ばして虫が襲いかかる。そいつに向かって、オレは剣を投げた。すると剣は虫の体にスコーンと刺さる。おおっ、すごい切れ味だな！　そこへシャガクシャが雷を落とすと、姉ちゃんの剣が雷を弾いて大爆発を起こした。それに巻き込まれて、オレの体も吹き飛ばされる。おい、シャガクシャ……
「なにやってんだ、おまえはよー！」
「なにーっ、せっかく助けてやったのによ！」
「あ……あの、ありがとう、蒼月……誰に話しているんです？」
「ええ？　いや　なに、その！」
　ああ、そっか。フツーの人にシャガクシャは見えないんだ。
「あんな恐ろしい妖怪を倒すなんて……あなたは仙人様なんでしょう？」
「ちょっ、ちょっと待った、ちがうよっ！」
「よろしかったら家にいらしてくださいませんか！　粗末な家ですが、お礼させてください」
「いや、ちょっと……」
　そのままズルズルと引き摺られて、ジエメイさんの家まで案内される。どうやらジエメイさんの家は、城門の外にあるらしい。家に着くとジエメイさんは母親に叱られた。最近は城壁の近くにも妖怪が多く出るとか。その原因は「白面の者」が、また現れたからと噂されていた。
　その夜、ジエメイさんから兄様の話を聞く。ジエメイさんの兄様は「強い剣の鍛え方」の修行に行っていて、今日戻ってくる予定らしい。そうして戻ってきた兄様は、さっそく父親と神剣造りを始めた。だけど夜が明けて顔を出したジエメイさんの父親と兄様は、暗い顔をしている。
「父様！　兄様!!　神剣は出来上がったのですか？」
「だめだ……どうしてもヒビが入る……！　死山の優れた鉄を苦心して得たのに……それがどうしても一つに溶け、まとまってくれぬ！」

「父上、一つ……方法があります」
「なに!?」
「私は遠く呉の国まで行って、剣の鍛法を学んできました。その中で暗黒の術となるものも耳にしました……」
「そ、それはなんだギリョウ！　教えるのだ！」
「今まで黙っており、申し訳ありません……」

――呉王闔閭（こうりょ）の頃、干将という造剣の名工がおりました。
――彼は王から名剣を鍛えよとの命を受け、五山の金属を集め、剣を造ろうとした。
――だが三年かかっても、金鉄は炉の火に溶けようとしなかった。
――そこで彼は、
――妻の莫邪と共に自らも髪を切り、爪を切って炉に投げ入れた。
――そして三百人の者にふいごを吹かせ、炭も燃やして、ようやく金鉄を溶かし、
――〈干将〉〈莫邪〉の名剣を造る事ができたのです。

「そ、そうか……そうか！　ははは！　でかしたぞギリョウ!!　これで金属を、しっかり一つにできるんだ！　――コウシ、コウシ！」
「はい」
コウシというのは、ジエメイさんの母親の名前だ。
「母様……そんな綺麗な髪なのに……」
「ジエメイ……母は造剣の名工の妻なのです。夫の仕事のためには惜しいものなどありません」
ギリョウさんが黙っていた理由が、少し分かった気がする。うれしそうに笑うおじさんを見て、オレは少し怖いと思った……それから４日間、おじさんとギリョウさんは休むことなく鉄槌を振るう。そうして神剣を打ち上げた。次の奉上の日に、それを王の下へ持って行くという。

神剣を王に捧げる日になった。謁見の間に、各地の「剣造り」が集まる。特例として剣造りの弟子を含む身内も、宮内に入る事が許された。当然、謁見の間の両脇に、大勢の兵士が控えている。おじさんとおばさん、ジエメイさんとギリョウさんと一緒に、オレも付いてきていた。

「よくぞ参上した、造剣の忠民達よ。今日はその忠心に応えて、寛大なる我が君が目通りを許される。知っての通り、ここで神剣を選ばれた者は、神職としての高位を許される」

「神剣をもて……妖を倒す……白面の者を……」

「心しろ！」

「ははーっ！」

みんなに合わせて、オレも平伏する。そこで壇上の隅に控えていた女官に異変が起こった。女官の1人がガタガタと体を震わせる。それは内側から叩かれているかのようだった。すると隣の女官もガタガタと震え始める。さらに隣の女官も、さらにさらに隣の女官も……そしてガタガタと震える女官の口から、獣の尾が飛び出した。

『王よ、これはおまえが招いたことよ』

女官の体を引き摺ったまま、獣の尾が一つ所に集う。尾の数は九つ。異様な光景の中、平然と立っていた一人の女官の下に集った。その女官の顔がグニャリと歪み、白き面を形作る。女の顔から、獣の顔が生えた。女官は人の形を捨てて、巨大な獣の姿を現す。九つの尾に、白き面の大化生――白面の者だ。

「ひるむなあ!!　いかな大妖怪でも、これだけの人数でかかれば倒せるぞ！　武人の誇りを見せるのだ！」

「白面の者だあ！　今こそ我等の神剣の威を示す時だぞ！　逃げてはならん！」

「おお、その通りじゃ！」

「は……ははは、どうだ白面！　これだけの神剣を相手に勝てるものかあ！」

『哀れよなあ～、国王よ。くだらぬ兵とつまらぬ剣を掻き集めて、何と戦うつもりだったのだ？』

――この白面の者と、か？
白面の者が、あざわらった。九つの尾が乱れ舞う。白い尾は鋭利な刃物のように、人々の体を切り裂いた。体が千切れ、首が飛ぶ。それらは尾の起こした強風に巻き上げられて、ベチャベチャと水っぽい音を立てて床に落ちた。ごっそりと人が消えて、一面が血にぬれた死体の山に変わる。
「ええい、皆！　己の神剣を信じるのだ！」
「いざあああ！」
「お……おじさんやめろオオオ!!」
残った人々と共に、剣を持っておじさんが駆け出す。それはおばさんの髪を炉に入れ、ギリュウさんと一緒に数日かけて鍛えた剣だ。それは単なる剣ではなく、神剣と呼べるほどの輝きを有している……その剣が砕け散った。おじさんの体から血が噴き出る。そんな……おじさんが、死んだ？
『人間どもよ……恐怖に叫び……狂え。それが我が喜びなれば――』
白面の口に、ボッと火が灯った。あれは……なんだ……？
「バカヤロウッ、ボケっとしてんな！　あれにやられたら人間なんぞ骨も残らねえ!!」
「シャガクシャ！　そうだ……」
ここに居るのはオレだけじゃない。オレは後ろへ振り向いて――跳んだ。両手を広げて、ジエメイさんとギリョウさんを押し倒す……だけど、おばさんの服を掴んだ手は、外れた。布の感触が、手から擦り抜けて行く。オレはサァーと血の気が引いた。その頭上を熱気が通りすぎ、白面の口から放たれた灼熱が、おばさんを飲み込んだ。
「うわあああああ!!」
おばさんの腰から下が焼け残り、床にドサリと倒れる。腰から下だけが……
「くっそおおお！」
「バカ、うしおやめろ！」
オレは姉ちゃんの剣を抜く。抜いて、白面の顔を見た。白面の、目を見た……その瞬間から動けなくなる。姉ちゃんの剣を持つ手が、足

が、体が震える。歯がカタカタと音を鳴らしていた。白面が恐い。恐くてたまらない。意識がバラバラになる。ダメだ、オレは、ここで死ぬ。

『子供、白面の者に立ち向かうかよ……ならば我は覚えておこう』

――おまえの断末魔の後悔と苦しみをな！

白面が火を吹く。炎の輝きが視界を占めた。姉ちゃんの剣は、オレに応えてくれない。だけどシャガクシャがオレを助けてくれた。シャガクシャの吐いた火が、白面の火と激突する。炎は謁見の間に立ち昇り、天井を突き破った。オレはシャガクシャに掴まって、屋根の上へ出る。

「おのれぇ白面。わしを歯牙にもかけやがらねぇ」

「なんにもできなかった……くそう……くそおお……」

都市を囲む城壁が、地獄の釜になった。白面が火を吐くたびに人々の悲鳴が上がる。逃げ惑う人々が炎に焼かれていった。それから半時間も待たずに、都市は消滅する。城壁は熱で溶け崩れ、建物は燃え尽きて、黒焦げの死体が隙間なく転がっていた。生物の焼けた臭いを嗅いで、オレは頭がおかしくなりそうだった。

ジエメイさんとギリョウさんは生きていた。ギリョウさんは気絶したジエメイさんを抱え、おじさんとおばさんの遺体を並べていた。都市から離れた位置にあった家へ、オレ達は戻る。家は無事だった。ジエメイさんを布団に寝かせ、オレは夜空の下へ出る。すると、ゴンッゴンッと物を叩く音が聞こえた。

「ギリョウ……さん？」

剣造りに使う小屋の方から聞こえていた。中を覗くと、ギリョウさんが拳を石に打ちつけている。何度も、何度も叩いたのか、ギリョウさんの拳から血が出ていた。あんな事をしたら手が壊れてしまう。オレは慌ててギリョウさんを止めた。だけどギリョウさんは、オレは突き飛ばす。

「あれだけ父が魂を込めた神剣が、何の役にも立たなかったんだ！
何の役にも!!　今さらオレのこんな腕が残っていて、どうなると言うのだあ!!」
　ギリョウさんの拳と石の間に、オレは手を差し込んだ。手が潰されて痛え……
「蒼月……」
「終わりじゃないよ、ギリョウさん。負けないでくれよ……あきらめちゃくやしいよ……役に立たんかも知れないけど、オレも手伝うからさ……」
「だ、だめなんだ……蒼月……あの神剣が折れたら、あとは……もう、あとは……あの方法しか残っていないんだよ……」
「あの方法って……？」
「もう一つ、あるんだよ……剛い、剣を、造る……暗黒の邪法が……」

——今から百年もの昔。
——天帝の命により大鐘を造れと命ぜられた鐘造りの名工が、
——その奥義の術を尽くして鋳造にあたったが、
——あるものは欠け落ち、あるものはひび割れ、
——上手くいったかと思えば音悪く、十打たぬうちに砕けた。

「決心した鐘師は……何をしたと思う……？」

——人身御供さ……、
——その男は神の力によって大鐘を造るために、
——己が娘を神の供物として、炉の中に捧げたのさ。
——そうして乙女の体を内に秘めて出来上がった鐘は傷一つなく、
——光を受けて七色に輝き、万里に澄んだ音色を響かせたという。

「そ、そんな……」
「だから師匠は、この話の後に言った——鬼畜の業だ。造剣の匠は魔物にまでなってはいけないと……あたりまえだ……そんな事が……

そんな事ができるか！　父も……母も死んでしまった今では……ジエメイがオレの全てだ。ジエメイまで亡くすくらいなら、やめて逃げたほうがいい……！」

「――お兄様」

「ジッ……!?」

「よい剣を……つくってくださいましね」

　ジエメイさんが炉の上に立っていた。煮えたぎる炉の上に……

「ジ、ジエメイ……な、なにを言ってるのだ？　そんな所に立つと熱いだろ……さ、こっちへ降りろ……」

「次にあの白面の者を倒し得る神剣を打てるのは、兄様だけです。母様があの時、父様に言われて髪を炉に捧げたように……今度は私の番なのですね」

「よいのだジエメイ！　もうよい!!　父も母も亡くなった。この上おまえまで亡くして……兄はどうすればよいのだ!!　耐えられぬ！　耐えられぬぞ!!　逃げよう！

　２人で白面のいない遠くへ逃げよう!!　そして……そこで普通に暮らそう！　どうか……どうかおまえだけでも……!!」

「やめろ……ジエメイさん……これ以上！　白面の者のせいで誰も死ななくったって！　いいじゃないかよーっ!!」

――でも、ジエメイさんは、そんなギリョウさんとオレを見つめ、

――少し困った顔をしたあと、

――笑ったんだ

「ジエメイーっ!!」

　オレはジエメイさんに手を伸ばす。炉に身を投げたジエメイさんに手を伸ばした……ダメだ、足りない。このままじゃ届かないかも知れない。かも知れないじゃなくて、届かないとダメなんだ。死ぬ――いや、死なせるものかよ！　熱いからって、痛いからって、なんだっ

てんだ!!
オレは炉を蹴って――跳んだ。ジエメイさんに体を打つける。だけどジエメイさんを炉の外に押し出す事はできなくて……オレの体はジエメイさんと共に炉へ落ちた。オレはジエメイさんを抱き締め、少しでも熱から守ろうとする。こんな事をしても無駄かも知れない。だけどオレは夢中だった。
「たわけええええ!!」
ズドンッ!
シャガクシャの怒鳴り声が聞こえる。そして、すぐ側で轟音が……体が死ぬほど痛い。どうなったんだ？　痛みで感覚が分からない。なにも見えない。ジエメイさんは無事なのか？　声が出ない。息ができない。喉に何か詰まっているような。苦しい……だれか教えてくれ。シャガクシャ……ギリョウさん……、
――オレの手は届いたのか？

蒼月潮はジエメイの死を受け入れる

目覚めると、朝だった……あれ？　ジエメイさんを助けるために、オレは炉へ飛び込んだ。その後、どうなったんだ？　ここは、どこだ？　知らない布団で、知らない部屋で、オレは寝ていた。体を見ても火傷の痕はない。煮えたぎる炉に落ちたんだから、全身に王大火傷を負ったはずなのに……？

布団はベッド台に敷かれている。豪華だ。うちでは畳に布団を敷いていたからなー。辺りを見回すと、勉強机や本棚が置いてある。とりあえず布団から起き上がると、オレはバランスを崩した。体のバランスが上手く取れない。バランスを取るために、足をバタバタと鳴らす……なんだ、これ？　まるで自分の体じゃないみたいだ。

壁に手を突いて、バランスを取る。布団から起きて扉を開けた。すると廊下に出る。この建物は一軒家のようだ。ここは2階の廊下か。下からテレビのような曇った音が聞こえる。いったい何が如何なっているのか。古代へ行っていたはずなのに、現代へ戻っている。病院なら分かるけれど、知らない家で寝ていた……待てよ、シャガクシャはどこだ？

「シャガクシャ、いるのか？」

応答はない。すると、急に不安になった。一人でいるのが怖い。早く人に会いたくなった。ゆっくりと慎重にオレは、手すりに掴まりつつ階段を降りる。だけど途中でバランスを崩し、階段から落ちた。手すりを掴んでいた手も、上手く動かなくて外れてしまった。幸いな事に足の方から落ちたため、大きな怪我はない。その際にドダダダダと大きな音が鳴って、その物音を聞いた人が様子を見に来た。

「うしお、大丈夫ですか？」

「ああ、うん……」

見知らぬ女の人が声をかける。オレの名前を知っているようだ。誰から聞いたのだろう。オレは壁に体重を預けて立ち上がった。落ちた衝撃で足と背中が痛い。階段の角で背中を擦ったのか。そういえば声も、おかしい気がする……神経が鈍ってるのか？　頭と体が噛

み合っていない。
「気分が悪いのですか？」
「いや、大丈夫。それよりも、ここは何所ですか？」
「……え？」
「え……？」
「うしお、まさか……」
「えっ、なにか……？」
「あなた、たいへんです！　うしおが記憶喪失になりました！」
「ちがうって!?」
　女の人の声によって、新たに人がやってくる。それはオヤジだった……なんだオヤジか。見知った人の顔を見て、オレは安心する。問題があるとすればオヤジがスーツを着ていた事だろう。だいたい黒い法衣で済むから、オヤジがスーツを着ている所なんて見たことがなかった。
「朝から騒々しい奴だな。母さんを困らせるんじゃない」
「オヤジ！　いったい何があったんだ？　なんでオレはここにいる!?」
「そりゃー、おまえ階段から落ちたからだろう？」
「そうじゃねーよ！　時逆ってやつに案内されて、古代へ行ってたんだ！」
「なにを言っとるんだ、おまえは？　ボケとるのか？」
　どうも様子がおかしい。話が通じない。とりあえず腹が減っていたオレは、食事をいただいた。ハシじゃ難しいな……指が震える。テレビ番組のニュースを見ると、カムイコタンへ入った翌日と分かった。だけど、おかしい。全身の火傷は時逆が何とかしたと考えても、その事についてオヤジが知らない振りをする。まるでオヤジが他人のように思えて――不気味だった。
『――国の――で核爆弾による自爆テロが発生し……』
「核爆弾？」
　核爆弾という言葉が聞こえて、オレは驚く。核爆弾が使われるなんて大事じゃないか。ニュース番組の映像では、小型の核地雷や核爆弾

なんて物が紹介されている。こんな物が、今の世の中にはあるのか？
　信じられない。だけどオヤジや女の人は、それほど驚いていなかった。なんで驚いていないんだ？　その様子が不自然に思える。
「どうした、うしお？」
「核爆弾が使われたって、大事なんじゃないか？」
「ああ、そうだな。嘆かわしいことだ」
「でも……それほど驚いているように見えなくてさ」
「そうだな……こんな御時世に慣れてしまっては行けないのだが……」
　「なに言ってんだよハゲ」なんて言いそうになったけれど、オヤジは真剣だった……おかしい。それじゃまるで「核兵器が使われた」というニュースが珍しくない物みたいじゃないか。オレは気持ち悪くなって、口を閉ざす。おかしい。オレの中で違和感が大きくなって行った。なんだか場違いに思える。
「あら、うしお？　そろそろ行かなくていいの？」
「え？　どこに？」
「もちろん学校よ……まさか、やっぱり記憶喪失なのかしら？」
「いや、分かってるって。学校だろ？」
　学校へ行く事は当たり前だ。だけど、今のオレにとっては当たり前じゃない。この異変の原因をオレは知りたかった……そうだ、異変だ。なにもかも、おかしい。まるで違う世界に迷い込んだような……もしかして妖怪の仕業なのか？　そしてシャガクシャは何所へいった？
「……なあ、オヤジ。妖怪変化っていると思うか？」
「なにを言っとるんだ、おまえは？　妖怪なんて居る訳なかろう」
　オレの質問に、呆れたようにオヤジは答えた……違う。これはオレのオヤジじゃない。オレのオヤジは「妖怪変化は目には見えんがちゃーんと居るもんなんだぞ」と毎日毎朝説教を垂れるような奴なんだ。外見は同じでも中身は別人だった……オレの覚えた違和感は、これだったんだ。
「だれだよ……おまらは誰だ？　ここは何所なんだよ？　どうしてオ

レは、ここに居るんだ!?」
「母さんや……まさか、うしおは本当に記憶喪失なのか?」
「そう言われましても……」
「ごちそうさま!　オレは行くよ!　助けてくれて、ありがと!」
「あ、うしお!　制服に着替えるのよ!」
　オレは御飯のお礼を言って、裸足のまま家から飛び出す。中身の違うオヤジが怖かった。体が上手く動かなくて、何度も転びそうになる。でも、歩いている内に少しずつ慣れてきた。オレに行き先はなく、辺りを見て回る。すると見覚えのある商店街が見える。なんだ……ここって、うちの寺の近くだったのか。うちの寺は丘の上にある。だけど、そこを見ると寺はなく、建物は建っていなかった。
「どうなってるんだよ……」
　丘を登ってみると、そこにあったのは墓地だ。うちの寺はなく、墓石が並んでいる。本当に訳が分からない。炉に飛び込んだオレは、どうなったんだ?　あの後に何があった?　どうすればいいのか分からない。この世界にオレは、一人ぼっちのように思えた……だけど、景色が歪む。オレの前で空間が歪んだ。そこから時逆とシャガクシャと……幽霊になったジエメイさんが姿を現す。
「時逆!　シャガクシャ!　ジエメイさん……?」
「死せし後も、このように浅ましい姿を晒す恥を許してね、蒼月(シャンユエ)……いいえ、蒼月(あおつき)うしお」
「ジエメイさん、その姿って……そっか。オレ、ジエメイさんを助けられなかったのか……」
「うしおに救い出された後、まもなく私も命を落としました。私を救おうとした、うしおの気持ちは嬉しかった……しかし、それが、この未来を招いてしまったのです」
「この未来……?」
「ここは……獣の槍が生まれなかった未来なのです」
　ジエメイさんが横を向く。その視線の先には墓地があった。獣の槍が生まれなかったから、うちの場所が変わったのか?　毎朝オレに「妖怪変化は目には見えんが、ちゃーんと居るもんなんだぞ」なんて

言っていたオヤジが、「妖怪なんて居る訳なかろう」なんて言ってやがった……あれ？　待てよ。じゃあオヤジと一緒にいた人って、オレの母ちゃん？
「うしお……私は貴方に、酷なおねがい事をしなければなりません」
「オレに出来る事なら何でも言ってよ」
　辛そうなジエメイさんを励ましたかった。だけど、今のオレに何が出来るのだろう？　槍のないオレは、ほとんど凡人だ。槍に魂を食われて妖怪になりかけた影響で、ちょっと強いかも知れない。だけど、妖怪と戦うには力不足だ。こんなオレにも出来る事があるのだろうか。
「それでは――私を助けようと思わないでください」
　その拒絶の言葉はオレの心に響いた。「してくれ」ではなく「するな」と、行動を禁じられた。オレの意思を否定されたかのように感じる。「助けようと思うな」とは……ジエメイさんを助けるために、オレが炉へ飛び込んだ事を指しているのだろう。ジエメイさんを見殺しにすれば、獣の槍が生まれるに違いない。
　……だけど思い出した。獣の槍は現代で壊れている。オレの魂を食らって化物へ変えつつあった獣の槍だけど、姉ちゃんの剣で真っ二つになった。その代わりに姉ちゃんから、大事な剣を貸してもらったんだ。だから疑問に思う。ジエメイさんを見捨ててまで、あれを造る必要があるのか？
「ジエメイさんを見捨てられる訳ないだろ……！」
「これまでも、これからも……白面の者の手によって、命を奪われる人々がいるのです。その人々を見過ごす事などできません」
　この世界ではダメなのかと思ってしまう。本当に白面の者を倒す必要があるのか――白面の者に滅ぼされた都市を見ても、そんな事がいえるのか？　本当にジエメイさんを見殺しにする必要があるのか――獣の槍でなければ白面の者を倒せないのか――他に白面の者を倒す方法はないのか？
「他に方法はないのかよ!?」
「獣の槍がなければ、白面の者を打倒する事はできません……分かっ

て、うしお」
「そんな事ない！　獣の槍が無くても、みんなで力を合わせれば……！」
「いいえ……今から９００年前、本来ならば白面の者を撃退するはずだった私達は敗北しました。もはや今の世に、白面の者を討ち果たす力を持つ者はおりません」
「ジエメイさんを見捨てるなんて、そんな事できねぇよ……！」
「うしお、そのように私を哀れまないでください。私と兄様のような者を生み出さないために、私は白面の者を倒したいだけなのです」
　悲しそうにジエメイさんは言う。自分の命が失われる事ではなく、オレが納得しない事を悲しんでいた。それでも納得できなかったオレは、時逆の案内で過去を見せられる。白面の撃退に失敗した人や妖が惨殺される光景や、白面に唆されて使用された核兵器が作り出す地獄を見せられた。
　また古代へ行けば、今度こそジエメイさんを助ける事ができるかも知れない。ジエメイさんを死なせずに済むんだ……でも、それはオレの我がままだ。ジエメイさんが死ななければ獣の槍は生まれない。獣の槍が生まれなければ、たくさんの人が死ぬ。オレに選択肢はなかった。１つしか選択できなかった。
　ジエメイさんを殺そう。その覚悟を決めたオレの前に、姉ちゃんの剣が現れる。そういえば剣を持ったまま、炉に飛び込んだ気がする。だけど無事だったらしい。時逆が古代から拾ってきてくれたのか。姉ちゃんの剣は白くて、焦げている様子はない。その剣をオレは握る。

　――るんっ、と姉ちゃんの剣が鳴いた

　時逆の力を借りて、オレは再び古代を訪れる。白面の者によって、都が滅ぼされた後まで戻ってきた。ジエメイさんを見守っていた”過去のオレ”が、小屋から姿を現す。そしてオレに気付いて不審な顔をした。自分の姿だからこそなのか、”過去のオレ”はオレが自分自

身だと気付いていなかった。
「うしおとわしが2人に増えやがった……だと？」
”過去のシャガクシャ”が姿を現わす。だけどオレの近くにもシャガクシャがいた。オレが2人で、シャガクシャも2人だ。”過去のオレ”と違ってオレは、獣の槍によって肉体が妖怪化していない。正確に言うと、このオレの体はオレの物じゃないんだ。この世界で平和に暮らしていたオレの体を乗っ取った物だった。
「オレはジエメイさんを助けようとして、獣の槍が生まれなかった世界のオレだ」
「おまえがオレ？　おまえは妖怪じゃないのか？」
「違う。オレは人間で、おまえなんだ」
「その……獣の槍が生まれなかった世界だって？　そのオレが、なんでココにいる？」
「オレはジエメイさんを助けちゃいけない。ジエメイさんが死ななきゃ、獣の槍は生まれないんだ」
「なに言ってんだよ……なんでジエメイさんを助けたら、獣の槍が生まれないんだ？」
「――獣の槍の材料は鉄と、ジエメイさんなんだ」
そう言っても”過去のオレ”は、訳が分からないという顔をしている。”過去のオレ”はギリョウさんから、まだ人身御供の話を聞いていない。”ジエメイさんが材料”と言われてもピンと来ないんだ。獣の槍の材料が人だなんて信じたくないのだろう。そうだとすれば獣の槍の存在は、ジエメイさんの死を表しているのだから。
「獣の槍を生むために、オレはジエメイさんを助けちゃいけない」
「そんな事を言われたって、ジエメイさんを見捨てられる訳ないだろ……！」
そうだろう。その通りだ。オレと”過去のオレ”の違いは、獣の槍が生まれなかった世界を体験したか否かにある。オヤジが法衣じゃなくてスーツを着ていて、寺の住家じゃなくて立派な一軒家に住んでいる。そんな似ているようで違う世界に迷い込んだオレは、その世界に違和感を覚えていた……あの世界はオレのいるべき世界じゃない。

ただオレはジエメイさんの提案に便乗しただけで、こっちの世界に戻りたかっただけなのかも知れない。
その時、ガタリと音がした。見るとジエメイさんが、扉から顔を出している。まだ生きているジエメイさんだ。オレ達に見つかったと分かると、ジエメイさんは扉の隙間から姿を現す。剣造りに使う小屋の方からは、ゴンッゴンッと物を叩く音が聞こえていた。あれはギリョウさんが拳で石を叩いている音だとオレは知っている。急がないと、ギリョウさんの手がダメになってしまう。
「蒼月……私は自身の果たすべき役割を知りました」
穏やかな表情でジエメイさんは言う。さっきの会話を聞かれていたんだ。ジエメイさんは獣の槍なんて知らないけれど気付いているに違いない。すでにジエメイさんは”髪の毛を炉に捧げる”という前例を知っているのだから。それに気付いた”過去のオレ”はジエメイさんを止めようとしていた。だけどオレは、姉ちゃんの剣を抜いて立ち塞がる。
「ここは通せないんだよ……!」
「ばっきゃろー! ジエメイさんが死ななくたって良いじゃないかよー!!」
”過去のオレ”も姉ちゃんの剣を抜いた。互いの白い剣を打ち合わせると、”過去のオレ”が押し負ける。獣の槍の使い手だった”過去のオレ”を吹き飛ばした。オレの髪がザワザワと伸びて、白い剣が震える。これまでオレに応えてくれなかった姉ちゃんの剣が、オレを使い手として認めていた。
「おまえは、姉ちゃんの剣を使えるのか!?」
「ああ、この剣が教えてくれた。これは人を殺すための剣だ。だから人を殺す意思のある奴にしか使えない」
獣の槍が生まれる時よりも昔に、干将という造剣の名工によって造られた。彼の妻は神の供物として身を炉に捧げ、雄を表す短剣の〈干将〉と、雌を表す長剣の〈莫邪〉が造られた。〈干将〉は黒んでいて亀甲模様があり、〈莫邪〉は薄く曇ったように見えるという。そして、この剣は〈莫邪〉（ばくや）、それが姉ちゃんの剣の名前だ。

「人を殺す意思って……おまえはオレを殺すつもりなのか？」
「そうじゃない……オレが殺すのはジエメイさんだ」
ジエメイさんが死ぬと分かっていながら、ここで”過去のオレ”を足止めしている。オレの手で命を奪う訳ではないけれど、そこには確かに殺意があった……悪意があった。それでも世界を元に戻したい。獣の槍が生まれなければ、白面の者を撃退する事はできないんだ。
ズドォン！
目の前に雷が落ちる。思わず目を閉じた一瞬の内に、”過去のオレ”の姿が消えた。剣造りに使う小屋の方を見ると、”過去のオレ〃の背中が見える。”過去のオレ”を追おうとしたものの、”過去のシャガクシャ”が立ち塞がった。こっちのシャガクシャは……アクビをしていた。見ているだけで、手を出す気はなさそうだ。
「”獣の槍が生まれなかった世界”のうしおだか何だか知らねーが、気に入らねーのよ。”人を殺してほしくない”っつったのは、おめーだろうが」
「獣の槍が生まれなくちゃ、たくさんの人が死ぬんだ……！」
「はははははっ、ニンゲンどもが何人死のうと知ったこっちゃねーな！　わしは化物だぜ？　あのクソ忌々しい槍が生まれないってんなら、わしにとっちゃ都合がいい話よ！」
”過去のシャガクシャ”が襲いかかり、オレは剣を振った。”過去のオレ”は剣造りの小屋へ入って行く。だけど、すぐに”過去のオレ”の悲鳴が聞こえた。その声でジエメイさんが死んだと知った。するとオレの体から力が抜けて行く。ジエメイさんが死んだ事で、剣を扱う資格がなくなった。そうして姉ちゃんの剣は沈黙する。抗う力を失ったオレは、シャガクシャに殴り飛ばされた。ああ、痛いなぁ……。
ジエメイさんが身を投げた炉から、ギリョウさんは鉄を取り出す。そして剣を打ち始めた。やがてギリョウさんは柄と化し、剣のような刀身の槍となる。これが獣の槍だ。槍は屋根を突き破って、どこかへ飛んで行った。残されたのはオレとシャガクシャ、そして”過去のオ

レ”と”過去のシャガクシャ”の４人だ……いや、それと時逆時順と幽霊になったジエメイさんもいる。
「これより時の紐を順にたぐりて、あなたの来た時に参りましょう」
「……オレは行かない。この世界は、オレの世界じゃないからな」
　オレはジエメイさん達から離れる。こっちの記憶がある理由は分からないけれど、オレの体は”獣の槍が生まれなかった世界”の蒼月潮だ。未来に帰るのは、”過去のオレ”の役割だろう。みんなの下に帰れないのは寂しいけれど、オレの代わりに”過去のオレ”が帰るから問題はない。”過去のオレ”には、オレのような人殺しになって欲しくないな。
「わかりました。御武運を……」
　悲しそうにジエメイさんは言う。だけど、それだけだ。オレを説得する様子はなかった。御武運を……って事は、この後オレは何かと戦うのか。死ぬのかも知れない。きっと、これは歴史通りの出来事だったのだろう。そうじゃなきゃ”未来の蒼月潮を乗っ取ったオレ”なんて物に気付ける訳がない。
「おまえは……それでいいのかよ……！」
「ジエメイさんを殺した罪はオレが負う。当たり前だろ」
「うしお～～、長飛丸～～、行くぞ～～」
　時逆と時順の力に”過去のオレ”が包まれる。そしてジエメイさんと共に、その場から消えた。未来に帰ったんだ……オレは何所へ帰れば良いのか。どうしようもなくなって、胸に穴が開いたような気分になる。手に持ったままだった姉ちゃんの剣を撫でた。これを”過去のオレ”に渡さなかったのは、未来に対する心残りのせいかな……。
「おまえは未来に帰らなくて良かったのかよ」
「うーつけ者が！　わしはおまえに取り憑いてんだぜ！」
　シャガクシャがオレの肩に乗る。まー、こいつと一緒なら何とかなるさ。バケモノのくせにあったけぇ……こいつにならオレを食わせてやってもいいかも知れない。そう思いつつオレは小屋から外へ出る。獣の槍が造られている間に、外は明るくなっていた。さて、どう

するか。世界は広大だ。

辺りを見渡した視界に、人影が映った。人がいた……白面に滅ぼされた都の生き残りか？　だったら大変だ。助けてあげないと。さっそく、やる事ができた。その人に向かってオレは走る。だけど違和感を覚えた。まるで長旅をしてきたような格好だ。旅人なのか？

「こんにちはー！　旅の人？」

「ああ……珍しい組み合わせだ。人と……妖か」

「あんたシャガクシャが見えるのか？」

「シャガクシャ？　その妖の名はシャガクシャと言うのか？」

「ああ、そうだけど」

「懐かしい名前を聞いたものだと思ってな……」

旅人らしい人は、マントを羽織っていた。そのマントが風にめくられる。すると右肩にある大きな傷口が見えた。今にも腕が千切れそうだ。だけど血は流れていないし、この人も平気そうにしている。最近じゃなくて、昔に負った傷なのかも知れない。こんな体で旅をするなんて大変だな。

「さきほど、この家から槍が飛び立った。あれはなにか知っているか？」

「獣の槍だよ。白面の者を倒すために飛び立ったんだ」

「……その話を詳しく聞かせてくれないか」

「いいよ。オレの家じゃないけど、あそこでおじさんも体を休めるといいよ」

「ああ……そうだな」

「オレの名前は蒼月潮。こっちの妖怪はシャガクシャ。おじさんは？」

「さて、な。ずいぶんと昔の事で名前は忘れてしまった」

そういえばシャガクシャが静かだ。なぜかシャガクシャはおじさんを見て、難しそうな顔をしていた。どうしたんだ、あいつ？　オレはジエメイさん達の家におじさんを案内して、これまでの事を話す。そうしていると、いつの間にか、未来から来た事も全て話していた。

おじさんは嫌な顔もせず、オレの話を聞いてくれている。そうしてオレの話を聞いたおじさんは考え込んだ後、口を開いた。
「さきほど名前を忘れたと言ったな。今、思い出した。シャガクシャだ――かつて私はシャガクシャと呼ばれていた」
今度はおじさんの話を聞く。それは白面の者の誕生に関わる話だった。白面の者はおじさんの体から生まれたんだ。白面の者を生んだせいで、おじさんは不死の存在になっている。大切にしていた姉弟を白面の者に殺されたおじさんは、何百年もかけて白面の者を追っていた。そっか……オレのやれる事はあるんだ。
「おじさん、オレも連れて行ってくれないか？」
「自分で身を守れるのならば、好きにするといい」

それからオレは、おじさんの旅に付いて回った。姉ちゃんの剣はオレに応えてくれないけれど、シャガクシャのおかげで何とかなっている。その途中、白面の者に滅ぼされた都で〈干将〉を見つけた。黒い短剣だった。偶然とは思えないから、姉ちゃんの剣に引かれたのかも知れない。
それから間もなく、オレは重傷を負った。オレの旅に限界がきた。おじさんは不死の存在だけれど、オレは普通の人間だ。オレの体は、おじさんに付いて行けなくなった。白面の者を追うおじさんに置いて行かれて、オレは諦める。もう、いいだろう。オレは十分に生きた。少し疲れてしまった。
「シャガクシャ、ずいぶんと待たせちまったな……」
「けっ、今さらおめーを食ったって、腹の足しにもならねーや」
「そうか……ははっ、悪いな」
とても遠い所へ来てしまった。オレを知っている人なんて誰も居なかった。故郷で死ねない事が、こんなに辛い事だなんて思わなかった。だけどシャガクシャが側に居るから怖くはない。ちゃんと母ちゃんに会う事はできなかったな……まぁ、仕方ないか。シャガクシャはオレを食ってくれるかな。そう思いながらオレは、意識を手放した。

白面の使いは正体をあらわす

ジエメイさんが命を落として、ギリョウさんが剣を打ち、獣の槍が生まれた。そこから時順という妖怪の案内で、獣の槍と白面の者の歴史を辿る。獣の槍は現代でいう中国の奥地に封じられ、白面の者は日本列島を支える要の柱で眠りについた。その白面の者を封じているのが”お役目”で、オレの母ちゃんが3代目である事を知る。

オレは現代へ戻ってきた。時逆と時順によると10ヶ月後に、最後の戦いの通達が来るらしい。ジエメイさんと時逆時順が去った後、オレは洞窟の奥に建てられた社を見上げた。あそこには得体の知れない化物……白面の者の欠片と、白銀の西洋甲冑がある。だけど獣の槍が壊れ、姉ちゃんの剣も使えないオレは何もできなかった。

オレと姉ちゃんは光覇明宗の総本山へ連行される。北海道で飛行機に乗る際、天候が急に悪化して雪が降り始めた。そのままだったら欠航になっていただろう。だけど直ぐに雪は止み、飛行機が離陸可能な状態になった。聞いた話によると雪女が暴れたものの、光覇明宗の法力僧によって封印されたらしい。

飛行機で東京に着くと、空港で待っていた僧侶がオヤジに話しかける。それによると光覇明宗の総本山が”白面の分身”の襲撃を受けているらしい。オレと姉ちゃんと、オヤジと伝承候補者3人は、ヘリコプターに乗って総本山へ向かう事になる。オレと姉ちゃんの押送のために、伝承候補者4名のうち3名が同行していたのは幸いだった。

「総本山の結界が弱っている時を狙われたか、あるいは獣の槍が使えなくなったと知って動いたか……その両方か」

オレと姉ちゃんは気まずかった。総本山の結界を壊したのは、裏切った僧侶の投げた獣の槍に違いない。獣の槍が使えないのは、暴走するオレを止めるために壊されたからだ。おまけに言うと、剣の音色で総本山にいた法力僧の数は減らされている。”白面の分身”が光覇明宗の総本山を襲撃している原因は、だいたいオレ達のせいなんじゃないか……？

「オヤジ、〝白面の分身〟って何だ？　前に言ってた〝白面の剣〟と違うものなのか？」
「〝白面の分身〟は白面から生まれた妖の事だろう。わたしらは白面に組する人や妖、それに白面の分身も会わせて〝白面の使い〟と呼んでいる。〝白面の剣〟は麻子ちゃんの持っている、その剣を持つ者のことだ」
「なんで剣を持ってるだけで、そいつを〝白面の剣〟だなんて決め付けるんだよ」
「ふむ……麻子ちゃんは、その剣を使うために必要な条件は知っているのかな？」
「えっ、えっと……」
　姉ちゃんはオヤジの問いに応えない。だけどオレは古代で、過去のオレから聞いていた。あの剣を使うために必要な条件は、人を殺す意思だ。それは姉ちゃんにとって、他人に言いたくない事なのだろう。そうしている間にオレ達はヘリコプターに乗り込む。ヘリコプターの爆音で会話の続きは出来なくなった。
　光覇明宗の総本山に近付くと、蛇のように長い化物が見えた。法力で形作られた円盤に動きを止められ、上空で止まったまま動かない。だけど化物は無傷だ。こんな時に獣の槍があれば……と思うけれど、そもそもオレと姉ちゃんは犯罪者だ。勝手に動くと迷惑がかかる。そこへ小学生くらいの子供がやってきた。
「お兄さん、蒼月潮っていうんでしょ？」
「そうだけど。こんな所にいたら危ないぞ」
「危ないのはお兄さんの方だよ。獣の槍がないと何もできないんでしょ？」
「ぐぅ……たしかに……！」
「でも安心しなよ。もう、お兄さんは妖と戦わなくていいんだ」
「たしかに……！」
　獣の槍が壊れているから、そもそも戦えない。妖と戦わなくても良いのならば、それを喜べた。だけど戦えないままじゃいられない。妖は一方的に襲いかかって来る。それに白面の者を封印する〝お役目

”から母ちゃんを解放するためには、白面の者を倒さなければならなかった。代わりに戦える方と言えば……。そういえば、どうすれば法力って使えるんだろうな？

「九印、僕が主役のパーティーが始まるよ。それを台無しにしちゃう友だちと、遊んでやってよ」

「そうしよう」

子供の側に妖怪が現れ、どこかへ飛んで行く。その姿を見て思い出したけどシャガクシャがいない。まさか、また総本山の結界に引っかかってるのか？　辺りを見回してシャガクシャを探していると、”白面の分身”が動いた。その体を捕らえていた円盤が弾かれ、法力僧たちの動きを止める。法力で形作られた円盤が、みんなの体を捕らえていた。

――るんっ、と姉ちゃんの剣が鳴いた

クルクルと回る剣が、法力の円盤を破壊する。姉ちゃんは自由になった。オレの体を捕らえていた円盤も破壊される。さっきの子供も大きな鎌を出し、円盤を破壊していた。だけど他の法力僧たちは円盤に捕まったままだ。これを破壊するのはオレが思っているよりも難しいのか？　このままじゃ”白面の分身”によって一方的な攻撃を受ける。と思っていたら、その攻撃は結界に防がれた。

「結界!?　ぬうう、誰だァァ!?」

「誰だとはつれない言葉ですね、白面よ……三百年も一緒であった日崎御角をお忘れかい？」

白い着物を着た女性が、”白面の分身”の攻撃を結界で防ぐ。”白面の分身”によると、あの白い女性は白面の者を封じていた2代目のお役目らしい。母ちゃんの前代だ。その結界に”白面の分身”は、触角やカマキリのような鎌を減り込ませた。このままじゃ不味いんじゃないか？

「姉ちゃん、あの円盤みたいなのを壊せるんだろ？　だったら他の人も……」

「でっ、でも、勝手に動き回ったらダメなんじゃないかな？」

姉ちゃんの視線はチラチラと法力僧……ではなく、さっきの子供に

向けられる。動けるのはオレ達だけなんだから緊急事態だ。”白面の分身”に目を戻すと、2代目お役目の女性が結界を”白面の分身”に叩き込んでいた。光り輝く結界が折り畳まれて、”白面の分身”の口から体内へ入り込む。すると”白面の分身”は動きを止め、お役目の女性は力を失って倒れた。

「弱いお兄さんの代わりに、僕が白面の者と戦ってあげるよ」

そう言って子供は駆け出した。子供の持っている大鎌が、”白面の分身”を斬り裂く。すると”白面の分身”は大爆発を起こした。たったの一撃で、”白面の分身”を倒してしまったように見える。みんなの体を捕らえていた円盤が消え、法力僧たちはお役目の女性に駆けよった。だけど、みんなに見守られる中、お役目様は息絶える。

「僧上さん、僕の活躍見てくれた？　▪もう獣の槍になんて拘らなくていいんだよ。僕とエレザールの鎌が白面を倒すんだ」

「あれが槍の伝承候補者のキリオか！」

「見たか!?　あの妖を一撃で切り裂いた……」

「あれがエレザールの鎌か!?」

僧侶たちが子供を誉め称える。その名をキリオといった。どこかで聞いた覚えのある名前のような気がするな……姉ちゃんの弟じゃなかったか？　子供は僧正（そうじょう）に連れて行かれ、オレと姉ちゃんはオヤジに連れて行かれる。総本山を襲撃された上に、前代のお役目が死んだ今、オレと姉ちゃんに構っている暇はなかった。

そんな訳でオレ達の処分は後回しにされ、総本山で軟禁されている。だけど数日後、僧侶によって総本山から連れ出された。コソコソと隠れて移動する様子に不審を覚える。総本山を出ると車に乗せられた。なぜかメイド服を着た人が乗っていて、オレは驚く。なんでメイドさん？

「うっ、うしお！　逃げて！」

姉ちゃんの声が後ろから聞こえる。その目の前でメイドさんのスカートが捲れた。その中に足はなく、液体が溢れ出る。足が、人間じゃない!?　その液体はオレの口に飛び込み、体の中へ入って行った。姉ちゃんが剣で液体を斬ったけれど、液体のせいか擦り抜ける。

メイドさんの全身がオレの中に入ると、体の自由が奪われた。
『アサコの殿方の中に入るのは心苦しいのですが……』
「ずっ、ずるい！　うしおの体から出て行って！」
『申し訳ありません。キリオからアサコが逃げ出さぬようにと……』
「わっ、わたしがうしおと一つになりたかったのに……」
　姉ちゃんが錯乱している。

　オレが人質になっているせいで、姉ちゃんは逆らえない。オレと姉ちゃんは車に乗せられた。連れて行かれた先は森の中だ。車から降りて小道を進み、森の奥へ進んで行く。すると木々に遮られていた視界が開けた。広場にキリオと僧侶たちがいる。それと奥に、しめ縄を巻かれた大きな岩があった。
「我々、光覇明宗の使命は”獣の槍”を護ることなのです。しかし、その獣の槍は今や……」
　僧侶の視線の先に木箱がある。たぶん、あの木箱の中にあるのは真っ二つになった獣の槍だ。光覇明宗の使命に関わる大事な槍を、どうやって持ち出したんだ？　もしかするとオレが思っている以上に、光覇明宗という組織は混乱しているのか。この僧侶たちも僧正の命令ではなく、独断で行動しているらしい。
「上の方々は獣の槍の伝承に固執する余り、目を曇らせていらっしゃる。だから我々は獣の槍を、この世から葬り去らねばなりません」
　獣の槍はジエメイさんとギリョウさんの命がかかっている。それを壊すなんて許せない。槍を壊してしまったオレや姉ちゃんが言うのも何だけど……思えばギリョウさんには悪い事をした。槍に魂を食われて獣と化した時に、オレはギリョウさんと会っている。姉ちゃんの剣に斬られて悲鳴を上げてたなぁ……。
「麻子殿の”白面の剣”も、”獣の槍”と同じ事です。強引に”白面の剣”を滅しようとした結果、多くの僧が命を落としました。それに”白面の剣”も使い手の魂を蝕みます。”白面の剣”を持ち続ける事は、麻子殿にとっても良い事ではありません」
「これからは使い手を選び、その使い手の魂を蝕む獣の槍ではなく、こ

のエレザールの鎌を持ち、皆と共に戦うのです」
　そんな事は認められない。だけどメイドさんに乗っ取られたオレの体は、言う事を聞かなかった。キリオが指示をして、姉ちゃんに剣を持って来させる……あいつら何で、姉ちゃんの剣に自分で触れようとしないんだ？　まるで姉ちゃん以外の人間が触れる事を、恐れているように見える。
「この”白面の剣”は１０００年以上も前に、今でいう中国で造られたんだ。干将って名前の人が髪や爪を炉に入れて、この〈莫邪〉を造り出した。そのとき一緒に造られた〈干将〉と対になっているから、粉々になっても元に戻ってしまう。だけどね……」
　キリオは黒い短剣を振り下ろした。それだけで黒い短剣と、白い長剣は砕け散る。姉ちゃんの剣は壊れて動かなくなった。姉ちゃんに命じられて散った時のように、元に戻る様子はない。その光景を見て、姉ちゃんは怯えていた。次は獣の槍の番だ。その光景をオレは見ている事しか出来ない。
「獣の槍は溶かしても、お兄さんが呼べば復活してしまう。今は折れている獣の槍も、そうなったら元通りになっちゃうからね。だから獣の槍を破壊する一番の方法は、獣の槍を形作っている力場ごと消滅させることなんだ」
　姉ちゃんの「お母様」に獣の槍を溶かされかけた事を思い出す。まさか、あれは本気で槍を溶かそうとしていたのか。いいや、「まさか」というよりは……「やっぱり」というべきか。そういえば「お母様」の姿が見当たらない。この件の黒幕は「お母様」なんじゃないか？　それをキリオに尋ねようと思ったけれど、メイドさんに体を乗っ取られているせいで口は動かなかった。
「お兄さんは”冥界の門”って知ってるかな？　この国のあっちこっちにある別の世界への入口なんだ。化物や彷徨っている人間の魂を吸い込んじゃうんだって。ここにも一つあるんだよ？」
　奥にあった大きな岩を、僧侶たちが引っ張って転がした。その岩の下に大穴が見える。そこへ近付くとキリオは、”獣の槍”と”剣の破片”を投げ込んだ。”冥界の門”とやらに、獣の槍と姉ちゃんの剣は

落ちて行く。オレは心の中で獣の槍を呼んだけれど、槍が戻ってくる事はなかった。
「安心しなよ、お兄さん。これでソレもお兄さんも、魂を蝕まれる事はなくなるんだ」
　もしかするとキリオは、姉ちゃんを助けるために剣を壊したんじゃないかと思ってしまう。だけどキリオの言葉は軽く、まるで他人の用意した台本のセリフを棒読みしているようだった。なによりも姉ちゃんの事を〝ソレ〟と物のように呼んでいる。こんな奴を信じられるか！
　その時、後ろから楽器の音が聞こえる。僧侶たちの視線が、オレの背後に集まった。なんだ？　オレの後ろに「なにか」いる？　オレの体が勝手に動き、背後を見る。そこには「お母様」がいた。「お母様」は切り株に腰を下ろし、大きなヴァイオリン……というかチェロを弾いている。
「獣の槍を送る……葬送曲よ。よくやったわね、キリオ……」
「ママ！」
「キリオ殿、その方は……？」
「うん、ママだよ。ずーっと僕の側にいてくれて、獣の槍を壊すことも教えてくれたんだよ」
「獣の槍を……？」
「我々はそんな事は聞いておりませんが……」
「……むかーし、むかーし、「白面の者」という悪い妖がおりました」
　戸惑う僧侶たちの声に、オヤジの声が混じる。「お母様」と思ったら、次はオヤジか。ここに繋がっている小道から姿を見せたオヤジは、切り株に座る「お母様」と向き合う。そしてオヤジの長い話が始まった……それを聞いていると、いつの間にか近付いていた姉ちゃんがオレの体を引っ張る。オレの体を支配しているメイドさんは不思議そうに思いつつも、特に逆らう事なく引っ張られていた。
「うしおよく見ろよ……これが１５年前より引狭に取り入り、エレザールの鎌を造り、キリオを育てた者……獣の槍〝破壊〟計画の立て役者だ！　現れよ、化身！」

「あれは千宝輪、最大の法術!!」
――巍四裏（ぎしり）！
輪のような法具が「お母様」に打つかる。「お母様」の頭部を捉えていた法具は、歯で食い止められた。その衝撃で「お母様」の黒い服が消し飛ぶ。「お母様」が化物の正体を現し、その尻から一本の尾が生えた。姉ちゃんとキリオの「お母様」が”白面の使い”だったんだ。
斗和子が僧侶たちを殺し始める。オヤジは斗和子の反撃で、大怪我を負っていた。獣の槍も姉ちゃんの剣も失われた今、斗和子と戦う力を持つ者はいない。キリオは「お母様」が”白面の使い”だった事を知らなかったらしく、呆然としている。姉ちゃんはオレと共に森の中へ身を隠そうとしていた……もしかして姉ちゃんは、「お母様」の正体を知っていたのか？
「ママは、ずうっと僕をだましてたの……？」
キリオが「お母様」に尋ねる。前に会った時は研究のために見境がない所もあったけれど、優しい「お母様」だった。あれは演技だったのか？　疲れていたオレを抱きしめて、子守唄を唄ってくれたじゃないか。あの思いが、優しさが、偽りだったと信じたくはなかった。それじゃあ、姉ちゃんの家族が壊れちまう。
「寒い日にコートをかけてくれたのも……」
『好きなハンバーグを作ってあげたわね』
「夜、寝る時に本を読んでくれたのも……」
『ほつれた服も、つくろってあげたわ』
『ぜーんぶ、あなたのためじゃないわねえ』
すべては獣の槍を壊すためだったと斗和子は言う。すがるキリオを、斗和子はなぶった。そんなキリオを見ていると、体が勝手に動く。オレの体を引き止める、姉ちゃんの手を振り払った。オレの体を乗っ取っているメイドさんが、斗和子の前に飛び出す。キリオの前に立ち、キリオを庇った。そうして壊れたように泣くキリオを抱きしめ

る。
『あら、獣の槍の正統伝承者じゃない。そんな所に隠れていたの。あなたも死になさい……絶望しながら』
『私はメイ・ホー、そのような事はさせませんわ。私達は、キリオを守るために創られたんですもの』
『ああ、引狭の造った実験体どもの……子供の体に入り込んでいるのね。それならば伝承者ともども、仲良く殺してあげる』
キリオを庇うオレに、斗和子の尾が振るわれる。オレの体はキリオを抱えて跳ぶけれど、回避が間に合うとは思えない。オレとキリオの体を、あの尾は容易に切り裂くだろう。さらにオレを庇うためか、そこへ姉ちゃんも飛び込んだ。斗和子の尾が、姉ちゃんに迫る。
「うしお！」
ズガァン
地面を抉るような音が背後から聞こえた。オレを庇おうとした姉ちゃんと、オレの体が衝突する。痛みにもだえるオレの心に構わず、オレの体はキリオを抱えたまま、大きな岩の背後へ回った。オレは生きている。助かったのか？　いったい何が起こった。オレの体の視界には、歪（いびつ）に折れ曲がった姉ちゃんの体が映っていた。
『しぶとい肉人形だこと……剣が失われた今、貴方も生かしておく理由がないわねぇ』
斗和子は姉ちゃんの事を娘と思ってない。こいつは姉ちゃんの事も利用してたってのか？　姉ちゃんを助けないと……そう思ってオレは体を動かそうと試みる。メイドさんに乗っ取られているから無駄かも知れない。だけど今、姉ちゃんを助ける事ができるのはオレだけだ。
そうだ……伝承候補者の社綱さんを思い出せ。社綱さんは婢妖に乗っ取られても、自らの意思で死を選んだ。何百と知れない婢妖に取り憑かれた社綱さんが動けて、たった一体のメイドさんに取り憑かれているオレが動けないはずがない。オレは無理矢理に体を動かし、四肢から肉の千切れる音がした。
『この方……まだ意識が？』

「おい、メイ・ホーって名前だったな。このままじゃオレ達は斗和子に殺される。キリオを助けたいんだったら、オレに力を貸せ」
『人間ごときに、なにが出来ると……大人しくキリオの盾におなりなさい！』
「嫌だね……大人しく死ぬのを待っていられるかよ！」
　斗和子に狙われているし、オレの中にいるメイドさんも協力してくれない。死の危険がある今、盾として使えるオレの体をメイドさんが手放す理由はなかった。その時、姉ちゃんの体がズズズと動く。何事かと思って見ると、その先に穴があった。”折れた槍”と”砕け散った剣”が落ちた”冥界の門”だ。姉ちゃんの体が、穴に引き寄せられている。
「うおおおおお!!」
『おやめなさい！　ひっ、ひいい。吸い込まれる！』
　メイドさんの抵抗に逆らいつつ、姉ちゃんに向かって駆ける。するとメイドさんはオレの体から離れ、キリオの方へ跳んだ。姉ちゃんの体が穴へ落ちる前に、オレは捕まえる。だけど姉ちゃんの体は見えない力で、穴に引っ張られていた。オレの体は何ともない。まるで姉ちゃんだけが、見えない手に捕まっているかのようだ。たしかキリオは穴を「化物や彷徨っている人間の魂を吸い込んじゃう」と言っていた。姉ちゃんの人間じゃない部分が、穴に吸い込まれているのか？
『ほほほほ、そのまま”獣の槍”と同じように落ちるがいい……と言いたい所だけれど、ここは確実に正当伝承者を仕留めておきたいわねぇ』
　斗和子の尾が振るわれる。姉ちゃんを捕まえているため、回避する事はできない……この手を放すなんて選択肢はなしだ。だけど、一つだけ方法はある。”冥界の門”に吸い込まれる力を使えば回避できるかも知れない。もちろん、その後は穴の底へ直行だ。当たれば死ぬ、避けても死ぬ。だったらオレは……姉ちゃんの体を抱えたまま跳んだ。
　姉ちゃんの体が、穴に吸い込まれる。それに釣られてオレも穴に落ちた。斗和子の尾は、オレの足に浅い傷を付ける。だけど、それだけ

だ。圧し折れた姉ちゃんの体を抱きしめる。そんなオレの体を死の予感が襲った。肌を寒気が這いずる。こんな高さを落ちて、無事に着地できるとは思えなかった。

「なにやってんだよ！　うしおー！」

シャガクシャの声が聞こえる。見上げるとシャガクシャが上空で、妖怪と共にいた。居ないと思ったら、あんな所にいたのか。近くにいる妖怪は九印という、キリオの側にいた奴だ。あいつと戦っていたらしい。そうやって見る間に穴が小さくなり、地上は遠くなって行く。オレと姉ちゃんは、暗い穴の底へ落ちて行った。悪いな、シャガクシャ。お前に食われてやれなくて……

造剣の名工は剣を打った

オレは”冥界の門”に落ちた。だけど生きているらしい。目覚めると、建物の中で寝かされていた。背中には固い地面の感触があって、胸にはボロボロの布が掛けられている。床も壁も土造りで、まるで古代のような家屋だった。そしてオレの近くに、だれか座っている。

「うっ、うしお！　よかった……」

姉ちゃんの声が聞こえて、起こそうとしていた体を押し倒された。”ぎゅっ”と抱きしめられる。小さくて”かわいい”姉ちゃんに抱きしめられて、オレは一気に目が覚めた……初めて会った頃の姉ちゃんは近付く事すら怖がってたけど、こうやってオレを受け入れてくれるようになったなぁ……。

「ここは……？　たしかオレは穴に落ちて……」

「ここは冥界だ。”あの世”から”この世”へ、君達は落ちてきた」

老人の声が聞こえる、見ると焚き火の向こうに、見知らぬ老人が座っていた。肉を貫いた鉄串が、焚き火の側に突き立てられている。それと、斗和子の尻尾で全身の骨を折られていたはずの姉ちゃんは、見る限り元気になっていた。あんな大怪我も、すでに治っているらしい。すごいな

「あんたは……？」

「君達を拾った冥界の亡者じゃよ。こう見えて、わしも死んでおる」

「そうなのか、ありがとう！　おかげで助かったよ。オレは蒼月潮って言うんだ」

「わしは剣造りを生業（なりわい）としている干将という者じゃ」

ここはオレ達で言う”あの世”なのか？　とにかく老人は、オレを助けてくれたらしい。鬼や妖怪ではなく、見る限りは人間のようだ。それにしても〈干将〉って名前は、気を失う前に聞いた覚えがある。キリオによると干将という人は、姉ちゃんの剣を造った人らしい。ここで会ったのが偶然とは思えない。いいや、それよりも……、

「おじいさん、ここって冥界なんだよな？　オレ達は地上に戻らなく

ちゃならないんだ」
　怪我を負っていたオヤジや、光覇明宗の僧侶たちは如何なったのか。キリオとメイドさんは無事なのか。シャガクシャは……心配ないか。〝白面の使い〟もとい斗和子は撃退できたのか？　もしも出来なかったとしたら、みんなが危ない。今すぐにでも戻って……だけど、そうして戻って戦う力を持たないオレに、なにが出来るんだ？
「そうじゃの……君は生きている人間じゃ。こちらの食べ物を口に入れなければ、〝あちら〟へ戻るのは不可能ではない」
「こっちの食べ物を食べちゃいけないのか？」
「どんなに腹が空いても水も含めて、こちらの世界の物を口に入れてはならん。この世界の物を身の内に入れれば、あちらの世界へ君は帰れなくなる」
「そうなのか……じゃあ、腹が空く前に帰らないと。おじいさんオレは、どうやったら地上に帰れるんだ？」
「まあ、待て。まだ時間はある。〝君〟が食べても問題のない物もある。半日ほど、わしの用事に付き合ってくれんか？」
「ごめん、おじいさん。オレたち、急いで帰らないと行けないんだ」
「わしの用事というのは、この槍の事じゃが……」
　老人に指し示された場所にあったのは、真っ二つになった獣の槍だった。姉ちゃんの剣だった白黒の欠片も置いてある。手に取って触っても、槍に反応はなかった。でも、よかった。壊れたとは言え、これは光覇明宗に返さなくちゃならない。老人が拾ってくれたんだ。
「拾ってくれて、ありがと。これ壊れてるけど大切な物なんだ」
「そうか。ならば、この槍を打ち直してやろう。その代わりとして、こちらの剣の破片を貰いたい」
「おじいさんは、獣の槍を直せるのか⁉」
「ああ。まだ、この槍は生きておる。たとえ刀身を断たれても、その魂まで死んではおらん」
　だけど、老人の話に乗っていいものか。〝オレと姉ちゃん〟が食べても問題のない物なんて、都合の良いものがあるのか？　老人は本当に槍を直せるのか。槍を直せる可能性があるのか。今すぐ地上へ

戻った方がいいんじゃないか？　その地上へ戻る方法をオレは知らない……そもそも老人が欲している物は、姉ちゃんの剣だ。
「姉ちゃんは、剣をおじいさんにやっても良いのか？」
「うっ、うん。その子は、もう死んでるんだって……」
「そっか……ところで姉ちゃん、地上に帰る方法って分かるか？」
「わっ、わかんない……」
　いつものようにオドオドした様子で、目を逸らしながら姉ちゃんは言う。知らないという。だけど、その声の調子から察するに姉ちゃんは「知っている」。知っているのに「知らない」とウソを吐いたのか？
　そうする理由があるのかも知れない。なぜウソを吐いたのか、教えて欲しかった。
「おじいさんの話を断ったとしても、帰る方法は教えてくれるのか？」
「良いぞ。この近くに〝あちら〟へ繋がる道がある。妖や死人では出口まで辿りつけぬが、生きている人間であれば辿りつけるじゃろう」
　帰る方法を、あっさりと教えてくれた。オレの考え過ぎか。だけど出口を教えてくれたのに、このまま帰るというのは老人に悪い気がする。それに獣の槍が直ればオレも戦える。地上に帰った後で、ここに戻って来れるとは思えない。答えを先払いされたんだ。その信頼にオレも応えたいと思った。
「分かった。ここで槍が直るまで待つ……その槍は昔、ある人が其の身に代えて造った槍なんだ。その槍と一緒にオレは戦いたい。だから頼むよ」
「任せるがいい。槍ではなくなるかも知れぬが、わしの意地にかけて直そう」
　そう言って老人は、白黒の欠片を布に包み、壊れた槍を持って立ち上がった。これから剣造りの小屋で作業を行うので、ここで待っているように言われる。外は危険なので出歩かない方が良いらしい。作業が終わる半日後まで、この小さな小屋の中で過ごすのか。だけど1人じゃない。姉ちゃんと一緒だ。
「おっ、お腹へって無いかな？　これ、食べてみたら……」
　そう言って姉ちゃんが差し出したのは、火で炙られた肉だった。お

いしそうだ。だけど食べても大丈夫なのか？　あの老人は”オレ”が食べても問題のない物と言っていた。そんな物が、こちらの世界に存在するのか？　これを食べたら帰れなくなるかも知れない。そう思うと口にできなかった。
「たっ、食べないの？　だっ、大丈夫だよ。この肉を穫ってきたのは私だから……」
「えっ？　この肉って姉ちゃんが？　じゃあ、これって何の肉なんだ？」
「えっ、えっと……うしおは黄泉の国って知ってる？」
「オヤジから聞いた覚えがあるけど、詳しい事は知らないな」
「こっ、この国の神様が、死んだ妻に会いに行く話だよ？」
　死んだ妻に会うために、夫が黄泉の国を訪れた。黄泉の国の扉越しに妻は帰るように言うけれど、夫は一目会いたいと頼み込む。すると妻は折れて、しばらく待っているように夫へ言った。だけど夫は待ち切れず、黄泉の国へ踏み入ってしまう。そこで腐った肉の塊と化した妻の姿を目にした夫は、悲鳴をあげて逃げ出した。
　正体を知られたと気付いた妻は、追っ手を放って夫を追う。すると夫は身に付けていた髪飾りを投げ、櫛を投げ、道端に生えていた”桃”を投げ、妻の追っ手を追い払った。そうして妻を振り切ると、最後は大きな岩で黄泉の国へ繋がる出入口を塞いでしまう……オレと姉ちゃんの落ちた”冥界の門”って、これの事なのか？
「そっ、その話に出てくる桃は魔物を払う力があるって……こっ、この肉が、その桃なの」
「えっ？　でも、肉は桃じゃないだろ？」
「もっ、桃は人間の体を表すこともあるの。だっ、だから大丈夫だよ？」
「そうなのか……」
　ちょっと意味が分からない。人の形をしている物には、不思議な力が宿るのだろうか？　分からないけれど、姉ちゃんを信じて食べてみようと思った。姉ちゃんから受け取った肉を食べて、オレは腹を満たす。おいしいとは言えない。なにを食っているのか分からなくなる

味だった。結局、この肉は何の肉だったのか。妖怪の肉かも知れないから、知らない方がいいのだろうか？
「うっ、うしお……おいしかった？」
「ああ……うん……」
「そっ、そっか……よかった」
オレの何とも言えない返事に、姉ちゃんは嬉しそうだ。おいしいとは言ってないんだけど……ウソを吐いたようで心苦しく思う。それからオレは、姉ちゃんと共に暇を潰した。それから何時間経ったのか分からないけれど、外から鉄を打つ音が聞こえ始める。獣の槍を打ち直しているのか。暇なので外へ出たいけれど、老人に外は危険だと言われている……あれ？　でも姉ちゃん、”肉を穫ってきた”って言ってたよな。今は姉ちゃんの剣も壊れているのに、そんな危険な場所から肉を穫ってきてくれたのか。

寝ていたオレは揺り起こされる。いつの間にか半日経っていた。起き上がったオレは、老人から剣を受け取る。なんで剣なのかと言うと獣の槍は、剣へ打ち直されていた。ちょっと大きめの鞘に納められた剣を手に取ると、その意思が流れ込む。ギリョウさんが帰ってきた。形は違うけれど、たしかに獣の槍は復活している。
そういえば獣の槍は元々、ギリョウさんによって剣として造られていた。それがギリョウさんと一体化する事で、刀身が剣のように大きな槍になったんだ。槍の時は柄が長かったけれど、剣になったので短くなっている。刃の届く範囲が小さくなったのか。距離に気を付ける必要がありそうだ。
老人の用事が終わったので、オレと姉ちゃんは地上へ繋がる道まで案内される。その道を通るために必要らしい松明を、老人から渡された。剣を打ったばかりだから休んだ方が良いんじゃないかと思ったけれど、休憩はオレが寝ている間に済ませたらしい。家屋の外へ出ると、ちょうど夜明けの時間だった。マンガのように巨大な太陽が空に昇っている。
地球から見える太陽と同じ物とは思えない。そっか……地球の地

下に、冥界がある訳じゃないんだ。「”冥界の門”は別の世界への入口」とキリオは言っていた。老人も”地上”と言わず、”あちらの世界”と言っていた。地球には”地球の太陽”があり、冥界には”冥界の太陽”があるのだろう。

家の周りに様々な剣が突き立てられている。老人によると結界のようなものらしい。たしかに剣群の外から奇怪な妖が、こちらの様子を探っていた。1匹や2匹ではなく、たくさんだ。老人によると妖の目的は、生きているオレの体だ。さっそく獣の槍もとい獣の剣の出番かと思ったら、老人が地面に刺さっている一振りの剣を抜いた。

「――去ね」

老人が剣を振ると斬撃が飛ぶ。それは妖たちを薙ぎ払った。地面でモゾモゾと動く妖たちが、その場から去って行く。老人は剣を収めると、前を歩いて先導を始めた……もしかして老人は、すごく強いのか？　そう思って聞いてみた。老人によると自身が強いのではなく、剣の力らしい。その剣も老人が造った物だ。やっぱり、この人が姉ちゃんの剣を造ったのだろうか。

「おじいさんは、白い剣を造った人なのか？　姉ちゃんの剣を造った人は”干将”だって、聞いた事があるんだ」

「ああ、その通りじゃ。あれは今から、１０００年以上も昔の話になるな」

老人は造剣の名工だった。名家から妻を迎え、夫婦の契りを結んでいた。ある時、王から名剣を鍛えよと命を受ける。だけど3年かかっても、特別な金鉄は炉の火に溶けなかった。このままでは王の怒りで身を滅ぼされてしまう。なんとか溶かす方法を探していた老人は、別の名工が妻と共に作業場へ赴いている事を突き止めた。

そこで老人も妻を連れて作業場へ赴く。そして髪や爪を炉に投げ入れる予定だった。だけど、そこで予定外の事が起きる。なんと思い詰めていた妻が、炉に身を投げ入れてしまった。これ以上時間をかければ王を怒らせてしまうと……呆然としている老人の目の前で炉が虹色に輝き、金鉄は溶け合う。妻が神に身を捧げて奇跡を起こしたの

だと悟った老人は、妻の決意を無駄にしないために、炉から取り出した鉄で剣を打った。
そうして雄剣である短剣の〈干将〉、雌剣である長剣の〈莫邪〉を造り上げる。自身の名前を付けた〈干将〉を手元に置き、妻の名を付けた〈莫邪〉を王に捧げた。だけど3年もかかった事に王は怒り、さらに密告で〈莫邪〉と対になる〈干将〉の存在を隠している事が露見してしまう。怒り狂った王は、老人の処刑を命じた。しかし、その時、
――るんっ、と妻の剣が鳴いた。
すると老人を処刑しようとしていた兵士が、自らの喉を突く。周囲の兵士たちも、同じ有様だった。女官たちも床や壁に頭を打ちつけ、あるいは素手で喉を掻きむしった。何ともなかったのは老人と王だけだ。老人の仕業だと思い込んだ王は、妻の剣で老人の首を刎ねようとする。しかし、王の全身は瞬く間に変わり果て、白い鎧となった。
『危ない所だったなー』
剣から聞こえたのは、聞き慣れた妻の声だった。妻が剣となっても、夫である自分を助けてくれた事を悟る。こうなれば地の果てへ逃げるしか無いと思った老人は、妻の剣を手に取ろうとした。だけど白い鎧は剣を持ったまま、老人の前から姿を消す。慌てて白い鎧を追った老人は、都に響き渡る剣の音色を耳にした。
すると都に住む人々が、自傷行為に及び始める。老人は白い鎧を追って、都を走り回った。そうして目にしたのは死体の数々だ。音色を聞いた者は死に至り、そうでない者は白い鎧に斬り殺されていた。老人の見知った人々も、白い鎧に殺し尽くされた。そんな非道な行いを目にして、老人は「なぜ殺すのか」と問いかける。
『ひひひ……だって、もう人間じゃないから、人を殺しても良いでしょう？』
白い鎧は妻の声で、そう言った。それを妻だと老人は信じられなかった。だけど妻は老人に、剣造りの名工だから契りを結んだ事を明かす。妻は器物へ魂を移し替える事を企み、より良い容れ物として、老人の造る剣となる事を選んだ。だから妻は炉に身を投じ、神に身を捧げたという。

狂人の戯言（たわごと）にしか思えない。妻は邪神に魂を売り渡し、魔物と化してしまったのだ。老人は隠し持っていた〈干将〉を、白い鎧へ向けた。だけど白い鎧は老人を斬り殺す事はなく、そのまま都を去る。老人は白い鎧を追って旅を始めたものの、不死の体を持っている訳でもない老人は、すぐに命を落としてしまった。

「まあ、そういう訳じゃ。それから１０００年の間、冥界で妻を待っていたのだが……昨日、とつぜん剣の欠片と共に、君達が空から降ってきた。ずいぶん待ったが、わしの下に妻は帰ってきてくれたようじゃな」

安心したように老人は言う。多くの人を殺した剣だけれど、老人は未だに妻と思っているんだ。そういえば白い剣の欠片に、黒い剣の欠片が混じって、白黒になっていた。対になっていた剣が、一つになったんだ。もう壊れてしまったけれど姉ちゃんの剣には、妻の魂が宿っていたのか。そんな話をしている間に目的地へ着いたらしい。そこは車が入れるほど大きな洞窟だった。

「この穴を進めば〝あちら〟へ戻れるじゃろう。死んでいる人間が入っても同じ場所を歩き続けるだけじゃが、生きている人間ならば〝あちら〟へ辿りつける。ただし、そっちの子は君が背負って行かなければならないな。そうしなければ離れ離れになるだろう」

「そっか、色々とありがとう。助かったよ」

「それと絶対に後ろを見てはならん。冥界に引き戻されてしまうからな。前だけを向いて歩くのだ」

鞘に納めた剣を腰に結び付け、姉ちゃんを背負う。老人から貰った灯りの松明（たいまつ）は、姉ちゃんに持ってもらった。そうしてオレと姉ちゃんは、老人と別れる。オレが死ぬまで、二度と会う事はないだろう。老人の忠告通り、後ろは振り向かない。足場の悪い洞窟の、暗い闇に踏み入った。

老人から貰った松明が、半分になって不安に思う。すべての松明が燃え尽きる前に、戻るべきなんじゃないかと思った。だけど老人の

「後ろを見てはならん」という言葉を思い出す。あれは「後戻りするな」という意味だったのか。老人の言葉を信じてオレは進む。姉ちゃんが心配しているけれど休んでいる暇はなかった。火を起こせないので、松明の火を消して休む事はできない。

広かった洞窟が、少しずつ狭くなっている。狭い場所にいるという圧迫感が強まった。精神にかかる重圧が、肉体の疲労として現れる。本当に”あちら”へ繋がっているのかを不安に思っていたけれど、先の事を考えるのは止めた。前に一歩踏み出す事だけを考えて、オレは足を進める。

ふと背負っている肉の感触を思い出した。感覚が鈍って、姉ちゃんの事を忘れていた。そうして、あらためて背中の感触を再確認すると違和感を覚える。オレの首に回された姉ちゃんの手をチラリと見る、すると、そこには肌色の腕ではなく、火で炙る前の生肉のような腕があった。

「うわっ!?」

『びびナいで』

耳の後ろから変な音が聞こえる。おかしい。オレは姉ちゃんを背負っていたんじゃないのか？　なにか別の物を背負っている。いつの間にか、化物と姉ちゃんが入れ替わったのか。背中に感じる肉の感触が、鳥肌が立つほど気持ち悪い。思わず振り払ってしまいそうになったけれど、思い止まった。

背中に感じる肉が、プルプルと震えている。その震え方に姉ちゃんを思い浮かべた。まさか、これは姉ちゃんか？　オレの首に回された姉ちゃんの腕は、さっきと変わらず肉の塊だ。どうして、こんな姿に？　首を後ろに回そうと思ったけれど、老人の忠告を思い出して止めた。姉ちゃんに事情を聞こうと思っても、なぜか姉ちゃんの声は不快な化物の声にしか聞こえない。

聞こえない……いや、待てよ。疑うべきは姉ちゃんではなく、オレの感覚だ。オレは正常だろうか？　姉ちゃんが肉の塊になったのではなく、オレの視覚や触覚や聴覚が狂っているんじゃないか？　姉ちゃんが化物になったんじゃない。姉ちゃんが化物に見えているだ

けなんだ。
「なんでもないよ、姉ちゃん」
『ぶっ、ぶン……』
　姉ちゃんが何を言っているのかは分からないけれど、ちゃんと受け答えは出来ている。やはり、おかしいのはオレの感覚だ。間違っているのはオレだった。危うく姉ちゃんを振り下ろす所だったな。「そっちの子は君が背負って行かなければならない」と老人から聞いている。きっと姉ちゃんを地面に下ろしちゃダメなんだ。
　肉の化物に見えてるだけで、姉ちゃんは化物じゃない。惑わされては行けない。それよりも大事な事は、この洞窟を抜ける事だ。そう考えていると洞窟の幅が、さらに狭くなる。車が入れるほど広かった洞窟が、一人分の幅に縮んでいた。まるで布の端を捻って、尖らせるかのようだ。そうしてオレは洞窟を出口まで貫く。
　行き止まりだ。目の前に扉があった。それをオレは押し開く。扉の隙間から光が差し込み、オレの目を眩ませた。目が光に慣れて、見えたのは海だ。洞窟を抜けたのに、なぜか海の上に繋がっている。そうして状況を確認していたオレは、後ろから押し飛ばされた。足の先は空中で、オレと姉ちゃんは落下する……と思ったら姉ちゃんに抱えられて飛んでいた。
「うっ、うしお、大丈夫？」
「姉ちゃんのおかげで大丈夫だけど……いったい何なんだ？」
　空中に大きな扉が浮いて、そこから光の玉が次々に飛び出ている。下を見ると、人を発見した。海中から突き出た岩柱に、座っている黒髪の女性と、立っている白髪の少女がいる。その片方に見覚えがあった。時逆と時順に見せてもらった、オレの母ちゃんだ。黒髪の女性は、オレの母ちゃんだ。だけど母ちゃんは、海の底で白面の者を封じているはずじゃないか？
「うしお……よくぞ、冥府より戻ってまいりましたね」
「母ちゃん……？　本当に、母ちゃんなのか？　でも、じゃあ、白面の者は？」
「貴方が姿を消してから、すでに幾つもの月日が過ぎています。さき

ほど白面の者が長き眠りから目覚め、世に姿を現しました。うしお、私達は、白面の者を再び眠りに着かせなければなりません」
　母ちゃんの視線は、海の上で燃える物に向けられていた。なにか巨大な鉄の残骸が海の上に浮いて、海面も燃えている。その向こうにある島も、丸ごと炎上していた。それが何なのか、オレは分からない。いったい、ここで何があったのか。なによりも信じ難いのは、すでに白面の者が目覚めているという事だろう。
「初めまして、と言うべきでしょうか。今生の名は鷹取小夜（たかとりさや）、前生の名は決眉（ジエメイ）。この冥界の門を開き、この世に魂たちを呼び戻した者です」
　白髪の少女が言う。この子が、ジエメイさん？　そう思って言うと白髪の少女の横に、幽霊のジエメイさんが現れた。白髪の少女とジエメイさんの顔は、そっくりだった。白髪の少女の言う事が本当だとすると、ジエメイさんが2人いる事になる。それは兎も角、なにも分からないオレにジエメイさんが、いろいろと教えてくれた。
「白面の者が眼前の岩柱に力を溜め込んでいると自衛隊は騙され、須磨子のいる岩柱にミサイルを撃ち込んでしまいました。あの残骸は、その指揮を行っていた艦が白面の者の炎によって焼き尽くされた姿なのです」
　海面に巨人のような化物が2体も浮かんでいる。よく見ると、それは妖怪が寄り集まった姿だった。顔に大穴が開いていたり、体が溶けたようになっている。どう見ても何者かによってボロボロにされ、打ち捨てられた有り様だ。もはや、その役割を終えたのか、バラバラになりつつあった。
「東と西の妖怪は1つに纏まらず、白面の復活を前に仲違いを起こしました……その後、海中より現れた白面に双方とも敗れます。過去に”東の長”を”西”が捕らえ、白面の者に対する攻撃を強行した経緯があるため、禍根は未だ根強く残っています。彼等の力を会わせるのは難しいでしょう」
「光覇明宗は”白面の使い”斗和子の起こした事件が原因で、内部分裂を起こしています。破門された僧たちが、新しい組織を立ち上げる

ほどに混乱しているのです。こちらも今すぐ力を合わせるのは難しいでしょう」
「他の白面の者に対する組織も、保有していた白面の者の一部が暴走し、あるいは白面の者の放った使いによって壊滅状態に陥っています」
「そして人々は白面の者に恐怖し、その恐怖が白面の者の力となり、今この瞬間も白面の者の力は増しているのです」
「さらに白面の者が飛び立った際に、この国を支える国の要を傷付けたため、いずれ日本は海の底へ沈むでしょう」

……いったい、どうしろと言うのか。

希望より絶望へ至る

ジエメイさんの生まれ変わりだと言う白髪の少女に教えてもらったのは、現在の絶望的な状況だった。自衛隊は騙され、妖怪は仲違いを起こし、光覇明宗は内部分裂を起こし、その他の組織も壊滅状態に陥っている。さらに人々が恐怖する事で、白面の力は増し続けていた。

「うしお、貴方が戻ってきてくれて良かった。貴方がいるからこそ、まだ希望は潰えていません」

「白面を私達が止めねば……大勢の人々が死ぬのです」

白髪の少女は全く諦めていなかった。それは母ちゃんも同じだ。

ああ……なんて眩しいんだろう。「こりゃダメだ」なんて、内心で思っていたオレが恥ずかしい。そうだ、オレは皆を守るために戻ってきたんだ。誰も殺させたくないから、オレは戦う。失われて行く誰かの命を、この手で掴み取りたかった。まだ何も終わっちゃいない。

白髪の少女と母ちゃんは結界で、白面を捕らえようとしていた。だけど白面が速すぎて捉え切れないらしい。わざわざ白面が、ここまで封印されにやってくるとは思えない。もしも白面が戻って来るとしたら、全てが終わり日本が沈没した後だろう。こちらから白面を捕らえに行くしかないのか。

だけど白面は空を飛び、高速で移動できるらしい。こんな時シャガクシャが居れば……そう考えていると、空の向こうからシャガクシャが飛んできた。まさかオレが心の中で呼んだから来た訳じゃないだろう。シャガクシャを近くで見ると、全身に傷を負っている。手足が千切れた痕もあるし、胸部を縦に裂いた痕もあった。だれかと戦ってたのか？

「おーい、シャガクシャー！」

「なんだよー！　うしおー！」

「おまえ、その怪我どうしたんだよ！」

「ちぃーと面倒くせぇ奴の相手をしてたのよ」

「うしおー！」

シャガクシャと話している間に、聞き覚えのある声が割り込む……だけど、あいつがココにいるはずがないよな？　そう思って辺りを見回すものの、目に映るのは白髪の少女と母ちゃんとシャガクシャと姉ちゃんの４名だ。すると大きなシャガクシャの背中から、麻子が飛び降りた。

「なんで麻子がシャガクシャの背中に乗ってるんだよ!?」

「あんたが行方不明になってから、いろいろあったのよ！」

話を聞いてみると、動き回る人形を倒すために美術館の一室を爆破したり、親戚が妖怪に取り憑かれてバイクから飛び降りたりしたらしい。なにやってんだか……それらの事件の際に、辺りをウロウロしていたシャガクシャに助けられたとか。なんで麻子の周りに……いいや、オレが帰ってきそうな場所で待っていてくれたのか？　シャガクシャの性格から考えて、大人しく待っていてくれるとは思えない。シャガクシャと一緒にいたオヤジが何か言ったのかも知れないな。

「お前の事だからオレを置いて、一人で白面に突っかかったのかと心配してたぜ」

「なーんでわしが、そんな自棄おこさなきゃならんのよ？」

シャガクシャが来てくれたおかげで助かった。シャガクシャの飛行速度なら、白面に追い付けるかも知れない。だけど麻子を、この海の上に置いては行けない。飛べない麻子をシャガクシャに乗せて陸まで運び、そこまで姉ちゃんには自力で飛んでもらうか……いいや、そもそも姉ちゃんは、これから如何するのだろう？

「今からオレ達は白面を追うけど、姉ちゃんは如何する？」

もちろん”オレ達”に麻子は含まれていないが……オレと麻子が話している間に、小さくなっていた姉ちゃんの体がビクリと震える。その様子は恐がっているように見えた。剣を持っていない姉ちゃんは、白面と戦えない。安全な場所に避難するべきだろう。それとも、この岩柱の上に残るつもりなのか。戦う力のない姉ちゃんが、ここに残るのは危険だ。

「うっ、うしおは……わっ、わたしのために死ねる？」

……ん？　どういう意味だろう。姉ちゃんの質問にオレはハテナ

マークを浮かべた。これから白面の者と戦うという話の流れから察するに、「オレが他人のために死ねるのか」って意味か？　オレは白面の者と戦って死ぬかも知れない。だけど、だからと言って逃げれば、またオレは誰かの命を見捨てる事になるんだ。
「姉ちゃんも皆も、オレが守るよ。だから姉ちゃんは安全な場所に居てくれ」
「そっ、そっか……」

――るんっ

聞こえるはずのない音色が聞こえた。不吉な、あの音色が。その直後、オレの横でドシッという音が聞こえる。それは「刀を畳に突き刺した」ような音だった。その音に釣られて横を見ると、麻子の肩から何か生えている、白い棒のような物が麻子の肩から、服を突き破って生えていた。
「おい、麻子。そんなもの生やして大丈夫なのかよ……？」
オレは麻子に手を伸ばし、肩にポンッと触れた。すると目の前で、麻子の体が破裂する。まるでオレが触れた事で起爆スイッチが入ったかのように、麻子の上半身が吹っ飛んだ。残った腰から下が、足下にドサリと落ちる。その状況が理解できなくて、オレは固まった。まさか白い棒のような者が麻子に「刺さっていた」とは思わず。「麻子が死んだ」とも思えなかった。
麻子が爆発した勢いに乗って、飛んで行った物がある。麻子の体から生えていた白い棒のような物だ。それはクルクルと飛んで行って、掲げられていた姉ちゃんの手に納まった。それは白い刀身の剣だ。キリオに砕かれ、冥界に置いてきたはずの剣が、なぜか其所にある。
その白い剣を姉ちゃんは振る。母ちゃんと白髪の少女に向けて振った。一瞬、結界で足止めされたものの、その結界も白い剣で斬り裂かれる。母ちゃんと白髪の少女を、白い剣が襲った。白髪の少女は、とつぜん姿を現した子供のような妖怪に庇われる。だけど母ちゃんは首を切断され、その切り離された頭部は爆散した。

「オマモリサマ！」
　白い髪の少女が叫ぶ。姉ちゃんに斬られた子供のような妖怪の名前らしい。その悲鳴を他人事のように遠く感じていた。黒髪の少女を斬り捨てた姉ちゃんは、白髪の少女に追撃する。だけど、その姉ちゃんを背後からシャガクシャが殴った。打っ飛ばされた姉ちゃんは、石柱から外れた空中で停止する。姉ちゃんは空に浮かんだ。
「このアホが！　ボケッとしてんな！」
　オレに向かってシャガクシャが言う。その警告でオレは現実に引き戻された。すぐ側に麻子の腰から下が、離れた場所に母ちゃんの首から下が……爆発が止血になっているのか、飛び散った血は少ない。白い剣に付いた血は、白い刀身に吸い込まれて消える。その剣を手に持っているのは姉ちゃんだった。
　マタ、マモレナカッタ…
「あああ……ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
　声に出しているつもりはなかった。感情を抑え切れず、オレの心は引き裂かれる。どうしようもなく、頭を掻きむしった。「まだ間に合うかも知れない」とか「生きているかも知れない」とか、そう思う前に現実を認めたくなかった。白髪の少女とシャガクシャが厳しい目で、宙に浮かぶ姉ちゃんを見ている。それで、どうしようもないのだと思い知った。
「なーんで打っ壊れたはずの剣があるのかと思ったけどよ……思い出したぜ。古代へ行った時に、もう一人のうしおが、もう一振り持ってたっけなぁ」
「うっ、うん……あの子は”２振り”あったの。うしおが昔々に増やした”御屋形様の剣”と、エレザールの鎌の研究のために”引狭が取り寄せた剣”の２振り……」
　たしかにオレは、この剣が同時に２振り存在している瞬間を見た事があった。古代に行った時、”ジエメイさんを見捨てたオレ”の持っていた剣が、目の前にある剣なのか。”あのオレ”は「ジエメイさんを助けようとして、獣の槍が生まれなかった世界のオレ」と言ってい

た。キリオに壊された剣は、”引狭が取り寄せた剣”だった。そして、ここにあるのが”御屋形様の剣”。
「はなから白面の配下だったって訳か。にしちゃ、うしおを殺すどころか、うしおを助けるようなマネしてたじゃねーか」
「うっ、ううん……違うよ？　あっ、あの子は”御屋形様の剣”じゃなくて、”引狭が私にくれた剣”だったから……ニンゲンが言う”白面の剣”って、”こっちの子”の事なの。わっ、わたしがうしおを助けたのは、うしおを嫌いじゃなくて……好き……だったから……だよ？」
　恥ずかしそうに姉ちゃんは言う。すぐ近くに麻子と母ちゃんの死体を晒したままで……その有り様が気持ち悪かった。なんで、こんな事をした後で、オレを”好き”だなんて言えるのか分からない。相手を好きなら傷付けたくないと思うもんじゃないのか？　大切にしたいと思うもんじゃないのか？
「どうして……姉ちゃんは、麻子と……母ちゃんまで殺したんだよ……！」
「だっ、だって”ソレ”が居ると、うしおが私を麻子って呼んでくれないでしょ？　わっ、わたしはね。”あの子”からうしおの事を聞いて、弟が居るって聞いて、家族が居るって聞いて、うしおと会うのを楽しみにしてたの。そっ、それなのに”ソレ”は私を”姉ちゃん”なんて呼ばせて、ずうずうしく”麻子”って名前を奪ったの。うしおが居ない間に私を、２人がかりで威圧して……卑怯だよね？」
「そんな下らない理由で、人を殺したのかよ!?」
「くっ、くだらなくなんてないよ！　「お母様」がキリオの担当で、引狭が私の担当で、でも引狭が死んだから私の担当は居なくなったの。「お母様」はキリオの担当だから、引狭が死んでも私の面倒は見てくれなかった。わっ、わたしは私を見て欲しくて……そしたら、あの子がうしおの事を教えてくれたの。私には”血の繋がりのある本当の家族”がいるって……」
「オレが姉ちゃんの家に行った時……「お母様」は優しかっただろ……？」

「うっ、うしおも知ってるでしょ？　「お母様」は〝白面の使い〟だったの。あの時だって、獣の槍を壊せるか試してた。うしおが来た時は実験体たちを隠して、汚い所は隠してたの。うっ、うしおが殺されなかったのは、私が寝ている間に〝あの子〟が「お母様」に直接接触して説得したからだよ？　そのとき婢妖に情報を流されて、あんなに早く襲われちゃったけど……」

「やけにペラペラ喋るとは思ってたけどよ……おい、上だ。うしお、やつが来るぜ！」

シャガクシャに言われて見上げた空は、厚い雲に覆われていた。嵐が近いのか、雲の流れは速い。その厚い雲を獣の頭部が突き破った。巨大な胴体の後に、九つの尾が後を追う。古代で見た時よりも、そいつは遥かに大きくなっていた。配下の妖を従えて、白面の者が舞い降りる。

『快楽！　悦楽よ！　悲・哀・憎・悔の泥濘にのたうつ人間の心を感ずるのは！』

最悪の時に、災厄がやってきた。白面が封印されていた土地に、わざわざ戻ってくるはずがない。戻ってくるとすれば、それは沈み行く国を滅ぼし尽くした後だ。そうして滅びて行く様を、白髪の少女や母ちゃんに見せ付けるつもりだったのだろう。たとえ獣の槍の復活を知ったとしても、わざわざ白面本体が出向く必要はない。

母ちゃんが死んだ事を知ったとしても、わざわざ見逃した程度の存在を潰しにくる必要はない。白髪の少女や母ちゃんの張る結界を、白面は恐れていないんだ。だとすれば、ここに冥界の門があるからか？

いいや、違う。もっと単純な理由だ……こいつはオレを嘲笑（あざわら）うために、そのためだけに戻ってきやがった。

『くくく……共に戦う友軍はなく、孤立無援。父は斗和子になぶり殺され、母と思いを寄せていた女を、我が剣に殺されたか。哀れよのぅ……獣の槍を使う者よ』

「待てよ、オヤジが……なんだって？」

『まさか……おまえがこの世から姿を消した後、父が無事に生き延びたとでも思っていたのか？』

「シャガクシャ！　オヤジは、おまえが……助けてくれたんだよな……？」
「……いいや」
「なん……だって……？」

オヤジも、死んだ？

『何故おまえの父が死んだのか、教えてやろうか？　そやつはおまえの父を見捨てて、己が身のかわいさに一人で逃げたのだ……さきほど我の使いとして立ち塞がった人間の裏切り者を殺したようなぁ……たしか、その者はナガレといったか？』
「ナガレ……？　まさか、流兄ちゃんの事か!?」
「あぁ、わしの邪魔をしたからなぁ……だから殺した。ナガレは殺してやったぜ」
流兄ちゃんまで、裏切ったのか？
それをシャガクシャが殺した？
オヤジも見捨てたのか？
「うそ……だろ？」
「いいや……」
「本当……なのか？」
「ああ……」
「オレは……お前なら……オヤジを助けてくれるって……！」
オレは顔を歪める。「どうしてオヤジも連れて逃げてくれなかったのか」なんて思った。シャガクシャは本当にオヤジを見捨てたのか？
オヤジまで死んだなんて……どうすりゃいいんだよ。オヤジが死んで、母ちゃんが死んで、麻子が死んで、姉ちゃんが裏切って……もう訳分かんねぇよ。
『なぁ……斗和子よ』
『ほほほ、白面の御方の申される通りに……』
白面の尾が変化して、巨人へ形を変えた。斗和子と呼ばれる”白面の使い”へ。そいつを見たオレの心臓がドクンと跳ねる。剣を握る

手に力を込めた。ずっと一緒だった姉ちゃんの時は、憎み切れなかった。シャガクシャも同じだ。だけど斗和子に対しては強い憎しみを覚える。そうだ……そもそも白面が、姉ちゃんを裏で操っていたんじゃないかと思いついた。そうしてオレは、感情を打つける相手を見つけた。

『おまえが我への憎しみに塗れて行くのは心地良い。そうだ……我が、我という存在が、諸悪の根源よ！　我がおまえの全てを奪ったのだ。父も母も女も、すべてを!!』

「そうだ……おまえが……おまえのせいで……！」

げしっ

「アホか。おめーのオヤジが死んだのは、おめーが弱かったからだろーが」

シャガクシャが拳で、オレの頭を打った。オヤジが死んだのは、オレのせいだと、ほざきやがった。頭が沸騰したオレは、シャガクシャに殴りかかる。するとシャガクシャは避ける事もなく、オレの拳を顔に受けた。仲違いを始めたオレ達を、白面は愉快そうに眺めている。

「母親が死んだのも、女が死んだのも……ぜーんぶ、おめーが弱っちかったからだろ？」

「ふざけんなよ、このクソ妖怪！　他人に責任を擦り付けるんじゃねえ!!」

「擦り付けてんのはおめーだろうが、小僧！　てめーのオヤジが死んだ時、おめーは何をしてた？　そこで母親と女を殺したガキを助けようとして、穴の中に姿を眩ましたじゃねぇか。おめーがガキを放って置きゃ、そいつらが死ぬ事は無かったんだよ！」

「そんな事……姉ちゃんが、母ちゃんと麻子を殺すなんて、その時は分からなかっただろ！」

「てめーの母親と女が死んだ時も、ボケーと突っ立ってただけだろーが！　誰が、あのガキを止めてやったと思ってんだよ！　そのくせして『オレは……お前なら……オヤジを助けてくれるって』だぁ!?　勝

手に期待して、勝手に失望してんじゃねーよ！　けっ、バッカじゃねーの！」
「てめぇ……！　いいかげんにしろよ……！」
「獣の槍が無いと何にも出来ねぇだ？　あっても、なーんにも出来ねーくせによ！　笑わせるぜ！」
「なんだとシャガクシャァ!!」
「いけません、うしお！　あなたが今最も信じねばならないのは、シャガクシャ殿なのですよ！」

「こんな〝他人任せ〟な奴を信じるなんざ御免だぜ！」
「こんな〝自分勝手〟な奴を信じるなんざ御免だね！」

パチンッ

とオレの頬から軽い音が鳴る。白髪の少女が……現代に転生したジエメイさんが、オレの頬を打っていた……なんでシャガクシャじゃなくて、オレなんだよ。オレが悪いってのか？　白髪の少女から下に視線をずらせば、母ちゃんと麻子の死体が目に飛び込んでくる。上に目を逸らせば白面の巨体が視界を塞ぐ。どこも見ていられなくて、もう限界だった。もう何も見たくない。
「なんだよ……オレが悪いのかよ。そうだよ……ぜんぶ、ぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶ!!　オヤジが死んだのも、母ちゃんが死んだのも、麻子が死んだのも、オレのせいなんだろ！　ああ、分かったよ！　終わらせてやる！　なにもかも！」
「うしお！　憎しみの心で白面と戦ってはいけません！　憎しみでは……白面は倒せないのです！」
白髪の少女の言う事も聞かず、大きめの鞘から剣を抜いた。ザワザワと髪が伸び、体に力がみなぎる。白面は空に居るけれど、心配はいらない。剣に導かれるまま、オレは白面へ向かって飛んだ。剣の柄を掴み、剣に引っ張られるように付いて行く。そうして白面に刃を突き立てた。

『しょうことも……なし』

痛がっている様子も、怒っている様子もなかった。白面の冷たくて平坦な声が間近に聞こえる。そして手の中の感触がなくなった。白面に突き刺さった剣が、鋭い音と共に砕け散る。ああ、終わった……なにもかも……オレの体は重力に引かれて落ちて行く。そんなオレに最後の止めとして、白面は巨大な尾を振り下ろした。

おわり

オレは夢を見ていた。シャガクシャの夢だ。かつて人だったシャガクシャの夢だった。シャガクシャが生まれた時、流れ星が落ちて、周囲の人々が亡くなった。シャガクシャは呪われた子といわれ迫害を受ける。だからシャガクシャは他人を憎んでいた。誰かを憎むたびに肩が疼（うず）き、シャガクシャは快感を覚える。

憎しみがシャガクシャを強くしていた。戦場で名を挙げ、国を幾度も救った英雄に祭り上げられる。それでもシャガクシャは他人を憎んでいた。呪われた子と言っていた事を忘れ、誉め称える人々を憎んでいた。シャガクシャは他人を信じていなかった。だけどシャガクシャは2人の姉弟と出会う。他人を憎み続けた男に、心安まる時がきた。

『この私に種を撒けとでも言うのか……種は何だ？』

『さあ……でも……』

『憎しみは……なにも実らせません』

その姉弟と出会ってからシャガクシャは、あまり人を殴らなくなった。シャガクシャは生まれた時から、周囲の人間を死なせる呪われた子と呼ばれていた。最底辺の暮らしの中で、恐れられ騙され食い物にされてきた。だから他人を憎んではいけない理由はないと、そう思っていたんだ。

『英雄様にお出しするのは、お恥ずかしいのですが……よろしければどうぞ』

『これはおまえが作ったのか』

『はい、新しいおいもを少し分けていただいたものですから……いかがでございますか？』

姉弟からスープを振る舞われる。シャガクシャは、あったかいと思った。そのとき男は、生まれて初めて笑ったんだ……その光景に既視感を覚える。姉ちゃんがシャガクシャに、みそ汁を作った時の事だ。そういえばシャガクシャという名前を付けたのは姉ちゃんだった。姉ちゃんが姉で、オレが弟で……偶然とは思えない。シャガク

シャと姉弟の思い出を、紛い物で汚されたように感じた。
また戦争が始まる。敵国は強く、一夜で滅ぼされるとシャガクシャは思っていた。だからシャガクシャは姉を国外へ連れ出そうとする。だけど軍隊に待ち伏せされ、矢を放たれた。シャガクシャは姉を抱きしめ、その胸に庇う。シャガクシャは背中で矢を受け止めたものの、姉の体にも矢は突き刺さった。
姉は命を落とし、シャガクシャは憎しみに囚われる。怒り狂ったシャガクシャは敵陣に突っ込み、敵兵の数々を捻り殺した。そんなシャガクシャの体に異変が起こる。疼いていた肩を突き破って、化物が生まれ出た。流れ星となってシャガクシャの身に宿り、憎しみを血と肉に変えて、その身を形作った白面の者が……！
白面は町に火を放ち、人々と弟の命を奪った。姉弟を失い、白面を生んだ事で白面と同じ体に……不死の身となったシャガクシャは白面を追う。そして大昔の中国の都で”獣の槍”と、”未来のオレ”と”未来のシャガクシャ”に出会った。だけど”未来のオレ”は大怪我を負って、町に置いて行かれる。それからシャガクシャは獣の槍を見つけて、魂を食われて化物になった。そうして人間だったシャガクシャは、シャガクシャという妖怪になった。

目覚めると、海の中だった。周りに獣の槍……というか剣の欠片が浮かんでいる。白面の止めの一撃から、オレを守ってくれたのか。オレの体は上昇し、海面を突き破る。白髪の少女もとい転生したジエメイさんがいる岩柱を見ると、白面の口から吐き出される炎で炙(あぶ)られていた。あの野郎、なんて事してやがる……！
「――剣よ、来い！」
オレは砕け散った剣に呼びかける。あっちこっちから剣の破片が集まってきた。そうして破片は集い、剣を形作る。姉ちゃんの剣と同じように、バラバラになっても元に戻った。剣が教えてくれたんだ。この剣の対となる短剣が冥界にある。だから、その短剣で破壊されない限り、この剣は壊れない。バラバラになっても元に戻る。
『獣の槍イ、どうしても我とやりたいか！　良し！　今度こそ本当に

潰してやろう!!』
　海面を漂うオレに向かって、白面の尾が伸びる。それが直撃する前に、オレは拾い上げられた。シャガクシャに頭を掴まれ、空を飛んでいる。こちらに向かってきた尾は変化して、霧の化物に変わった。フェリーで北海道へ行った時に戦ったシュムナだ。こいつも姉ちゃんの「お母様」だった斗和子と同じように、白面の尾が変化した妖だったのか。
「……すまねぇな、シャガクシャ。オレは弱いんだ。弱いから皆を助けられなかった」
「ああ、そうだろうよ。おめぇは弱っちい人間だからな」
「オレは弱いから、一人じゃ空だって飛べない」
「そりゃー、弱っちい人間は空なんて飛べねぇだろうよ」
「……だからよぅ、シャガクシャ。オレと一緒に白面と戦ってくれねぇか」
「なーんでわしが、おまえなんぞと力を会わせて戦ってやらにゃならんよ」
「そうだよなぁ。オレなんかと一緒に戦ってなんてくれないよなぁ……」
「……でも、まァ、白面を打ん殴るついでなら、おめぇを運んでやってもいいぜ！」
「ああ……！」

　――きぃん、と獣が鳴いた。

　剣となった獣が発光する。白面の尾が変化した化物たちを、オレとシャガクシャは蹴散らした。切っても切れない霧を、力を反射する巨大な女を、表皮を油で覆った海蛇を、切り捨てる。すると白面の意識が、こちらに向いた。見ると岩柱にいる白髪の少女は、まだ生きている。オレは間に合ったのか。
『我の分身を倒したからとて、つけあがるなァ！　紅煉！　紅煉よ、来い!!』

「紅煉？」
「ちっ、あいつに今来られると面倒だな」
「おい、紅煉って誰だよ？　知ってるのか？」
「紅煉ってーのは、おめーが居ない間に来た白面の使いよ」
　空に見える雷雲が高速で移動する。その真っ黒な雲から、真っ黒なシャガクシャが現れた。そういえば姉ちゃんと初めて会った時に、「字伏(あざふせ)は種族名」と言っていた。あの真っ黒な妖怪は、シャガクシャと同じ種類の妖怪なのか。それは元・人間であり、元・獣の槍の使い手であり、魂を食われて獣となった事を指している。
「この紅煉が殺してやらァ、人間！」
「だっ、だめだよ。うしおは私がもらうから……」
　真っ黒な妖怪が吠えたと思ったら、乗っていたシャガクシャの背中から叩き落とされた。姉ちゃんが白い剣を、剣となった獣に叩きつける。シャガクシャは真っ黒な妖怪に足止めされていた。オレは姉ちゃんと共に海へ落ちる。高所から海面に叩き付けられた衝撃で、オレは息を吐き出した。
「好きなの、うしお……だっ、だから死んで？」
　海上から振り下ろされる白い剣を、オレの剣で防ぐ。その衝撃で海に沈められた。このままじゃ不利だ。シャガクシャは真っ黒な妖怪に足止めされ、オレは姉ちゃんに足止めされている。石柱の上にいる白髪の少女は、一人で白面の相手をしなければならない。白面だけじゃなくて、配下の妖怪だっているんだ。オレは姉ちゃんを説得できないものかと思った。
　姉ちゃんが麻子を殺したのは、〝麻子〟という名前を取り戻すためだ。そんな事は話し合えば済む問題だろう。それで殺すという思考が理解できない。だけど、それは母ちゃんを殺した理由に繋がらなかった。白面を封じる〝お役目〟である母ちゃんを殺し、白髪の少女を殺そうとしたのは白面のために違いない。
「なんで姉ちゃんは白面の側に付いたんだよ!?」
「うっ、うしおが……好きだから」
「好きなら相手を大事にしようって！　傷付けたくないと思うもん

じゃないのかよ！」
「うっ、うん……えっとね。私は怖いの。うしおが怖い。こんなに好きなのに、うしおが怖い」
「怖い……？　それは姉ちゃんが斬りかかってきたからだろ！」
「うっ、ううん……そうじゃなくて、私は人が怖いの。どんなに好きでも、心から人を好きになれなくて……すみっこの方に恐怖が残ってる」
「そりゃ、姉ちゃんが怖がりなのは見てれば分かるけどよ！」
「でもね、殺してしまえば怖くないの。うしおを殺せば、私は心からうしおを愛せるから……」
　空白――姉ちゃんの言葉を聞いて、オレの思考は吹っ飛んだ。
「うしおが動かなくなれば安心できるの。うしおの命が消えて行く感触を感じると落ち着けるの。心の中の恐怖がなくなって、心の底からうしおを好きになれる。そうして冷たくなったうしおをギュって抱きしめたい。一時の物じゃなくて、腐らないように、大切に大事に保存するから……うしおの体が”なくなる”まで、ずっと一緒に居てあげるから……それが私の好きって事だから……」
「私が人間じゃないって告白して、それでもうしおは私と一緒に居てくれたよね。その時わたしは、うしおになら殺されても良いって思ってたの。そう思ったらうしおが、少し怖くなくなった。うしおと手を繋いでると、うしおは私を殺してくれるかなってドキドキしてた。だから、うしおが獣になって私を殺そうとした時は受け入れた……でも、やっぱりダメだった。うしおに殺されかけて気付いたの。私はうしおに殺されたいけれど、それ以上にうしおを……」
「――愛してる（殺したい）」
　これまで見た事がないほど温かい笑顔を、姉ちゃんは浮かべていた。恥じらって、照れている。だけど、どうしようもなく歪んでいた。それを見てオレは、姉ちゃんが壊れているのだと初めて知った。姉ちゃんの白い剣は、人を殺す意思を持つ者にしか使えない。心に根付いた恐怖から日常的に、姉ちゃんは人を殺したがっている。愛しているから殺したくて、怖いから殺したい。姉ちゃんは”こわい”という

理由で無差別に、誰でも殺せる。
「世界は怖い事ばかりじゃない！　信じればいいだろ！　なんで姉ちゃんは、オレを信じてくれなかったんだよ！　なんでオレが姉ちゃんを傷付けるだなんて、そんなバカなこと思ったんだ！」
「そっ、そんなこと分からないんだから……」
　姉ちゃんとオレの見ている世界は異なるのだろう。そんな事にオレは今まで気付かなかった。少し怖がりな姉ちゃんだと思っていた……だけど、姉ちゃんの見ている世界は〝不信〟に塗れている。いったい姉ちゃんには、オレが〝なに〟に見えているのか。得体の知れないバケモノにでも見えているのか。そんな世界で姉ちゃんは生きていたんだ。正気なのは見た目だけで、少し内面へ踏み込んで見れば狂っていると分かる。

――姉ちゃんは人の心が分からない。

「姉ちゃんのバッカヤロオオオオオオ!!」
　オレの剣に導かれるまま海面から跳び上がり、姉ちゃんに突っ込んだ。オレの剣は姉ちゃんの腹部を切り裂き、姉ちゃんの剣はオレの心臓を貫く。そうして姉ちゃんの腹部が爆発し、オレの心臓も爆発した。姉ちゃんは上半身と下半身が真っ二つになり、オレも心臓に穴が開く。
「……ちくしょう」
　オレと姉ちゃんは海へ落ちた。目の前が真っ暗になる。心臓に穴が開いたんだ。こんな様じゃシャガクシャも、白髪の少女も助けに行けない。だけど、もう一度……もう一度だけ立ち上がりたかった。この胸の傷さえ塞がれば……オレは、まだ戦える。まだ止まれない。
　オレは海の底にいた。辺りは暗く、明るい海面が遠くに見える。こんな場所で生きていられるはずがない。だから、これは夢なのだろう。夢を見ているという事は、まだオレは死んでいない。だけど体が動かなくて、どうしようもなかった。少しずつオレの意識が海へ溶け

て行く。
『諦めないで、うしお』
白髪の少女が海中に現れる。現代に転生したジエメイさんだ。諦めるなと言われても、どうしたものやら……心臓に穴が開いて、人が生きて行けるはずがない。獣の槍を使っている間の傷は早く治るけれど、この大穴を塞げるとは思えなかった……いや、待てよ。ジエメイさんが言うんだ。もしかして治るのか？
『ええ、もう貴方の胸に穴は開いて▪いません。ですが、問題は別の所にあります。白き剣の力で、うしおの人としての大部分を斬られました。今、うしおは獣と化しつつあるのです』
シャガクシャと同じ妖怪になるのか。
『ですから、私が貴方の魂の内へ……さすれば一時の間、貴方の意識を留める事ができましょう』
白髪の少女が近付き、オレの体と重なる。あたたかい物が、オレの中に流れ込んだ……だけどオレの内に魂があるのなら、白髪の少女の肉体は如何なるのか。意識が浮上し、明るい海面が近付く。獣と化しつつあるために、ひび割れたオレの体が見えた。いつの間にか夢から現実へ帰ってきたオレは、海面から跳び出す。そうして石柱の方を見て、白髪の少女がオレと一つになった理由を知った。

――白面の口で、その牙に突き刺さった、白髪の少女の肉体がある

オレと一つになったから死んだのか。死んだからオレと一つになったのか。もはや分からない。そんな事を考えている暇はない。白髪の少女が繋いでくれた命を、無駄にできるものか。オレは空で戦っているシャガクシャの下へ跳ぶ。シャガクシャは全身に杭のような物を打ち込まれ、それでも戦っていた。
「待たせたな！」
「おせーんだよ、バカチビ！」
ジエメイさんと一つになって、獣の剣との繋がりが強くなったと感じる。獣の槍にジエメイさんが溶けているからか。その力で紅煉と、

紅煉から生まれた妖を斬り捨てた。だけど白面の妖たちは壁のように、あるいは山のように立ち塞がる。だからオレは、姉ちゃんと同じように剣を砕け散らせた。発光する獣の欠片が流星のように降り注ぎ、妖たちを撃ち抜いていく。

『雑魚では相手にならぬか！　ならばこの白面が、一片も残さず消し飛ばしてくれるわァ！』

白面の口から灼熱が放たれる。その前に剣の欠片が集い、立ち塞がった。獣の剣は炎を吸い込み、赤く色を変える。その剣の柄を握り、大きく開いた白面の口へ向かって投げた。だけど、赤熱した剣に触れたオレの手は溶ける。右手首から先が溶けて、投げた剣に焼け付いて飛んで行った。あとは左手か……その事実を受け止める。赤熱した剣は白面の牙で食い止められ、そこで爆発した。

ドゴォン！

白面の頭部が弾け飛んだ。爆発と共に砕け散った獣の欠片が、白面の頭部を内側から吹っ飛ばす。残された白面の胴体も崩壊し、毒気を撒き散らした。それでもオレとシャガクシャは警戒を怠らない。呼吸が止まるほど、白面の亡骸を注視する。そうしていると毒気を掻き消した欠片が集って、オレの左手に剣を形作った。

「やったのか……？」

「いや、まだだぜ！」

オレを乗せたままシャガクシャが飛び出す。その先を見ると、九つの尾が見えた。小さくなった白面が、背を向けて逃げ出している。まさか白面が逃げるなんて思っていなかったオレは驚いた。ここまでやって逃せるものか！　そう思っていると白面の前方に、無数の魂が現れる。白く輝く魂たちは、白面に体当たりを仕掛けた。

『魂など、いくら打つかりても……何の痛痒も感じぬわ!!』

「そうかよ！　でもな、足止めにはなったみたいだぜ！」

「白面エエエエエン!!」

――るんっ

白面の眼前に迫った獣の剣が、白い剣に弾かれる。あと少しという所で、邪魔をされた。白面を守るように、白い剣が浮いている。白面に体当たりを仕掛けていた魂たちも、散り散りになっていった。そうか……白い剣の音色だ。あの音色は人を狂わせ、死に誘う。そういえば幽霊なジエメイさんの姿を、白い剣が現れてから見ていない。魂たちにとって、白い剣は天敵なんだ。

「おやかたさまーっ！　がんばってぇぇぇ!!」

その声にオレは気を取られた。上半身だけになった姉ちゃんが、海上に浮かびながら声援を送っている。すると急に、寂しく感じた。オレとシャガクシャを応援してくれる奴等はいない。いつまで経っても光覇明宗の支援も、自衛隊の支援もこない。妖怪たちの支援もない。白髪の少女が死んでから、たったの2人で戦っていた。

「――ずいぶんと面白ぇツラしてるじゃねーか」

シャガクシャの声に気を戻す。オレの事か……いや、白面か？　そう思って見ても、白面の表情に変わった所は見られない。オレが姉ちゃんに気を取られている間、シャガクシャは白面の顔を見ていたのか。いったい白面は、どんな顔をしていたのだろう。姉ちゃんの声援を受けた白面は……。

「自分の剣を投げて寄越すなんざ、ずいぶんと慕われてるじゃねーか？」

『なにを勘違いしている……貴奴に貸し与えていた剣が戻ってきただけの事よ。この剣はそも……』

『――我の剣だ！』

白面が変化する。白い剣を手に、若い女へ姿を変えた。剣を手にするために、わざわざ人へ変化したのか。巨大な獣の姿に比べれば、人の姿は弱そうに見える。だけど次の瞬間、オレは白面を見失った。反射的に上げた獣の剣に、白い剣が叩き付けられる。その衝撃で、獣の剣を握っていた左手が圧し折れた。すでに右手はない。これで両手が使えなくなった！

「シャガクシャ！　剣を持てぇ！」
「ああ!?」
　無理を言っている事は分かっていた。だからオレは、獣の剣と白面の間に飛び込む。白面の剣がオレの体に減り込んだ。白面の怪力で、オレの体は真っ二つにされる……死んだ。今度こそ間違いなく死んだ。白面の剣の力によってオレの体は爆散し、跡形もなくなる。身を守る鎧でもあれば防げたかも知れないのになぁ……。
「このアホが！　勝手に死にやがってぇ!!」
　シャガクシャが獣の剣を握り、白面の剣と打ち合わせる……なんて光景を見ているオレは、どうやら幽霊になったらしい。魂を引き裂くような剣の音色から逃れるために、シャガクシャの体へ飛び込んだ。そのオレの魂には、白髪の少女の魂も混じっている。どうしたものかと思ったオレは、シャガクシャの中から2人で応援する事にした。
『がんばれ！　がんばれ!!　まけるな！　まけるな!!　まけるな！　がんばれよーっ!!』
『あの……うしお、あまり大声を出すのは……』
「うるせぇぇぇぇぇ!!」
　オレの応援が効いたのか。それとも騒々しくてキレたのか。白面の剣をシャガクシャは押し返した。だけど、シャガクシャは切り込めない。そもそもシャガクシャは人間だった頃なら兎も角、記憶を忘れてしまった今は剣なんて使えないだろう。それにシャガクシャは妖怪だから、魂を代価に剣の力を引き出せなかった。
『弱し!!　弱くてくだらぬ!!　獣の槍の使い手よ、おまえは分かっていたのだろう。どんなに口で人間を救いたいと言っても……絶望の闇夜に向かうしかない事があるということを!!』
「けっ……くだらねぇ。どんなに……誰かが頑張っても……救えねぇヤツはいる！　だからって……あきらめ……られるかよ！」
　シャガクシャの言葉に共感した。同時に、獣の剣が震える。そうか……獣の剣も、オレも、まだ終わっていない。オレと獣の剣は、まだ繋がっているんだ。白面の剣に斬られても、まだオレに使える部分が残っているのなら――獣よ、持って行け！　オレの魂を使い切って、

シャガクシャに力を貸してやってくれ！
『負けと分かって、まだ戦うか……』
「勝つさ！　おめぇの夜は、もうやって来ねぇ……おめぇと戦っているのは、わしだけじゃねぇのさ！」
　あの音色は、獣の剣を持っていれば防いでくれる、それに妖怪には全く効果がない。光り輝く魂たちが現れ、シャガクシャの中に飛び込んだ。数知れない魂たちが、光の渦となってシャガクシャに流れ込む。太陽のような明るさで、辺り一面を照らした。その眩しさに白面の目は眩む。
「ほーら、おめぇの怖えのが来たぜえ！」
――オヤジ
――母ちゃん
――麻子
――真由子
――羽生さん
――流兄ちゃん
――キリオ
――小夜さん
――ジエメイさん
――2代目のお役目さん
　北海道行きのフェリーに乗っていた人々が、あやかしに囚われていた魂たちが、光覇明宗の人々が、顔も名前も知らない沢山の人々が……そして最後に古代で出会った、もう一人のオレが……シャガクシャの中に、みんながいた。みんなで手を繋いで輪を作る。そこから光が溢れた。
『ぬうう！　見えぬ！　なにも見えぬ！　この目が、この光が、我を惑わすか！　ならば、目などいらぬ！』
　光に眩む自分の両目を、白面は潰した。そして血の涙を流しながら、白い剣を手に、光の中へ飛び込んでくる。その白面に向かって、シャガクシャは剣を振り下ろした。閃光が走り、空と海を切り裂く。白面の剣は砕け、光に飲まれた。白面の体も二つに分かれ、光に侵さ

れる。白面の体にヒビが入り、剥がれ落ちていった。
『ギエエエエエ!!　ばかな……!　我は不死のはず、我は無敵のはず!　我を憎むおまえの在る限り……シャガクシャアアア!!』
「あいにくだったなァ。どういうワケだかわしはもう、お前を憎んでねえんだよ……憎しみは、なんにも実らせねえ。かわいそうだぜ、白面!」
夢で見た姉弟が、シャガクシャの側にいた。白面の体の崩壊は止まらない。変化した若い女の姿のまま、白面は壊れて行く。その様をシャガクシャは、静かに見守っていた。やがて指先の欠片まで砕け散って、白面は消滅する……やっと終わったんだ。そして白面に続いて、その役割を終えた獣の剣も砕け散った。

下半身を切り落とされ、上半身だけになった姉ちゃんは生きていた。だけど妖怪殺しの獣の剣に切られて、その状態から回復するのは無理らしい。人への変化が解け、肉塊の姿になっていた。これが姉ちゃんの本当の姿なのか。姉ちゃんがオレに見せたくないと思っていた姿だった。
『……ぶっ、ぶじぼ?』
姉ちゃんの手がフラフラと揺れる。その手をオレは握った。幽霊だから感触は違うだろうけれど、命が尽きる寸前の姉ちゃんは気付けない。肉塊からシュウシュウと湯気が上がった。オレの手を握れて安心したのか、姉ちゃんの体は崩れ始める。腐った肉がボロリと剥がれ落ちた。その様を見ていられなくて、姉ちゃんの腐った体を抱きしめる。
『ばっだがびなァ……』
なに言ってるのか分からねぇよ、姉ちゃん……それでもオレは肉塊が、安らかな顔をしているように見えた。死んでしまうのだから、もう何も恐れる必要はない。ありもしない恐怖に怯える事はないんだ。シュウシュウと肉塊が溶ける。そうして姉ちゃんは一片も残らず、この世から消えてなくなった。

白面と姉ちゃんの最後を見届けて、オレ達は石柱へ戻る。母ちゃんや麻子の死体は、どこかに吹き飛ばされて残っていなかった。だけど、そこにある冥界の門は開いたままだ。この世に現れた魂たちが、冥界へ帰って行く。死んでしまったオレも、冥界へ行かなくちゃならない。

『蒼月、幾千の礼を重ねても足りません』

『いいよ、別に……』

ジエメイさんとギリョウさんも冥界の門を潜って行った。最後に残ったのはオレとシャガクシャだ。ここで重大な問題がある。この冥界の門は、現世の者が内側から閉める必要があるらしい。つまり、この戦いで唯一生き残ったシャガクシャが、冥界の門を閉じなければならない。

『そういう訳だってよ』

「なーんでわしが、おまえに付き合ってやらにゃならんのよ……」

『嫌だってんなら、おまえに取り憑いちゃる！』

「おい、やめろバカ！　気持ち悪ぃんだよ！」

シャガクシャが内側から、冥界の門を閉じる。その先で、オヤジと母ちゃんが待っていた。みんな死んだから、みんな一緒だ。そうか……もしかすると姉ちゃんも、どこかに居るのかも知れない。そうだとすれば会いに行きたい。また殺し合うことなっても、何度でも殺し合って、そうして話し合って、姉ちゃんの恐怖を取り除いてやろう。

『……待ってろよ、姉ちゃん』

「なにしてんだよ、うしお。さっさと行こうぜ」

『よーし！　行っくぞーっ、シャガクシャーっ！』

「うるっせーんだよ、うしおーっ!!』

あとがき

白面が討たれ、冥界の門は閉ざされた。すべてが終わった後、日本の妖怪たちは”要（かなめ）”の修復へ向かう。白面が壊して行った要を放置すれば、日本が海の底へ沈むからだ。妖怪たちは其の身を石に変えて、要を支える。しかし妖怪たちは、巨大な西洋甲冑によって薙ぎ払われた。

『我は白面！　その名の下に全て滅ぶべし！』

海中に現れた西洋甲冑が、要の修復を妨害する。妖怪たちは数万体が残っていたものの、その戦意は低かった。白面が目覚めた際にボコボコにされ、うしおやシャガクシャが戦っている間も戦意を喪失していた妖怪たちは、軽々と蹴散らされる。妖怪たちの集結が遅れて個別に撃破されているものの、戦力の投入を続けなければならなかった。戦力を整えている隙に、要を完全に破壊される恐れがあるからだ。

「おのれぇ！　こんな時、あの者たちがいれば……！」

「まずいぞ、西の。このまま結界自在妖の消耗が続けば。抑え切れぬ！」

『ひひひ、ざーんねーんでしたー』

その西洋甲冑の本体は、白い剣だ。しかし、戦場に白い剣は見当たらない。どこに居るのかと言うと、沖縄の都市へ向かっていた。そこで空から、都市が沈む様子を見物する予定だった。しかし、なにか近付いてくる事に気付く。それに気付いた剣は降下して、身を隠そうとした……間に合わなくて、捕まったけど。

「ちっ、わしはバカどもの尻拭いかよ」

『げぇ、とら。じゃなくてシャガクシャじゃないですかー！　やだー！　冥界の門に消えたんじゃなかったのー!?』

「あァ？　そりゃ別のわしだろうよ」

『へー、ところで何か用なのー？』

「懐かしい連中に声を掛けられて来たんだが、出遅れたみてーだな」

『ふーん。じゃあ、ここで出会ったのは偶然かー』

「……」

『……』
「……ん？」
『なんで放してくれないのー？』
「そりゃおめー。白面の臭いをプンプンさせてる奴を、わしが大人しく見逃すわけねーだろ」
『えー』
「たしか粉々になっても元に戻るんだっけな。冥界の門にでも放り込んでやっか」
『やーめーろーよぅ』
　さっそく未来のシャガクシャは剣を、最寄りの穴へ放り込む。剣は逃げ出せないまま、冥界の門へ放り込まれた。人間ならば体を乗っ取れたものの、妖怪のシャガクシャに対しては魂を食らえない。人を狂わせる剣の音色も効果がない。飛んで逃げようにも、しっかりと柄を掴まれていた。
　別の世界への入口と云われている冥界の門へ、剣は引き込まれる。すると海中で暴れていた西洋甲冑は活動を停止して、海の底へ沈んで行った。そのあと妖怪たちは大地の要に空いた穴を塞ぎ、日本の沈没は止まる。そうして何気に日本を救ったシャガクシャは、うっかり穴に吸い込まれて、この世から姿を消したとさ。とっぴんぱらりのぷぅ。

Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｔｈａｎｋｓ
▼『セリア』さん
　感想を１５回も書いてくれた人だよ！　この人だけ２桁で、ぶっちぎりだね！
「この人と共に、この作品は育った」と言っても過言ではないよ！
・【あらすじ追記の人】原作未読の人は〝白面〟が何なのか分からないと気付いたため、あらすじに追記。「これはダークサイドのオリキャラが、ヒーローサイドに忍び込んで、希望を圧し折るおはなしです」の原型を作った。後に元の部分を削除したため、この追記部分が正式なあらすじになる。

・【流兄ちゃんの人】流兄ちゃんの登場が望まれたため、フェリーで合流させた。なぁに流兄ちゃんだったら、うしお達の行動を予測する程度のこと余裕ですよ

・【フェリーを沈める切っ掛け】婢妖の出番がなかった事に気付いたため、書き直してフェリーを沈める事になった……オレじゃぬぇ！セリアさんがやれって！

・【エスパー1】白面の使いなんて一言も言っていない時点で、”白面の使い”というキーワードを持ち出した。間違いなくエスパーの所業

・【エスパー2】カムイコタンに置かれていた西洋甲冑が、転生者独自の判断である事に気付く。たしかに転生者は白面の指示なんて受けてないけど、なんで其所に考えが至ったのか意味不明なレベル。

▼『毎日が後悔の日々』さん

感想を5回も書いてくれた人だよ！　珍発言の多い人だね！

・【うぇっへっへっへの人】姉ちゃんの愛を妄想した際に奇声を漏らす

・【(*゜ω゜*)フフの人】自分の黒歴史を暴露した際に、そこはかとなく可愛い顔文字

・【ねぇちゃんの人】「姉ちゃん」よりもかわいらしい「ねぇちゃん」を発案し、書き手に衝撃を与えた……天才じゃなかろうか。

▼『ＰＡＬＵＳ』さん

感想を4回も書いてくれた人だよ！

・【Ｄａｒｋ―ｓｉｄｅの人】ティンときてダークサイドを発想する

▼感想を3回かいてくれた人だよ！

『輸入銘木』さん

▼感想を2回かいてくれた人だよ！

『ｋｉｃ』さん

『カイトシ』さん

『ガルテガルテ』さん

『ｋｏｋｏｉｔｈｉ』さん

▼感想を書いてくれた人だよ！

『日本海』
『Ｍ弐百』
『Ｓｉｅｒｐｉｎｓｋｉ』
『アーガー』
『えいじろー』
『えふえぬ』

▼特別枠『ユリキオスガンボア』さん
・【うしおととらを読み始めた人】これを読んでから興味を持って、”うしおととら”を読み始めたんだってさ！　藤田和日郎さんの「うしおととら」は最高よォ！　まァ、それを二次で叩き壊した書き手が言うセリフじゃないけどね！
▼特別枠『ぜんとりっくす』さん
・【いつもの誤字報告の人】最終話まで書き終え、最終話を書き終わってルンルンしながら感想をチェックしに行ったら、”全話分の誤字報告”をされて書き手のハートは撃墜されました。きちくぅ。でも、助かりました。
・【感想４４番の人】あんまりなタイミングで行われた誤字報告の感想番号。これは偶然か？　いいや、センチメンタリズムな運命を感じるぜ！

これにて、おしまい。

あん、何？　寂しいって？
みィんな死んでしまって悲しいと、あんたらは言うのかい。
ひひひ。
いいかね、よォくお聞き。
人間は土に生まれて土に死ぬ。
土に死ねば、この世に再び帰ってはこない。
にもかかわらず、
その土からさえ、この世に立ち帰ってくるもの。

それが、転生者なのだよ。
だから、だからさ……
ひょっとして……
いつの日か……

「うしお、のん気に朝メシなぞ食っとるバアイかーっ」
「死んでも残さねえ!!」
「母ちゃん、ごちそーさん。行ってきま……」
「まって、うしお。口の周りをちゃんと拭いて……」
「おまたせ、姉ちゃん！」
「遅いよ、もう……じゃー、行こっか。うしお♪」

ＥＮＤ

設定　白面の剣まとめ

▼一振り目
干将に目を付けて妻になる
↓神に身を捧げて祝福を受け、▪干将によって剣へ生まれ変わる
↓神様転生
↓剣になったら人間嫌いなので大虐殺
↓人の頃は「人だから人を殺してはいけない」と思って自制していた
↓「人じゃないから人を殺しても良いよね？」とのたまう▪。そんな事はありません
↓白面も人を殺すのでライバル視している
↓白面に協力している「白面の剣」の存在を知る
↓白面の剣に引狭を紹介される
↓引狭が研究のために剣を入手
↓研究に協力する代わりに、優れた使い手を要求する
ハイスクールD×Dで例えると、
人と妖の姉ちゃん↓ヴァーリ・ルシファー
人のうしお↓兵藤一誠
↓剣は妖怪の魂を食えないので、妖怪の肉体と人の魂を持つねぇちゃんは最優の使い手
↓人形として使うつもりだったけれど剣が使い手（姉ちゃん）を気に入る
↓剣が白面の剣と見なされて、姉ちゃんが白面派と見なされる
↓姉ちゃんをうしお大好き人間に育てる。名前は蒼月麻子
↓蒼月という名字は正確に言うと偽名だし、麻子は中村麻子と被ると剣は分かっていた
↓原作開始、姉ちゃんの好きにやらせる
↓姉ちゃんがうしおに救われたのならば、それで良い感じ
↓総本山で白面の剣という組織を捏造する。麻子ちゃんは無関係で悪くないとアピール

↓獣の槍を破壊したものの白面の使い・血袴・婢妖を殺したので、斗和子に疑われる
↓白面の剣という組織があると錯覚させるために、カムイコタンに西洋甲冑を置く
↓メイドさんに乗っ取られたうしおを人質にされ、〈干将〉によって破壊される
↓うしおが死ぬと姉ちゃんが悲しむので逆らわなかった
↓メイドさんを追い出そうと思っても、剣の力ではうしおごと爆散させてしまう
↓冥界で干将の下に戻る。対となる〈干将〉で破壊されたので完全に死んでいる
↓剣の性質が危険なので、獣の槍に組み込まれたという事はない
↓獣の剣に復元機能があるのは干将が、獣の剣の陽剣を造っていたから
↓〈干将〉〈莫邪〉を造ったときのように、片方だけをうしおに渡した
↓剣に打ち直したのは、陰陽剣を造った干将さんの趣味

▼二振り目

うしおの・古代行きで増えた二振り目↓うしおに持ち運ばれて、干将亡き後の〈干将〉を確保
↓ちなみにシャガクシャは剣の壊し方を知らなかった
↓うしおとシャガクシャは白面を追っていたので、こっちの剣が白面に知られる
↓白面に勧誘されて、「白面の剣」へ
↓日本で起きた大戦で白面に協力する
↓光覇明宗に嫌がらせ（殺人）をしたため敵視される
↓ちなみに一振り目は基本的に無差別殺人。姉ちゃん育成中は大人しかった
↓一振り目の剣と接触
↓一振り目に引狭を紹介する
↓一振り目が古代へ行ったら用済み。一振り目と白面の剣は別物

である事を斗和子に明かす
↓斗和子に壊し方を教えて破壊させる。干将が壊れたので弱点がなくなった
↓姉ちゃんが白面の側につく事を決意したため、白面の剣として力を貸してやる
↓白面死亡。冥界の門が閉じた後に行動再開
↓大地の要を破壊して、人が死ぬ様を見物しようとする。
↓シャガクシャに捕まって、冥界の門（穴）に放り込まれる。

番外
【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その１

「こっ、こんにちは……」
　主人公に挨拶をする麻子ちゃん。地下室への扉を塞いだ主人公は、ようやく麻子ちゃんに気付いた。暗い地下に居たから、逆光で麻子ちゃんが見えなかったのだろう……ここで主人公を殺れば、白面の大勝利だ。まあ、麻子ちゃんの好きに殺らせるつもりだから、わざわざ殺さないけど。
「どうした？　うちに何か用か？」
「あっ、あのね。お母様が潮（うしお）を助けてあげなさいって言ってね。それでね……」
「うわっ、うしろっ！」
「きゃ！　なっ、なに!?」
　お母様……いったい何者なんだ……なんて思っていると、主人公が急に声を上げた。妖気に引かれた虫どもに驚いたのか。だからと言って、麻子ちゃんに触れようとするのは自殺行為だぞ。びっくりした麻子ちゃんが剣を抜いて、危うく主人公を殺す所だった。主人王の頭の代わりに、宙を泳いでいた虫が弾け飛ぶ。
「ごっ、ごめんなさい……だっ、大丈夫？　怪我してない？」
「ああ、大丈夫大丈夫！　お兄ちゃんは元気だぞ！」
「これ、見えるか？」
「うっ、うん。見た感じ、虫怪とか魚妖かな？」
「ちゅうかい？　ぎょよう？」
「むっ、虫とか魚みたいな低級の妖怪だよ。たっ、たぶん長飛丸様の妖気に引かれたのかな？」
「ながとびまる、って妖怪か……？」
「うっ、うん。そこに居たよね？」
　麻子ちゃん、長飛丸の名前出すの早すぎー。まあ、「お母様」から聞いた事にすれば良いけど……このままだと「うしおととら」が「うし

おと長飛丸」になっちゃうなー。長々と話すのも良いけど、この後は虫どもが寄り集って集合体になる。早く獣の槍を抜いた方が良いんじゃないかな？

「あっ、あのね、早く獣の槍を抜かないと、この小さな妖怪が集まって、大きな妖怪になっちゃうって……」

「獣の槍って言うと、あのバケモンに刺さってた……」

そんな事を言っている間に、麻子ちゃんと主人公は蔵に閉じ込められる。主人公に槍を抜かせないと、白面の一人勝ちになるからなー。それは困る。本来ならば姉なのに妹と間違われるホムンクルスが、偶然道で擦れ違った風を装って言うべきセリフなのだけれど、ここで伝授しよう。

「あっ、あのね？　早く槍を抜かないと死んじゃうよ？」

でも主人公は迷っている。獣の槍を抜くという事は、地下の化物を解放するという事だ。人間を食うという化物を、解放していいか悩んでいるのだろう。常識的に考えれば封印を解いてはいけない。しかし、主人公と麻子ちゃんの命がかかっている。だから早く抜けよー。

「きゃあああああ!!」

外から悲鳴が聞こえる。タイミング悪く訪れたヒロイン２名が、虫に襲われているのだろう。すると主人公は慌て始めた。虫の壁に触れて肉を食い千切られると、次に地下室への入口に積んだ荷物を退かし始める。外の２名を助けるために、槍を抜く気になったのか。どうせなら麻子ちゃんを助けるために槍を抜きなよ。

「けけけけけけけけ！」

主人公は槍を抜いた。すると化物は主人公を打っ飛ばす。「槍を抜いたら助けてやる」と約束した化物だったけれど、そんな事はなかった。あの化物に人間を助ける気なんてない。それを見た麻子ちゃんは、主人公を助けるために地下室へ飛び込んだ。主人公は獣の槍を持ったままだから大丈夫だってー。

「よくもわしをコケにしてくれたなああ……」

「うっ、うしおに触らないで！」

るんっ

「ちいいいっ、神剣かあ!?」
サクッと化物の片手を斬り落とす。辺りは真っ暗だけど、麻子ちゃんなら問題はなかった。化物が闇の中でも動けるように、麻子ちゃんも闇の中で動ける。それは兎も角、とら……じゃなくて長飛丸の手を斬り落としちゃったよ。麻子ちゃんクレイジー。この化物、これから主人公の相棒になるのにー。
「おい、待てよバケモン。どこに行くつもりだ。まだオレとの約束が済んでないだろ……!」
「だれが人間との約束なんて……ひっ!?」
「きさまーッ!」
「ひゃあああああ!?」
悲鳴を上げて逃げる化物を、獣の槍の使い手となった主人公が追う。そうして主人公と化物は蔵から出て行った。麻子ちゃんも地下室から上がる。すると蔵を包んでいた虫どもは吹っ飛んで、蔵の出入口から光が差し込んでいた。もう剣を収めても良いだろう。麻子ちゃんが蔵から顔を出すと、近くで主人公と化物が言い争っていた。
「おっ、お話は終わり?」
ぜんぜん終わってない。むしろ話し中だったよ! 声をかけた結果、主人公と化物に注目されて麻子ちゃんは怯える。麻子ちゃんは主人公と化物を交互に見ていた……ああ、なんで化物を殺さないのか不思議に思ってるのか。だから化物は主人公の相棒（予定）だって。その主人公の相棒（予定）を敵視するのは良くない。手を斬り落とした事を謝って許してもらおう。
「こっ、こんにちは、長飛丸様。うしおと、よろしくね?」
「あぁ? 長飛丸だぁ? そんな古い名前は知らねーし、このクソ人間なんかと、よろしくもしてやらねーよ」
麻子ちゃん、さりげなく喧嘩を売るのは止めてくれないかなー。主人公の相棒（予定）だけど、初期の今は仲が悪い。主人公は化物を倒すために側に置き、そんな主人公を化物は食おうとしている。それなのに「よろしくね?」って化物に言っても、そりゃー断られる。
「でっ、でも字伏（あざふせ）は種族名みたいな物だし……」

それって化物が嫌がると分かった上で言ってるよねー。これは主人公が横から口を出して、名前が決定する流れかな……それで変な名前になるくらいならシャガクシャ様にしよう。わざわざ「様」を付けるのがポイントです。本人は忘れてるけど、化物が人間だった頃の名前だ。この名前を呼べばトラウマを掘り返せるかも知れないよー。
「……じゃっ、じゃあ、シャガクシャ様って」
「なんだ、そりゃ？　わしの何所を見て、シャガクシャなんて妙な名前を……」
「いーじゃねーか、バカ妖怪。せっかく、この子が名前を付けてくれたんだから貰っておけよ。それとも嫌だってのか……？」
「あいたたたたた。分かった！　分かりました！　だから槍でわしを打つな！」
「じゃっ、じゃあ改めて、よろしくね。うしお、シャガクシャ様」
化物もといシャガクシャ様の手を斬り落とした事を、謝るつもりはないらしい。シャガクシャ様が主人公を殺そうとした事が、そんなに許せないのか。シャガクシャ様と獲物の取り合いだ。まさか麻子ちゃんが、シャガクシャ並みの危険人物とは思うまい。主人公は気付いてないけど、すでに1回死にかけている。
「オレは蒼月潮。君の名前は？」
「あっ、蒼月麻子だよ？」
麻子はヒロインの名前だ。もちろん偶然ではなく、意図して名付けた。しかし命名したのは、ヒロインの1人である中村麻子の「生まれる前」だ。こっちが先に名付けたのだから、どこにも変な所はない。ただ……蒼月という名字は麻子ちゃんの自称だ。生みの親の名前は蒼月じゃないからなー。
「えっ、本当に？」
「うっ、うん。お母様が『貴方のお父様は光覇明宗で優秀な法力僧だけど、獣の槍に選ばれなくて酒に逃げた蒼月紫暮です』って言ってたよ？」
お母様に責任を擦り付けた上に、主人公の父親の汚点を晒す麻子ちゃん。あと「光覇明宗で優秀な法力僧」や「獣の槍に選ばれなくて

酒に逃げた」というキーワードまで喋っている。まあ、その程度の情報ならいいけど……麻子ちゃん、ちょっと調子に乗ってるよね？

「……ところで麻子さんは何歳なんだ？」

「あっ、麻子でいいよ。歳は１６歳だけど？」

発育不良で言動も幼いけど、これでも主人公の歳上だぞ。似た遺伝子を持つ主人公と比べて、麻子ちゃんの背が低いのは仕方ない……話を終えると、主人公と麻子ちゃんは住家の方へ向かった。そういえばヒロイン２名も虫どもに襲われてたっけ。麻子ちゃんの事だから、うっかりヒロインを殺さないと良いけど……。

【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その２

住家の中に隠れていたヒロイン２名が、主人公に泣きついた。その様子を眺める麻子ちゃんは少し落ち込んでいる。主人公に抱きつけるヒロインが羨ましいのだろう。ヒロインと同じ事をするのが、麻子ちゃんにとっては死ぬほど難しい。斬っちゃうからなー。そうして２名が落ち着くと、主人公はノートを取りに行った。ヒロイン２名と麻子ちゃんという「混ぜるな危険」の組み合わせを居間に待たせて。

「あたしの名前は中村麻子、貴方は？」

「あたしは井上真由子っていうの、よろしくね」

「あっ、蒼月麻子だよ？」

「へー、麻子ちゃんって言うんだ。偶然ね？」

「麻子ちゃんは蒼月くんの親戚？」

「ちっ、違うよ……私はうしおのお姉ちゃんだよ？」

ヒロイン２名に詰め寄られて、麻子ちゃんは怯える。剣を収めた鞘を、麻子ちゃんは握り締めていた。さっきヒロイン２名は主人公に泣き付いてたしなー。麻子ちゃんは今にも剣を抜きそうだ……こんな所でヒロインを殺しちゃダメだって。主人公に嫌われちゃうよ？

「ちっ、近付かないで！」

るんっ

忠告したとしても、抜いちゃうのが麻子ちゃんだ。頭よりも先に体が、麻子ちゃんの剣を握る手が動く。２名に接近されて、麻子ちゃんは剣を抜いた。しかし、井上真由子が中村麻子を押し倒した。おかげで麻子ちゃんの剣は、宙を斬る。剣という長大な刃物を見て、２名は恐怖の表情を浮かべた……その２名以上に恐怖しているのが麻子ちゃんだけど。

「なにするのよ！　危ないじゃない！」

「ごっ、ごめんなさい……」

「そんな危ない物はしまって、ね？」

「うっ、うん……」

麻子ちゃんは剣を収める。でも、剣を手から放すことはない。麻子

ちゃんが2名に気を許すつもりはなかった。そんな麻子ちゃんに気の短い方が怒り、気の長い方がなだめている。麻子ちゃんはカタカタと体を震わせていた……居間の雰囲気が最悪です。しゅじんこー、早く戻ってきてー。死人が出るよー。

「あっ、蒼月くん！　この子って蒼月くんと麻子の――」

「だまらっしゃい、真由子！」

　主人公が戻ってきたため、これ幸いとヒロイン2名は話題を換えた。2名の楽しそうな様子を見ている主人公は、少し前まで一瞬即発の状態だったとは思うまい。麻子ちゃんは隅の方で小さくなっていた。バタバタと騒がしいヒロインを、麻子ちゃんは邪魔に思っている。ちなみに麻子ちゃんのヒロイン2名に対する好感度は最低だ。

「話は聞かせてもらったわ！　あたしの名前は中村麻子よ！」

「あたしは井上真由子っていうの、よろしくね」

「わっ、私は蒼月麻子だよ？」

　その流れは、もうやった。

「あんたが麻子って呼ぶから紛らわしいのよ！　お姉ちゃんって呼べばいいじゃない！」

　それでは麻子ちゃんが、麻子と呼んでもらえなくなる。嫌がらせか？　なんて思ったけれどヒロインの善意だろう。でも、麻子ちゃんは良い気はしないよなー。そもそも「ヒロインの麻子」は中村と呼ばれ、主人公に麻子と呼ばれる事は少ない。余計なお世話ってやつだ。

「ね……姉ちゃん？」

「うっ、うん……」

　主人公に名前で呼ばれて、麻子ちゃんはフリーズする。そばに「ヒロインの麻子」が居なければ、「姉ちゃん」と呼ばれても良かったんだけどなー。麻子ちゃんにとっては、「麻子」という名前をヒロインに盗られたようなものだ。まあ、このために同じ名前を付けたんだけど。

　ヒロイン2人が帰る時、麻子ちゃんは主人公から引き離された。「ヒロインの麻子」が主人公にコソコソと話をしている。どうやらヒロインに斬りかかった事を「告げ口」しているらしい。それは麻子ちゃんも聞き取っていた。ヒロインにとっては善意で主人公に「警

告」しているのだろう。でも、麻子ちゃんにとっては黙っていてほしい話だった。ヒロイン2人が帰ると、麻子ちゃんの番だ。
「……姉ちゃん。じつはオヤジの奴、いま遠くに出かけてるみたいなんだ。一週間くらい経ったら帰ってくると思うけど」
「そっ、そうなんだ……あっ、あのね？　お父様が帰ってくるまで居ちゃダメかな？」
「うーん。でも、こいつが居るしなぁ……」
主人公の家に泊まる作戦も失敗する。原因はシャガクシャ様だ。シャガクシャ様の人食いを警戒している主人公は、麻子ちゃんを家に泊まらせたくない。麻子ちゃんのシャガクシャ様に対する敵対心が溜まっていく……シャガクシャ様は麻子ちゃんのライバルみたいな物だけど、主人公の相棒だから仲良くしておいた方がいいんだけどなー。

翌日、麻子ちゃんは学校を訪れた、化物の臭いを麻子ちゃんが嗅ぎ取ったからだ。おそらく大ムカデの妖怪変化が潜んでいる。出現場所も正体も麻子ちゃんに教えた。でも、弱点は教えていなかった。まさか、あんなに生命力が強いとは思わなかったなー。
結局、主人公のツバを使って大ムカデは倒される。本来ならば石食い発見まで時間がかかり、ニュースの取材班まで来ていた。でも駆けつけた麻子ちゃんがスピード解決したので取材班は来ていない。なので石食いと戦う主人公とシャガクシャ様の姿が、テレビ番組で報道される事はないだろう。
その代わりとして、主人公の変化する瞬間を他人に見られた。これは不味い……麻子ちゃんと主人公の、2人だけの秘密ではなくなる。あとで主人公の家に、ヒロインが押しかけて来るに違いない。やっぱり麻子ちゃんの恋路にヒロインは邪魔だなー。機会があったら片付けておくべきだろう。主人公に疑われない機会があったらね。

さて、シャガクシャ様の好感度を上げておこう。麻子ちゃんが化物の臭いを嗅ぎ取った事から気付いたけど、シャガクシャ様は麻子ちゃ

んの正体に気付いているかも知れない。主人公とシャガクシャ様は仲が悪いけれど、主人公と麻子ちゃんの仲が進展する前に暴露されるのは困る。そういう訳で、麻子ちゃんに用意したセリフを読んでもらった。

『(甘えるように)あっ、あのね、(尊ぶように)シャガクシャ様。(嬉しそうに)今日は助けてくれて、ありがとう』

「あっ、あのね、シャガクシャ様。今日は助けてくれて、ありがとう」

「おめえのために助けたんじゃねーよ。あの忌々しい小僧が、わしに必死こいて助けを乞う姿が見たかったのよ」

『(戸惑うように)うっ、うん。(恥ずかしそうに)でもシャガクシャ様が弱点を教えてくれなかったら、私も危なかったから……』

「うっ、うん。でもシャガクシャ様が弱点を教えてくれなかったら、私も危なかったから……」

『(媚びるように)だから、ちょっとだけなら、かじっていいよ?』

「だから、ちょっとだけなら、かじっていいよ?」

　と言いつつも、麻子ちゃんはシャガクシャ様が嫌いだ。かじろうとしたら容赦なく斬るだろう。あんなセリフを読ませたけれど、こっちもシャガクシャ様に麻子ちゃんをかじらせる気はない。お前はパンでも食ってろー、という気分だ。だから「御礼をしたい→かじらせない→だから他の事で御礼する」という流れに持っていく。

「姉ちゃん!　なに言ってるんだよ!」

　そこへ横から主人王が割り込んだ。不用意に近寄るなー!　主人公だろうとヒロインだろうと斬る時に容赦はない。思った通り主人公は、麻子ちゃんに剣で斬られそうになった。でも主人公は今回も上手く避ける。運が良いのか、運動能力が高いのか……そういえば主人公は「おまえに美術部は合ってない」って言われてたなー。するとシャガクシャ様も、麻子ちゃんから身を引いた。

「けっ、混じりもんの肉なんぞ食えるかよ」

「混じりもんって、どういう意味だよ?」

　あっ、シャガクシャ様が見えていた地雷を踏んだ。麻子ちゃんは緊張して、剣を握る。下手な事を言う前に、シャガクシャ様の口を封じ

るつもりなんですね。そんな麻子ちゃんの様子に主人公は気付いていない。でもシャガクシャ様は、主人公の向こうで剣を握る麻子ちゃんが見えていた。麻子ちゃんは剣先をチラチラさせる。
「……じつはわし、朝から石食いの事を知ってたのよ。妖怪同士はニオイで分かるからな。ヤツの結界が目の前にあるのに、必死で探し回るおめーがマヌケでよー。ぎゃはははははは！」
「そういう事は早く話せよ、タコ！」
「コラ、勘違いすんなよ小僧！　わしはおまえに取り憑いてるんだぜ、食うためによ……人間なんぞクソくらえだ！」
　シャガクシャ様は誤魔化したらしい。懸命な判断だ。命拾いしたな……麻子ちゃんセーフ、セーフだよー！　たぶん主人公は気付いていない。争う2人を前に麻子ちゃんはアワアワしているけれど、内心は「シャガクシャ様死ね」と思っているに違いない。心配性な麻子ちゃんにとっては、いつ秘密を暴露されるか不安で仕方なかった。

【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その３

麻子ちゃんは、みそ汁を作る。餌付け作戦だ。シャガクシャ様に対する御礼だけど、麻子ちゃんは乗り気じゃない。そこで、みそ汁を作る事をすすめた。「お母様に伝授されたみそ汁」と言えば、主人公は反応を示すだろう。母親の居なかった主人公にとって、母親を感じさせる物はウィークポイントなはずだ。

「姉ちゃんのみそ汁かー」

「おっ、お母様がみそ汁だけは作れるようにって教えてくれたの」

これは本当だ。なにしろ麻子ちゃんの味覚は人外だからなー。麻子ちゃんの味覚に合わせると、人の食える料理にはならない。だから「お母様」に協力してもらう必要があった。調味料を加減するなんて事はできないから、麻子ちゃんは正確に材料を量る。少なくとも口に入れた瞬間に吐き出すような料理にはならないだろう。まずはシャガクシャ様に、みそ汁が差し出された。

「シャッ、シャガクシャ様、どうぞ……」

「けっ、妖怪がこんなもん食うわけないだろ」

麻子ちゃんが目を伏せる。主人公のために作った料理を、仕方なく嫌いな妖怪に食べさせようと思ったら断られ……麻子ちゃんは怒っていた。みそ汁は「助言をしてくれたシャガクシャ様に対する御礼」という事になっている。だから「お前のために作ったんじゃねーよ」とは言えなかった。すると主人公が獣の槍で脅し、シャガクシャ様はみそ汁を食べ始める。

「あー？　なーんか頭に引っかかるな……？」

おや、シャガクシャ様の様子が……古代の記憶に引っかかったか？

それはシャガクシャ様が人間だった頃の記憶だ。類似する場面としては、シャガクシャ様を慕っていた姉弟との一時かな。芋のスープを飲んでいた。おそらく姉弟という共通点が大きかったのだろう。

「シャガクシャァ！　てめー、もうちょっと味わって食えよ」

「なんだと小僧？　わしに指図するんじゃねえ！」

主人公の突っ込みで、思い出しかけていた記憶は吹き飛んだらし

い。ちぇー、シャガクシャ様が麻子ちゃんを気にするようになれば話は早かったんだけど……その後、主人公と言い争った結果、シャガクシャ様は鍋ごとみそ汁を食べる。でも、主人公に叩かれて鍋を吐き出した。妖怪は鉄が苦手だからー。

一週間が経ち、主人公の父親が帰ってきた。その父親のすすめで、麻子ちゃんは主人公の家へ泊まる事になる。今までシャガクシャ様のせいで拒否されていたから、主人公の家に泊まれる事を麻子ちゃんは喜んだ。良かったねー。その夜、主人公の部屋の電気が消えた事を確認すると、麻子ちゃんは父親の部屋へ向かう。主人公の父親に麻子ちゃんの体を見せ、味方に引き入れるためだ。麻子ちゃんには恥ずかしい思いをさせてしまうな……。

「こんな遅くに、なにか用かな？」

「おっ、お父様には言っておかなくちゃって思って……」

今の麻子ちゃんは武器を持っていない。大事な剣は部屋の外だ。そこへ主人公がやってきた……あれ？　お手洗いかな？　そう思ったけれど、主人公は父親の寝室へ直行してくる。そして扉の前で足を止めた。まさか麻子ちゃんの行動に気付いて追ってきたのか？　このまま会話を盗み聞きする気なのだろう。麻子ちゃん、大変だー！

主人公が扉の前にいるよー！

「はっ、恥ずかしい……」

そんな麻子ちゃんの声を聞くと、主人公がはスパーンと扉を開けた。麻子ちゃんは……全裸だ。未発達な体を、父親に晒している。寝る前だったため、側に布団が敷かれていた。良かった……麻子ちゃんの本性は見られなかったか。これならば父親が麻子ちゃんを裸に剥いたように見えるだろう。

「なにしてやがる、この生臭坊主がーっ！」

「なにを勘違いしておるバカ息子がーっ！」

その後、父親によって主人公は返り討ちにされた。そして今さらながら、獣の槍で妖怪を封じた事を説明される。その槍なら、もう主人公が抜いちゃったけどー。その妖怪も後ろでアクビしてるけどー。

おまけに見えない振りをしている父親が、妖怪を目視できる事を知っている麻子ちゃんとしては茶番だった。でも、麻子ちゃんは空気が読めるので、主人公に余計な事は何も言わない。

翌日、麻子ちゃんは主人公と共に出かける。2人きりならば良かったけれど、ヒロイン2名と一緒だ。まあ、そもそもヒロインに誘われたのだから、「主人公と2人きりになりたい」なんて我がままは言えない。麻子ちゃんは大人しく主人公の後を付いて回る。でも、ある絵の側へ行くと、シャガクシャ様と共に足を止めた。

「か～～っ、やだね～～。この『絵』とやらを描いたヤツは、別の人間どもを呪って死んでいったな。そうして死んでいった者は普通――鬼になる」

「ちっ、違うよ、シャガクシャ様。憎悪でも……愛情でも……、一つの想いに囚われた人は鬼になるんだよ？」

「けっ、大して変わりゃしねーよ……にしても、いつもは大人しいガキが、今日は語るじゃねーか」

「うっ、ううん……愛しているから殺すのと、愛したいから殺すのは違うから……」

太陽に触れたければ、その火を消してしまえばいい。空を飛び鳥に触りたければ、その羽を折ってしまえばいい。でも、火を消された太陽は、羽を居られた鳥は、まったくの別物だ。人に触れたいからと言って、その心を殺せば、ただの生ものに成り果てる。でも、それが麻子ちゃんの愛だった。

麻子ちゃんと主人公が一緒に登校する。すると、主人公の妖怪退治を知った学生達に話しかけられる。麻子ちゃんと主人公は人気者になっていた。でも、麻子ちゃんにとって心地のいい物ではない。人に好意を向けられると麻子ちゃんは不安になる。だから殺してしまいたかった。

校門の前で主人公が、学校の先輩に絡まれる。足を引っかけられて、転ばされて、殴られた。するとカッとなった主人公も殴り返す。

でも、先輩の方が優勢になって、一方的に主人公は殴られるようになった……ああ、うん。ちょっと落ち着こうか麻子ちゃん。無理？

――るぅん

「あっ、あなたは殺してもいい人間？」

麻子ちゃんが剣を抜いた。主人公を傷付けられて、とてもお怒りの御様子だ。でも、ダメです。そいつは殺しちゃいけない人間です。正確に言うと、この場で殺しちゃいけない。「主人公が殴られたから殺した」じゃ過剰防衛になる。こんな所で殺したら言い逃れできないよー。

「姉ちゃんストーップ！」

主人公が麻子ちゃんを止めた。これまでの経験から学習したのか、麻子ちゃんに接触を試みる様子はない……でも、ちょっと麻子ちゃんは寂しそうだ。近付けば斬り、遠退けば寂しがる。面倒……じゃなくて複雑だった。ちなみに剣の音色を聞いても主人公が平気なのは、獣の槍のせいだろう。他の人間は汚染され、立ち上がる事すらできない。

「――わたしを斬りなよ。なんなら、殺してくれてもかまわない」

ターゲットが現れた。鬼の憑いている人間だ。他の人間と違って、その人間は立っている。たしか「死にたがりの羽生」だったか。憑いている鬼のせいで周囲の人間が傷付き、何度も自殺を試みているとか。それくらい正気度が下がっていると、あの程度の音色ならば耐えられるらしい。

「あっ、あなたに憑いている鬼を斬りにきました」

「バカな事を……言わないで」

麻子ちゃんが申し出たものの断られた。他人に対する信用度が下がっている有り様に、好感を覚える……でも、こちらの求める有り様とは違うか。すると麻子ちゃんは剣を、鬼の娘の首筋に当てた。鬼を誘き出すためだろう。まさか本当に殺す気はあるまい……すると、麻子ちゃんと鬼の娘は、風の壁によって周囲から隔離される。でも麻子ちゃんは慌てず、鬼に斬りかかった。

『ぐおおおおお!!』

「とうさん！」
麻子ちゃんは鬼を斬る。すると傷口ではなく、角の生えた頭を押さえた。鬼の様子に構わず麻子ちゃんは斬るものの、すぐに傷口は塞がる。残念だけど麻子ちゃん、この鬼の本体は、鬼の娘の家にある絵画だ。斬っても無駄と分かると、麻子ちゃんは鬼から離れる。そこへ風の壁を抜けて、主人公とシャガクシャ様も駆けつけた。
「おー、思いだした。あのガキの剣、見覚えがあると思ったぜ」
「獣の槍が妖怪を殺すための槍なら、ありゃー人間を殺すための剣よ」
「あの鬼は――鬼になっても残っていた「人間」を殺されたのさ」
『礼子だけだ……わたしには礼子だけなんだ……』
『礼子は父さんのものだ……守ってやる、守ってやるぞ』
『礼子は私といるのが幸せなんだ』
『――だから食いたい』
悪いね……人を斬れば、人を殺さずには居られない。あれだけ何度も斬ったから、人の心なんて残っていないだろう。でも、仕方ない。麻子ちゃんも剣も、そういうものだ。本来ならば獣の槍によって鬼は倒され、人の部分は残る。でも、鬼を斬ったのは剣だ。だから陽である人の部分は斬り捨てられ、陰である鬼の部分しか残らない。かつて娘の父親だった人間は死んだ。
『れいこおおお、食ろうてやるぞおお!!』
「……おとう……さん？」
鬼は娘を連れ去った。麻子ちゃんは鬼を追って、洋館へ辿りつく。そこに主人公の姿はなかった。麻子ちゃんに追い付いて来れなかったのか……洋館へ入った麻子ちゃんは絵画の下へ行くと、さっそく剣を打っ刺そうとする。でも、鬼は絵画を持って逃げた。そのまま飛んで行こうとする鬼を、麻子ちゃんは追う。
ちょっと麻子ちゃん、たぶん絵画の中に連れ去られた娘が入ってると思うんだけど……麻子ちゃんは迷いなく絵画を壊すつもりだった。麻子ちゃんは娘を助ける気がない？　よく考えると今ならば、主人公と娘の間に深い繋がりはない。将来ヒロインに昇格する恐れのある娘を、麻子ちゃんは排除する気なんじゃないかな。

麻子ちゃんは絵画を狙う。でも鬼の腕に防がれた。鬼の腕は斬り刻まれ、その手から絵画が落ちる。麻子ちゃんは落ちる絵画を追うけれど、その隙に鬼の手で捕らえられた。地上を見ると主人公がいる。それと鬼の娘の知り合いが1人いる。あの人間に場所を教えてもらったのだろう。

「姉ちゃん！」

「そっ、それに人がはいってるの！」

いかにも「中の人を助けるために戦っていた」ような事を麻子ちゃんは言う。でも、中の人を助ける気なんてなかったでしょー。麻子ちゃんが鬼の手から抜け出そうとしている間に、主人公は絵の中に入った。麻子ちゃんが鬼の腕から抜け出すと、主人公も絵から娘を引き出す。

「姉ちゃん！」

ガキッ

麻子ちゃんは絵に、剣を振り下ろした。でも、刃が通らない。やっぱり鬼を絵に戻さないとダメなのか……生命力の高い大ムカデといい、不死の鬼といい、相性の悪い化物が続くなー。すると鬼は、娘と主人公を捕まえる。麻子ちゃんは主人公の手を掴もうとしたけれど、他人に触れない麻子ちゃんは最後まで手を伸ばせなかった。鬼の娘と主人公は絵に引き込まれる。そうして麻子ちゃんとシャガクシャ様だけになった。

「たっ、たいへん！」

麻子ちゃんは慌てている。でも、自分から助けに行こうとしない。チラチラとシャガクシャ様の様子を探っていた……おかしいな。麻子ちゃんならば助けに行くと思ったけれど、その様子はない。シャガクシャ様が助けに行くのを待ってる？　それは麻子ちゃんらしくなかった。

「あ～!!　ホンっっとに腹が立つ！」

そう言って主人公を引き出し、シャガクシャ様が絵に飛び込む。すると主人公が鬼の娘を引き出した。続けて絵を飛び出したシャガクシャ様が、麻子ちゃんに合図を送る。麻子ちゃんは剣を絵に振り下ろ

した。そこに飛び出す影がある。鬼の娘だ。でも麻子ちゃんが剣を止める様子はなかった。殺す気だー!?

ちょっと麻子ちゃんストーップ!

そう言ったけれど麻子ちゃんは止まらない。剣は鬼の娘と、絵画を斬り裂いた。剣に斬られた娘の体は爆散する。チリも風に飛ばされて、後には何も残らない。明らかに悪意を持って、麻子ちゃんは人を殺した。それなのに麻子ちゃんは、まるで誤って殺してしまったかのような態度だ。

「ごっ、ごめんなさい!」

「人殺し。悪魔め! どうして礼子を殺した!? なにも殺す事なんてなかっただろうが!!」

「ごっ、ごめんなさい……」

まったくだよ! あいにく蘇生なんてできない。鬼の娘は死んだ。麻子ちゃんは謝っているけれど、それほど悪い事をしたとは思っていないよね。人殺しを責められて、怯えてはいるけれど……まー、そうだろうね。麻子ちゃんが気にしているのは主人公の反応だけだ。この主人公を傷付けた学校の先輩が殴り掛かってきたら、正当防衛と称して排除するに違いない。だって麻子ちゃんは剣を抜いたままなんだから。

でも学校の先輩は、主人公に取り押さえられた。命拾いしたねー。先輩と主人公が喧嘩している様を見て、麻子ちゃんは密かに喜んでいる。ヒロインを殺した麻子ちゃんを、主人公が庇っているからだ。つまり「死んだヒロインよりも麻子ちゃんの方が大事」だって? いいや、その理屈はおかしいよ……。

【Ｄａｒｋ　ｓｉｄｅ】その４

ヒロイン候補を殺した日から、麻子ちゃんは元気がない。それはヒロイン候補を殺したから……ではなく、主人公が落ち込んでいるからだ。主人公の元気がないと、麻子ちゃんも元気がない。麻子ちゃんは人が死んで悲しむような性格じゃないからねー。ほとんど関係のなかった羽生礼子を殺して、”なぜ主人公が悲しむのか”、麻子ちゃんは分かっていなかった。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい……」

主人公の登校を麻子ちゃんが見送る。主人公の父親に宿泊の許可をもらった日から、麻子ちゃんは主人公の家に住んでいた。あれは”宿泊の許可”であって”同居する許可”じゃないと思うんだけど……まあ、弱っている麻子ちゃんを追い出すなんて事を、主人公はしなかった。それを良い事に麻子ちゃんは、主人公の家に居座っている。そして半日後……、

「ただいまー」

主人公が帰ってきた。学校で何かあったのか、主人公の顔色は明るい。そんな主人公を見た麻子ちゃんの顔色も明るくなった。すると主人公は真剣な表情で、麻子ちゃんと向き合う。何を言われるのか不安になって、麻子ちゃんはドキドキしていた。まさか告白かー!?

「オレも一緒に行くから――姉ちゃん、自首しよう」

「うっ、うん……」

そんな事だろうと思った。でも、麻子ちゃんにとっては予想外の発言だ。麻子ちゃんは思わず、主人公に頷いた。それにしても自首か……その発想はなかった。麻子ちゃんは主人公に連れられて、近くの交番へ向かう。麻子ちゃんが何もしない間に主人公が事情を説明し、どんどん話は進んで行った。そして迎えとして、主人公の父親がやってくる。

警察官ではなく父親が来たという事は、連れて行かれる先は警察署ではなく光覇明宗か。父親が法力僧である事を知らない主人公は、そ

の事に気付かない……光覇明宗の総本山へ連れて行かれるのは危険だなー。ここで逃げるべきなんじゃないかと思う。でも麻子ちゃんは、光覇明宗の総本山へ行く事を選んだ。

ここで逃げれば主人公と別れる事になるからだ。主人公と別れるのが、麻子ちゃんは死ぬほど怖かった。”嫌”なのではなく”怖い”。主人公に対する依存度が高すぎる……そうなるように刷り込んだ本人が言うのも何だけどー。こちらの意見よりも、主人公の事を優先するのは問題だ。とは言っても結局、麻子ちゃんが主人公と共に行くのならば、それを止める事はしない。

空飛ぶヘリコプターに乗っていると、外を飛んでいたシャガクシャ様が何かに打ち当たる。見えない壁だ。本山の結界だろう。シャガクシャ様は結界の外に置いて行かれる。でも、麻子ちゃんは結界に引っかからなかった。麻子ちゃんの半分は人間だ。だから人間の通れる結界ならば擦り抜ける事ができる。ただし、この結界の中にいると人間じゃない方は使えなくなるだろう。

「オヤジ、ここって何所だ？」

「光覇明宗の総本山だ」

主人公の父親に先導されて、麻子ちゃんは敵地の奥へ引き込まれる。何も知らない主人公は困ったものだ。でも、だからこそ麻子ちゃんが酷い目にあえば黙ってはいないだろう。そうなる事を麻子ちゃんは期待していた……そのために自分の命を賭けるのは止めて欲しいなー。まあ、麻子ちゃんが危なくなったら、こちらの手札を切って助けるよ。

「武器の類いは、ここに置いて行け」

主人公の槍と麻子ちゃんの剣を僧侶に預ける。すると大広間に繋がる襖障子が開かれた。その場にいる数多くの僧侶の視線が、一斉に麻子ちゃんを襲う。たくさんの視線を向けられて、麻子ちゃんは怖くて仕方がなかった。でも、麻子ちゃんの手元に剣はない。今にもパニックを起こしそうだ。

そんな麻子ちゃんの手を主人公が握る。主人公に手を握られた麻子ちゃんの心は、”歓喜”と”恐怖”でグチャグチャになった。主人

公と触れ合えて嬉しいと思うと同時に、拒絶される事を恐れている。麻子ちゃんは妄想の中で、主人公に突き放される光景を思い描いていた。

そんな事を主人公は行わないと思うけれど、麻子ちゃんの精神はマイナスの妄想で磨り減らされる。麻子ちゃんは楽しい事なんて思い浮かべない。簡単に言うとネガティブだった。麻子ちゃんは手を握り返す事もできず、人形のようになって主人公に引っ張られている。

「これより羽生礼子を死に至らしめた自称・蒼月麻子と蒼月潮の処分を言い渡す。一、蒼月麻子は滅殺処分とする。二、蒼月潮は光覇明宗にて指導処分とする」

光覇明宗は獣の槍を確保する気か。そもそも光覇明宗は、獣の槍を護るために生まれたからなー。主人公に対する罰が緩いのは、なにか事情があるのだろう。主人公に対する罰を軽減する代わりに、麻子ちゃんに対する滅殺処分を引き出したのかも知れない。わざわざ自首してきた状況で、封印処分を通り越して滅殺処分というのは気が短すぎる。あるいは、これも白面の策と思って過度に警戒されているのか。

処分に対して反論していた主人公が、大広間の外へ連れ出された。麻子ちゃんは残され、大広間に結界が張られる。このまま見過ごせば麻子ちゃんは死ぬ。でも、麻子ちゃんが逃げ出そうと試みる気配はない。と言っても、麻子ちゃんが死を受け入れている訳じゃなかった。

麻子ちゃんは主人公に助けられる事を期待している。主人公が麻子ちゃんを助ければ、主人公は麻子ちゃんの味方という事になるからだ。とうぜん主人公は麻子ちゃんと共に、光覇明宗の敵となるだろう。主人公は如何するのかな。でも主人公が助けなかった時は、こっちで勝手に助けるよー。

「おんっ！」

大広間にいた僧達の法力で、麻子ちゃんが締め付けられる。主人公は麻子ちゃんを助けるために、父親へ挑みかかった……でも、あれじゃダメだ。主人公を待っていたら、麻子ちゃんが潰される。剣を使おう。麻子ちゃんの剣は数珠によって封印されているけれど、その程

度で封じられる剣ではない。
剣が僧侶を乗っ取る。体を乗っ取られた僧侶は、主人公の父親と、獣の槍を持っていた僧侶を打ち倒した。よかったよかった、主人公の父親が下手に起きていると巻き込むからなー。そして僧侶は白い剣を抜き、鳴らす。〝るぅぅぅん〟という音が鳴り響き、大広間に張られた結界を擦り抜けて、中にいる僧侶たちを襲った。
さて、これで一安心だ。でも、お役目様の結界に防がれたから、全滅させたとは言えない。そう思って主人公を見ると、首を掻きむしっていた……ごめん、忘れてた。主人公も槍を持っていないと、この様だ。獣の槍を拾って、主人公の頭をペチペチと叩く。すると主人公は正気に戻った。
「だっ、だれだ……？」
「我等は『白面の剣』よ」
「白面の剣？　たしか姉ちゃんの事を、そう呼んでいた奴がいた……」
「我等は『白面の剣』であり、汝の姉も『白面の剣』である。時間がない。先に行くぞ」
『おのれ、よくも皆を！　私の体を返せ！』
主人公と話している横で、体を乗っ取られた僧侶の魂が叫んでいる。もちろん答えはＮＯだ。ちょっと煩いので、ゴリゴリと魂を削って黙らせる。左手に真っ白な剣を持ち、右手に獣の槍を持ったまま、大広間へ踏み入った。無事な法力僧達は、こちらに向けて力を高めている。なにか仕掛けてくるのかも知れない。でも、お役絵様の結界を解除しなければ、あちらからの攻撃も遮断されるだろう。
獣の槍で天井を打ち抜き、総本山に張られた複数の結界を破壊する。それに釣られてやってきたシャガクシャ様に麻子ちゃんを載せた。その際、シャガクシャ様が人間の塊を投げ捨てる……〝飛頭族の事件〟に会ってないからなー。飛頭族の殺人をシャガクシャ様の殺人と勘違いして、主人公が怒る事件だ。あの事件に会ってないからシャガクシャ様は、人を殺せば主人公が激怒すると分かっていないのだろう。
「おい、小僧。こっちへ来るってーことが、どーゆーことなのか分かっ

てんのか？」
　こちらへ来ようとしていた主人公に、シャガクシャ様が問いかける。麻子ちゃんを助けるという事は、光覇明宗と敵対するという事だ。そういうシャガクシャ様は、麻子ちゃんを助ける気なんて無い。でも剣で脅したとは言え、麻子ちゃんを背中に載せる事は見逃してくれている。
「わりぃな、オヤジ。今まで育ててくれて、ありがとよ」
　そう言って主人公は、こちらへ来る。平穏よりも家族よりも、主人公は麻子ちゃんを選んだ。よかったー。もしも主人公が麻子ちゃんの敵に回ったら、思い詰めた麻子ちゃんに刺されたかもね。だからと言って麻子ちゃんの側にいるのも、主人公にとっては危ないんだけど。麻子ちゃんにロックオンされた時点で、麻子ちゃんによる死亡フラグが立っている。
「あんたは、どうするんだよ……？」
「ひひひ……獣の槍の伝承者よ。魂を食われた人間の末路を教えてやろう。真似はするなよ？」
『おのれー！』（↑ここ僧侶）
『獣の槍の伝承者よ。憶えておけ。こうなれば、もはや人には戻れぬ――永久の別れだ』
「なにやってんだ！　待てよ……！」
　この僧侶は用済みだ。僧侶の魂を食らって、姿形を化物へ変える。なんだかカッコイイ感じのセリフを言って、すぐに主人公の下を去った。これ以上しゃべってると、面白すぎて笑っちゃうわー。主人公は「裏切った僧侶が命を賭けて護ってくれた」と思っているかも知れないけれど、これって体を乗っ取ってるだけなのよー。
　魂を食われて西洋甲冑と化した僧侶は、お役目様の結界に体当たりを仕掛けた。お役目様の結界は〝白面の者〟を封じるほど強い。並みの妖怪ならば一瞬で消し飛ぶだろう。でも、その結界に西洋甲冑が触れても消し飛ばなかった。そうして西洋甲冑に止めを刺したのは、法力僧たちの攻撃だ……お役目様は弱っている。
　その間にシャガクシャ様は、主人公と麻子ちゃんを乗せて飛び立

つ。光覇明宗の総本山から離れた。主人公は自宅へ帰ろうとしているけれど、こちらとしては麻子ちゃんの家へ行きたい。光覇明宗が主人公の自宅で待ち伏せしている恐れがあるし……主人公による「麻子ちゃんのお宅訪問イベント」のチャンスだ。きっと麻子ちゃんは喜ぶだろう。その意見を伝えるために、気絶している麻子ちゃんの体を借りた。

「わ……わたしの……家……」

「姉ちゃん！　まだ安静にしてないと」

なんやかんや言って、麻子ちゃんの家へ主人公を誘導する。家は山の中にあるし、辺りは真っ暗だし、人の目では見つからない。でもシャガクシャ様がいるから大丈夫だろう。麻子ちゃんの家の近くに配置している人形を目印にして、シャガクシャ様に家のある方向を教えた。▪あとは真っすぐ飛ぶだけだ。